

## 6 病害虫関係資料

(1) 令和6年度発表の病害虫発生予察注意報等

ア 注意報 (第1号、第2号、第3号、第4号、第5号、第6号、第7号、第8号)

イ 特殊報 (第1号、第2号)



### 令和6年度病害虫発生予察注意報第1号

令和6年4月15日

埼玉県病害虫防除所

県内のナシヒメシンクイのフェロモントラップへの誘殺数が平年を大きく上回る地点が複数見られ、多いところでは3.6～7.2倍となっております。

向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並のため今後活動が活発になると考えられます。(4月11日時点)

本虫は5月頃からうめ、すもも、なし等の新梢を加害し、芯折れの被害を発生させ、さらに7月頃になると次の世代がなしの果実を加害します。

幼虫が新梢や果実の内部に食入すると薬剤の効果が低下するため、食入前の薬剤防除に加え、交信攪乱剤等を利用した体系的な防除に努めましょう。

作物名 核果類(うめ、すもも等)、なし

病害虫名 ナシヒメシンクイ

#### 1 注意報の内容

(1) 発生地域 県内全地域

(2) 発生程度 多

#### 2 注意報発表の根拠

(1) 病害虫防除所等が設置したナシヒメシンクイのフェロモントラップへの雄成虫誘殺数が5か所中4か所で平年を上回り、多い地点では平年の3.6～7.2倍の誘殺数になっている。(図1)

(2) 4月11日に気象庁が発表した季節予報によれば、関東甲信地方の向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並と予想されており、今後本虫の活動がさらに活発になると予想される。

(3) 越冬世代の虫数が多いため、世代を重ねるごとに発生量が増加し、今後の被害拡大が懸念される。

#### 3 防除対策等

(1) うめ、すもも等では芯折れの被害を防ぐために、新梢の伸長時に発生予防に重点を置いて薬剤散布を行う。(表2)

(2) なし園周辺のうめ、すもも等は発生源になるため同時に防除を行う。

(3) 成虫の発生初期から交信攪乱剤を使用する。なお、多目的防災網を設置したうえで、広範囲の地域で使用すると効果的である。(表1)

(4) 食入後では薬剤の効果が低下するため、食入前の防除に重点を置く(表2、表3)。被害にあった新梢や果実は速やかに摘除し適切に処分する。

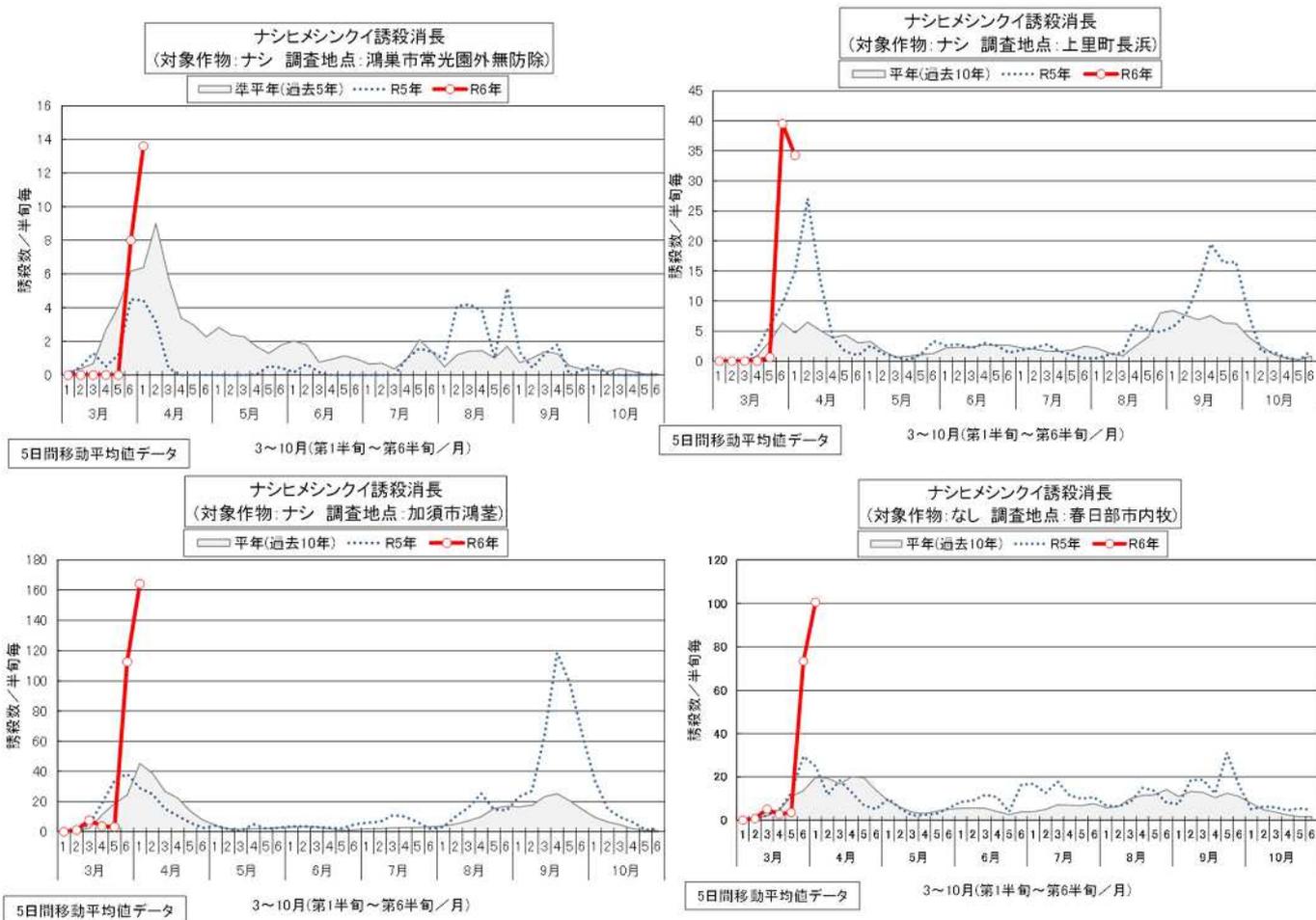


図1 ナシヒメシンクイ誘殺消長（鴻巣、上里、加須、春日部）

※フェロモントラップ等調査データ

<https://www.pref.saitama.lg.jp/b0916/bojo/pheromonetrapp.html>



写真1 ナシヒメシンクイの成虫



写真2 なしの被害果

※ナシヒメシンクイの詳細については病害虫診断のポイントと防除対策を参照

<https://www.pref.saitama.lg.jp/b0916/point-h27kai.html>

表1 果樹類におけるシンクイムシ類の交信攪乱剤例

薬 剤 名	IRAC コード	使用時期	使用回数
コンフューザーN	—	成虫発生初期から終期	—

(使用基準は令和6年4月10日現在)

表2 小粒核果類におけるシンクイムシ類の防除薬剤例

薬 剤 名	IRAC コード	使用時期	使用回数
ダイアジノン水和剤34	1B	収穫21日前 まで	4回以内(すもも) 2回以内(小粒核果類)※
スタークル顆粒水溶剤	4A	収穫前日まで	3回以内
テッパン液剤	28	収穫前日まで	2回以内

※すももを除く小粒核果類

(使用基準は令和6年4月10日現在)

表3 なしにおけるシンクイムシ類の防除薬剤例

薬 剤 名	IRAC コード	使用時期	使用 回数
モスピラン顆粒水溶剤	4A	収穫前日まで	3回以内
ヨーバルフロアブル	28	収穫前日まで	2回以内
アグロスリン水和剤	3A	収穫前日まで	3回以内
デリゲートWDG	5	収穫前日まで	2回以内

(使用基準は令和6年4月10日現在)

<農薬使用上の注意事項>

- 1 農薬は、ラベルの記載内容を必ず守って使用する。
- 2 剤の使用回数、成分毎の総使用回数、使用量及び希釈倍数は使用の都度確認する。特に、蚕や魚に対して影響の強い農薬など、使用上注意を要する薬剤を用いる場合は、周辺への危被害防止対策に万全を期すること。
- 3 農薬を散布するときは、農薬が周辺に飛散しないよう注意する。
- 4 周辺の住民に配慮し、農薬使用の前に周知徹底する。
- 5 農薬の最新情報は、埼玉県農産物安全課ホームページをご覧ください。  
<http://www.pref.saitama.lg.jp/a0907/nouann/saishintourokujouhou.html>
- 6 スピードスプレーヤを使用した防除ではドリフトが発生しやすいため、風のない日に適正な方法で散布する。

4 問合せ先

埼玉県病害虫防除所 電話：048-539-0661



コバトン



## 令和6年度病害虫発生予察注意報第2号

令和6年5月10日  
埼玉県病害虫防除所

本年1～2月に実施したチャバネアオカメムシ等の果樹カメムシ類越冬密度調査における越冬虫数は過去10年で最多でした。このため、県内の果樹カメムシ類の予察灯への誘殺が、例年ではあまり確認されない4月から多く、4月の総誘殺数は多いところで平年の約25倍となっています。

また、関東甲信地方の向こう1か月の気温は高いと予想されており、今後さらに果樹カメムシ類の活動が活発になると予想されます。(5月9日時点)

本虫の発生量が多い年は長期間にわたる飛来があるため、園内の発生状況をよく確認し、必要に応じて追加の薬剤防除を行いましょ。また、多目的防災網の早期展張などを行い総合防除に努めましょ。

作物名 果樹全般

病害虫名 果樹カメムシ類 (チャバネアオカメムシ、クサギカメムシ、ツヤアオカメムシ、アオクサカメムシ)

### 1 注意報の内容

- (1) 発生地域 県内全地域
- (2) 発生程度 多

### 2 注意報発表の根拠

- (1) 令和6年のチャバネアオカメムシの越冬量は過去10年で最も多く、平年の6.4倍となっています。(参照：[果樹カメムシ類の越冬密度調査](#))
- (2) 果樹カメムシ類の予察灯への誘殺が、例年ではあまり確認されない4月から多く、地点によっては4月の総誘殺数が平年の約20～25倍となっています。(参照：[フェロモントラップ等調査データ \(更新：5月7日\)](#))
- (3) 関東甲信地方の向こう1か月の気象予報では気温が高いと予想されており、今後の本虫の活動はさらに活発になることが予想されます。

### 3 防除対策等

- (1) 多目的防災網が設置されている園では早期展張を行いましょ。
- (2) 本虫の発生量が多い年は長期間にわたる飛来があるため、飛来を確認したら必要に応じて表1を参考に追加で薬剤防除を行いましょ。
- (3) ピレスロイド系薬剤 (IRACコード：3A) は果樹カメムシ類への効果は高いですが、天敵への影響が大きいです。ハダニ類の増加につながる可能性があるため、なるべく連用は避けましょ。

(4) チャバネアオカメムシやツヤアオカメムシはスギやヒノキの球果を餌として繁殖します。スギやヒノキが近くにある山間部等では発生が多くなる可能性があるため注意しましょう。

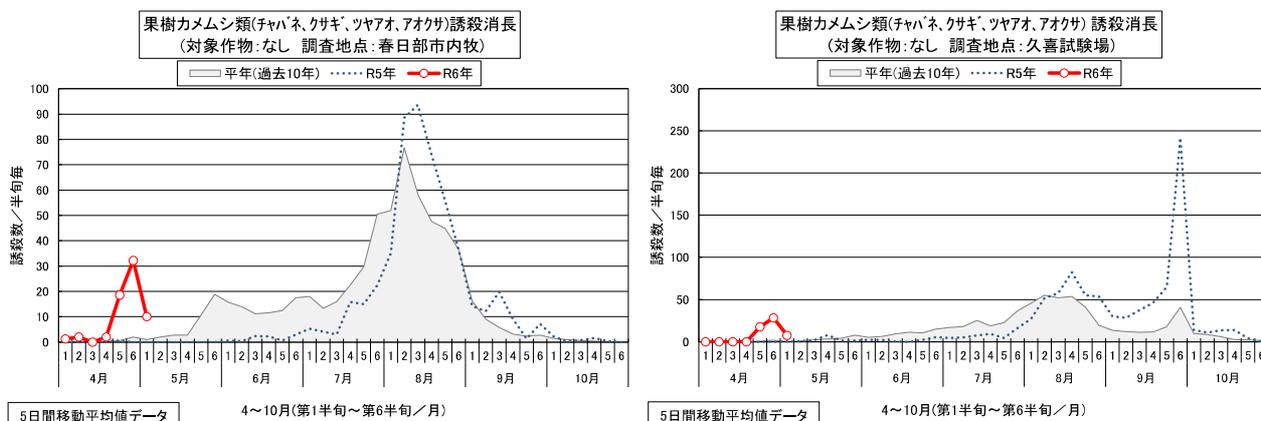


図 果樹カメムシ類の予察灯における誘殺消長（5月8日時点）  
（左：春日部市、右：久喜市）



写真1 左：チャバネアオカメムシ成虫、右：ツヤアオカメムシ成虫



写真2 被害を受けたなし

表1 なしにおけるカメムシ類の防除薬剤例（使用基準は令和6年5月7日現在）

薬剤名	IRACコード	使用時期	使用回数
アディオオン乳剤	3 A	収穫前日まで	2回以内
アーデント水和剤	3 A	収穫7日前まで	3回以内
ダントツ水溶剤	4 A	収穫前日まで	3回以内
スタークル顆粒水溶剤 または アルバリン顆粒水溶剤	4 A	収穫前日まで	3回以内
モスピラン顆粒水溶剤	4 A	収穫前日まで	3回以内
テッパン液剤	2 8	収穫前日まで	2回以内

＜農薬使用上の注意事項＞

- 1 農薬は、ラベルの記載内容を必ず守って使用する。
- 2 剤の使用回数、成分毎の総使用回数、使用量及び希釈倍数は使用の都度確認する。特に、蚕や魚に対して影響の強い農薬など、使用上注意を要する薬剤を用いる場合は、周辺への危被害防止対策に万全を期すること。
- 3 農薬を散布するときは、農薬が周辺に飛散しないよう注意する。
- 4 周辺の住民に配慮し、農薬使用の前に周知徹底する。
- 5 スピードスプレーヤを使用した防除ではドリフトが発生しやすいため、風のない日に適正な方法で散布する。
- 6 農薬の最新情報は、農薬登録情報提供システム（農林水産省）から検索できます。

※ 埼玉県農薬危害防止運動実施中！（令和6年5月1日～8月31日）

4 問合せ先

埼玉県病虫害防除所 電話：048-539-0661



## 令和6年度病害虫発生予察注意報第3号

令和6年5月13日  
埼玉県病害虫防除所

県内のオオタバコガのフェロモントラップによる誘殺数が、4月下旬から急増し多いところでは平年の約41倍となりました。また、調査を行っている4地点全てにおいて、発生量が多かった昨年度をさらに上回る誘殺数となっています\*。

本虫は野菜、花きを中心として50種類近い作物を加害しますが、本県で被害が懸念される作物は、ナス、スイートコーン、イチゴ、キク、ガーベラ、宿根アスター、シャクヤクなどです。

幼虫は卵からふ化すると直ちに植物の内部へ食入するため、被害を確認したら直ちに防除を実施しましょう。

※今年度よりフェロモントラップの種類を粘着トラップからファネル型トラップに変更していますが、その影響を加味しても誘殺数が多い状況です。

作物名 野菜類、花き類  
病害虫名 オオタバコガ

### 1 注意報の内容

- (1) 発生地域 県内全地域
- (2) 発生程度 多

### 2 注意報発表の根拠

- (1) 病害虫防除所が設置したオオタバコガのフェロモントラップへの雄成虫誘殺数が、4か所すべて（本庄市、深谷市、越谷市、杉戸町）で平年の約8～41倍と多く、全地点で注意報を出した昨年を上回る増加傾向が見られる（図）。  
（参照：[フェロモントラップ等調査データ（更新：5月7日）](#)）
- (2) 5月9日に気象庁が発表した季節予報によれば、関東甲信地方の向こう1か月の気温は平年より高く、降水量は多いと予想されている。
- (3) 昨年度多発したことに加え、暖冬で経過したことから本虫の密度が高いと考えられる。高温の影響で今後本虫の活動がさらに活発となり、被害多発が懸念される。

### 3 防除対策等

- (1) 新しい食害痕や虫糞を見つけたら、その周辺に幼虫がいる可能性が高いため、発見しだい捕殺する。
- (2) 摘芯した腋芽や花蕾などには卵が産みつけられていたり、若齢幼虫が潜んでいたりとすることがあるため、株元などに放置せず、ほ場外で処分する。
- (3) 施設栽培では、開口部に寒冷紗等（5mm目程度の防虫ネット）を張って、成虫の侵入を防ぐ。

- (4) 幼虫が植物体内に食入してしまうと薬剤の効果が低下するため、被害を確認したら直ちに防除を実施する。
- (5) 老齢幼虫に対しては薬剤の効果が低下するため、薬剤散布は若齢幼虫のうちに実施する。また、同一系統の薬剤の連用は避ける(表1、表2)。

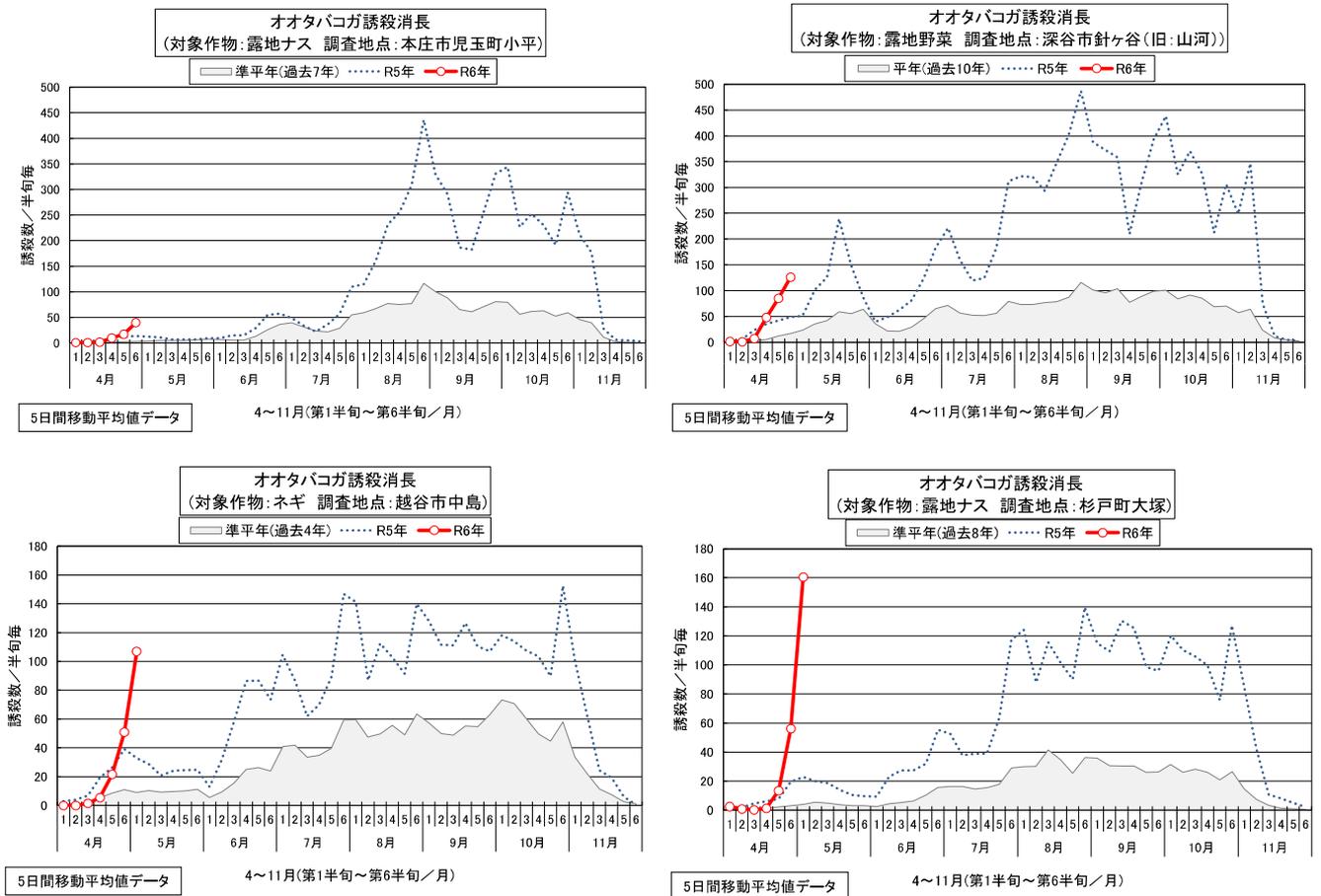


図 オオタバコガのフェロモントラップにおける誘殺消長 (5月8日時点)  
(左上から本庄市、深谷市、越谷市、杉戸町)



写真1 オオタバコガ幼虫による葉の食害



写真2 ナス果実に食入するオオタバコガ若齢幼虫

表1 ナスにおけるオオタバコガの防除薬剤例

薬 剤 名	I R A C コード	使用時期	使用 回数
アニキ乳剤	6	収穫前日まで	3回以内
カウンター乳剤	1 5	収穫前日まで	4回以内
マトリックフロアブル	1 8	収穫前日まで	3回以内
アクセルフロアブル	2 2 B	収穫前日まで	3回以内
ヨーバルフロアブル	2 8	収穫前日まで	3回以内
グレーシア乳剤	3 0	収穫前日まで	2回以内
プレオフロアブル	UN	収穫前日まで	4回以内
デルフィン顆粒水和剤*	1 1 A	発生初期 但し、収穫前日まで	—

※作物名「野菜類」として登録

(使用基準は令和6年5月8日現在)

表2 スイートコーン（未成熟とうもろこし）におけるオオタバコガの防除薬剤例

薬 剤 名	I R A C コード	使用時期	使用 回数
ディアナSC	5	収穫前日まで	2回以内
アフーム乳剤	6	収穫3日前まで	2回以内
カスケード乳剤	1 5	収穫7日前まで	2回以内
ベネビアOD	2 8	収穫前日まで	3回以内
プレオフロアブル	UN	収穫前日まで	2回以内
ゼンターリ顆粒水和剤*	1 1 A	発生初期 但し、収穫前日まで	—

※作物名「とうもろこし」として登録

(使用基準は令和6年5月8日現在)

< 農薬使用上の注意事項 >

- 1 農薬は、ラベルの記載内容を必ず守って使用する。
- 2 剤の使用回数、成分毎の総使用回数、使用量及び希釈倍数は使用の都度確認する。特に、蚕や魚に対して影響の強い農薬など、使用上注意を要する薬剤を用いる場合は、周辺への危被害防止対策に万全を期すること。
- 3 農薬を散布するときは、農薬が周辺に飛散しないよう注意する。
- 4 周辺の住民に配慮し、農薬使用の前に周知徹底する。
- 5 農薬の最新情報は、[農薬登録情報提供システム（農林水産省）](#)から検索できます。



※ 埼玉県農薬危害防止運動実施中！ (令和6年5月1日～8月31日)

- 4 問合せ先  
埼玉県病害虫防除所 電話：048-539-0661  
(ホームページ：右のQRコードか[本リンク](#)よりアクセス)



埼玉県マスコット「コバトン」「さいたまもち」



## 令和6年度病害虫発生予察注意報第4号

令和6年5月20日  
埼玉県病害虫防除所

本年の熊谷のアメダスデータから推定される赤かび病子のう胞子飛散好適日は、4月1日から4月30日までの積算日数が16日(平年同期8.1日)と過去10年で最も多く、11月下旬以降に播種した小麦が最も感染しやすい開花期と子のう胞子飛散好適日が完全に一致しています。

当所が実施している5月中旬の病害虫発生状況調査では、各調査地点で各麦種とも本病の発生が見られ、5月中旬の発生量は過去10年で最も多くなっています。

5月6日以降も降雨日が多く病原菌が繁殖しやすい状況で、4月30日、5月7日及び5月16日には赤かび病多発生好適日も出現しており、本病の急速な蔓延が懸念されます。

小麦で発生が見られるほ場では、追加の防除を実施しましょう。

作物名 ムギ類

病害虫名 赤かび病

### 1 注意報の内容

- (1) 発生地域 県内全地域
- (2) 発生程度 多

### 2 注意報発表の根拠

- (1) 本年の熊谷のアメダスデータから推定される赤かび病子のう胞子飛散好適日は、4月1日から4月30日までの積算日数が16日(平年同期8.1日)と過去10年で最も多くなっている。特に、4月17日から5月3日まで17日間連続で子のう胞子飛散好適日が出現しており、11月下旬以降に播種した小麦では最も感染しやすい開花期と子のう胞子飛散好適日が完全に一致している。
- (2) 当所が実施している5月中旬の病害虫発生状況調査では、各調査地点で各麦種とも本病の発生が見られ、5月中旬の発生量は過去10年で最も多く、平年比「多」となった。
- (3) 5月6日以降も降雨日が多く病原菌が増殖しやすい状況で、4月30日、5月7日及び5月16日には赤かび病多発生好適日も出現している。
- (4) 週間天気予報では、5月20日以降も多発好適日になりやすい暖かい降雨日が

あることが予想されており、本病の急速な蔓延と病勢進展が懸念される。

### 3 防除対策等

- (1) 現在発生が見られる小麦ほ場では、蔓延防止のため収穫前日数及び使用回数に注意して、早急に薬剤による追加防除を実施する。
- (2) 刈遅れにより麦類が降雨に当たると、本病の進展等を助長する原因となるため、適期に確実に収穫する。
- (3) 収穫前にはほ場を確認し、赤かび病発生が多い場合や発生ほ場で倒伏が生じている場合は、赤かび病や倒伏の被害を受けていない他の麦とは分けて収穫する。
- (4) 収穫に用いる農機やコンテナ等は、作物残さがないよう清掃し清潔に保つ。輸送に当たっては、乾燥した状態のコンテナ等を使用し、急な降雨による水濡れ防止のために覆い等を用意する。
- (5) 収穫後、適切な水分まで乾燥する間に赤かび病菌が増殖してしまう場合があるため、収穫した麦は可能な限り速やかに乾燥調製施設に搬入し乾燥させる。



写真1 小麦の被害穂(数粒のみの発病～穂全体の発病)



写真2 穂に生じたサーモンピンクの胞子塊



写真3 六条大麦の被害穂

表 ムギ類赤かび病の防除薬剤例(地上散布及び無人航空機散布両対応)

薬 剤 名	FRAC コード	対象作物	使用時期	使用回数
ファンタジスタフロアブル	11	小麦	収穫 14 日前まで	3 回以内
トップジンMゾル	1	小麦	収穫 14 日前まで	出穂期以降は 2 回以内
ミラビスフロアブル	7	小麦	収穫 7 日前まで	2 回以内
シルバキュアフロアブル	3	小麦	収穫 7 日前まで	2 回以内
ワークアップフロアブル	3	麦類	収穫 7 日前まで	3 回以内

(使用基準は令和 6 年 5 月 17 日現在)

< 農薬使用上の注意事項 >

- 1 農薬は、ラベルの記載内容を必ず守って使用する。
- 2 剤の使用回数、成分毎の総使用回数、使用量及び希釈倍数は使用の都度、確認する。  
特に、蚕や魚に対して影響の強い農薬など、使用上注意を要する薬剤を用いる場合は、周辺への危被害防止対策に万全を期すること。
- 3 農薬を散布するときは、農薬が周辺に飛散しないよう注意する。
- 4 周辺の住民に配慮し、農薬使用の前に周知徹底する。
- 5 農薬の最新情報は、農薬登録情報提供システム（農林水産省）で確認できる。  
農薬登録情報提供システム（農林水産省） <https://pesticide.maff.go.jp/>

**※ 埼玉県農薬危害防止運動実施中！（令和 6 年 5 月 1 日～ 8 月 3 1 日）**

4 問合せ先

埼玉県病害虫防除所 電話：048-539-0661



## 令和6年度病害虫発生予察注意報第5号

令和6年7月8日  
埼玉県病害虫防除所

県東部の水稲用乾式予察灯において、イネカメムシが7月3日までに122頭誘殺されており、多発した昨年の総誘殺数(114頭)をすでに超えています。県東部及び東北部の早期栽培「あきたこまち」で、出穂後のイネカメムシの集中的な加害が各地から報告されています。

また、畦畔等のイネ科雑草へのイネカメムシ及びホソハリカメムシの大量寄生が確認されており、イネの斑点米の発生が懸念されますので、出穂期から乳熟期にかけての防除と定期的な除草を行ってください。

なお、出穂前2週間と出穂後2週間の、生息地(畦畔、雑草地、休耕田など)の除草は、カメムシ類を水田に追い込み、斑点米の発生を助長させるので避けましょう。

作物名 イネ

病害虫名 斑点米カメムシ類(イネカメムシ、ホソハリカメムシ)

### 1 注意報の内容

- (1) 発生地域 県内全地域
- (2) 発生程度 多

### 2 注意報発表の根拠

- (1) 県東部の水稲用乾式予察灯において、イネカメムシを6月24日に初誘殺した後、7月3日までに122頭誘殺されており、多発した昨年の誘殺数(初誘殺7月1日、9月までの総誘殺数114頭)をすでに超えている。
- (2) 県東部及び東北部の早期栽培「あきたこまち」で、出穂後のイネカメムシの集中的な加害が各地で報告されているほか、未出穂田のタイヌビエ、畦畔のセイバンモロコシ等のイネ科雑草及び幼穂形成期のコシヒカリへのイネカメムシの大量寄生が確認されている。
- (3) 本年は春先に例年は見ないホソハリカメムシのムギ類への寄生が県東北部を中心に確認されており、現在でも県内各地で畦畔雑草等のすくい取り調査でホソハリカメムシの捕獲数が平年より多い。
- (4) 7月4日に気象庁が発表した季節予報によれば、関東甲信地方の向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か多いと予想されており、今後も斑点米カメムシ類の発生に好適な条件が継続し、多発生が予測される。

### 3 防除対策等

- (1) イネカメムシ、ホソハリカメムシなど比較的大型のカメムシ類は、寄生頭数が少ない場合でも大きな被害につながる可能性があるため、これらの大型種を本田で確認した場合は、必ず薬剤による防除を実施する。
- (2) 出穂期～開花期頃にイネカメムシの集中加害を受けると著しい不稔が発生することがあるため、イネカメムシの多発ほ場では、出穂期～穂揃期（不稔対策）及び出穂期の7～10日後（斑点米対策）の2回、薬剤による防除を実施する。
- (3) 生息場所の水田畦畔や休耕田等の雑草管理（除草）を丁寧に行う。ただし、斑点米カメムシ類を水田へ追い込み被害が拡大する恐れがあるので、出穂前2週間と出穂後2週間は除草を行わない。
- (4) 周辺より出穂の早い品種・作型、あるいは周辺より出穂の遅い品種・作型では、被害が集中しやすいので防除を徹底する。
- (5) 農薬による蜜蜂への影響を軽減させるために、蜜蜂の活動が最も盛んな時間帯（午前8時～12時まで）を避け、可能な限り早朝又は夕刻に行うなどの対策を講じる。



写真1 イネカメムシ成虫(体長約 12mm)



写真2 イネカメムシによる斑点米



写真3 開花期の「あきたこまち」を集中的に加害するイネカメムシ（写真提供：JA ほくさい）



写真4 未出穂田のタイヌビエに寄生するイネカメムシ



写真5 ホソハリカメムシ成虫(体長約 10mm)



写真6 メシバの穂を吸汁するホソハリカメムシ

表 稲のカメムシ類の防除薬剤例(地上防除・無人航空機防除両対応)

薬 剤 名	IRAC コード	使用時期	使用回数
キラップフロアブル	2B	収穫 14 日前まで	2 回以内
ダントツフロアブル	4A	収穫 7 日前まで	3 回以内
エクシードフロアブル	4C	収穫 7 日前まで	3 回以内
エミリアフロアブル	4F	収穫 7 日前まで	2 回以内
スタークル1 キロH粒剤	4A	収穫 7 日前まで	3 回以内

(使用基準は令和 6 年 7 月 5 日現在)

< 農薬使用上の注意事項 >

- 1 農薬は、ラベルの記載内容を必ず守って使用する。
- 2 剤の使用回数、成分毎の総使用回数、使用量及び希釈倍数は使用の都度、確認する。  
特に、蚕や魚に対して影響の強い農薬など、使用上注意を要する薬剤を用いる場合は、周辺への危被害防止対策に万全を期すること。
- 3 農薬を散布するときは、農薬が周辺に飛散しないよう注意する。
- 4 周辺の住民に配慮し、農薬使用の前に周知徹底する。
- 5 農薬の最新情報は、農薬登録情報提供システム（農林水産省）で確認できる。  
農薬登録情報提供システム（農林水産省） <https://pesticide.maff.go.jp/>

**※ 埼玉県農薬危害防止運動実施中！（令和 6 年 5 月 1 日～ 8 月 3 1 日）**

- 4 問合せ先  
埼玉県病害虫防除所 電話：048-539-0661



コバトン



## 令和6年度病害虫発生予察注意報第6号

令和6年7月12日  
埼玉県病害虫防除所

県内の果樹カメムシ類の予察灯による誘殺数が、調査全地点で平年を大きく上回っております。令和6年5月10日に注意報（令和6年度第2号）を公表しましたが、依然として多い状況が続いております。

また、関東甲信地方の向こう1か月の気温は高いと予想されており（7月11日時点）、例年果樹カメムシ類が最も多く発生する7月中旬頃～8月頃にかけてさらなる多発生が予想されます。

本虫に加害された果実は表面がへこみ、内部がスポンジ状になる等、商品価値が大きく低下します。果実肥大期に加害されると奇形果になる場合があります。

園内での発生を確認したら追加の薬剤防除を行いましょう。

作物名 果樹全般

病害虫名 果樹カメムシ類（チャバネアオカメムシ、クサギカメムシ、ツヤアオカメムシ）

### 1 注意報の内容

- (1) 発生地域 県内全地域
- (2) 発生程度 多

### 2 注意報発表の根拠

- (1) 県内3か所に設置してある予察灯において、全地点で誘殺数が平年を上回っており、4月～6月までの総誘殺数は平年の約3.5倍～9.1倍となっております。（参照：[フェロモントラップ等調査データ（更新：7月5日）](#)）
- (2) 寄居町に設置しているフェロモントラップにおいても平年より多い誘殺数となっております。（図）
- (3) 関東甲信地方の向こう1か月の気象予報では気温が高いと予想されており、今後の本虫の活動はさらに活発になることが予想されます。

### 3 防除対策等

- (1) 多目的防災網が設置されている園では必ず展張するとともに、破れや隙間の有無を点検しましょう。
- (2) 8月頃から当年世代成虫の発生が始まり、発生量の増加が予想されるため、飛来を確認したら表1・2を参考に必要に応じて追加で薬剤防除を行いましょう。

(3)ピレスロイド系薬剤（IRACコード：3A）は果樹カメムシ類への効果は高いですが、天敵への影響が大きいです。ハダニ類の増加につながる可能性があるため、なるべく連用は避けましょう。

(4)チャバネアオカメムシやツヤアオカメムシはスギやヒノキの球果を餌として繁殖します。球果の硬化や劣化により餌として利用しにくくなるとスギやヒノキから離れて果樹園へ飛来しやすくなります。スギやヒノキが近くにある山間部等では発生が多くなる可能性があるため注意しましょう。

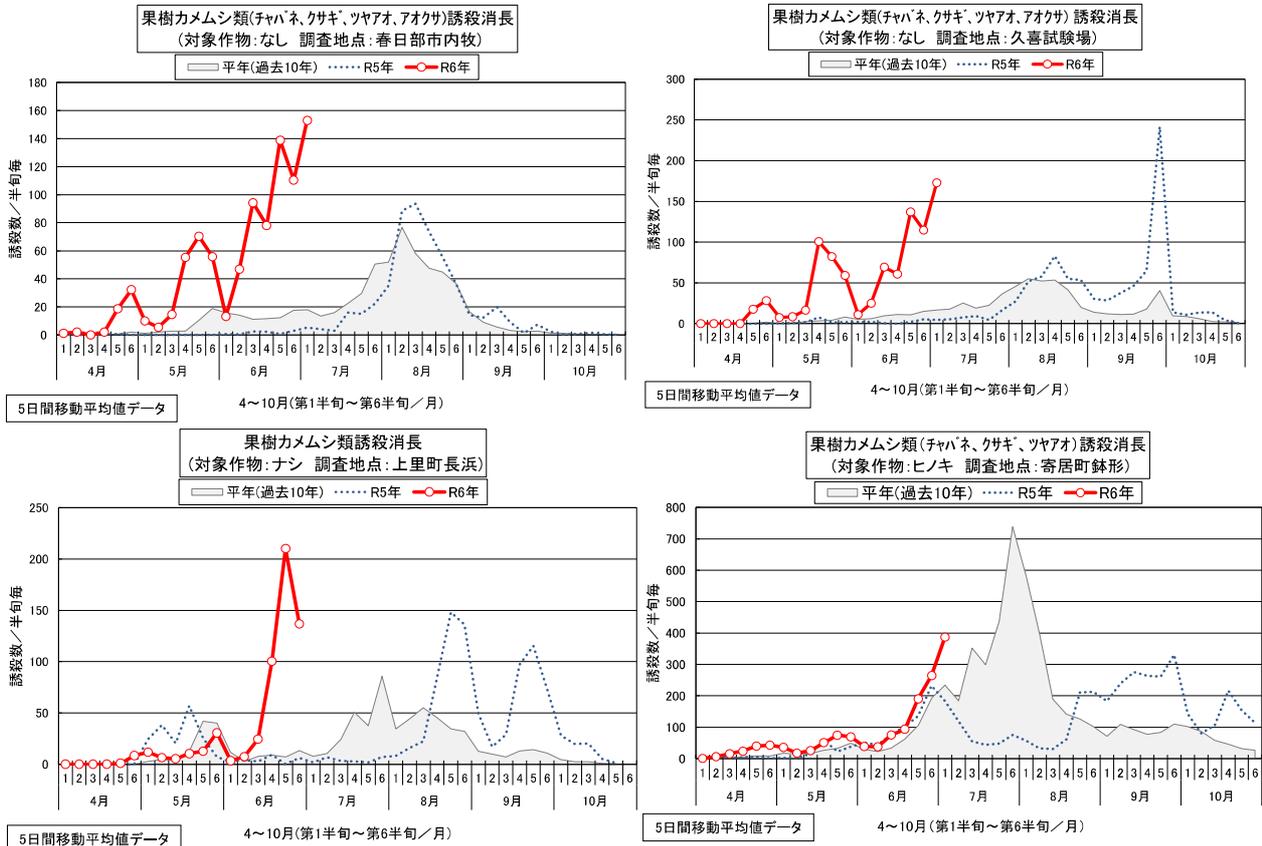


図 予察灯・フェロモントラップにおける誘殺消長（7月10日時点）  
（左上：春日部市、右上：久喜市、左下：上里町、右下：寄居町（フェロモントラップ））



写真1 左：チャバ 初カメシ、中央：クサギカメシ、右：ツヤカメシ

写真2 被害を受けたなし

表1 なしにおけるカメムシ類の防除薬剤例（使用基準は令和6年7月10日現在）

薬 剤 名	IRAC コード	使用時期	使用 回数
アディオン乳剤	3 A	収穫前日まで	2回以内
アーデント水和剤	3 A	収穫7日前まで	3回以内
アクタラ顆粒水溶剤	4 A	収穫前日まで	3回以内
ダントツ水溶剤	4 A	収穫前日まで	3回以内
スタークル顆粒水溶剤 または アルバリン顆粒水溶剤	4 A	収穫前日まで	3回以内
モスピラン顆粒水溶剤	4 A	収穫前日まで	3回以内
テッパン液剤	2 8	収穫前日まで	2回以内

表2 ぶどうにおけるカメムシ類の防除薬剤例（使用基準は令和6年7月10日現在）

薬 剤 名	IRAC コード	使用時期	使用 回数
スタークル顆粒水溶剤または アルバリン顆粒水溶剤	4 A	収穫前日まで	3回以内
ベニカ水溶剤	4 A	収穫前日まで	3回以内
テッパン液剤	2 8	収穫前日まで	2回以内

＜農薬使用上の注意事項＞

- 1 農薬は、ラベルの記載内容を必ず守って使用する。
- 2 剤の使用回数、成分毎の総使用回数、使用量及び希釈倍数は使用の都度確認する。特に、蚕や魚に対して影響の強い農薬など、使用上注意を要する薬剤を用いる場合は、周辺への危被害防止対策に万全を期すること。
- 3 農薬を散布するときは、農薬が周辺に飛散しないよう注意する。
- 4 周辺の住民に配慮し、農薬使用の前に周知徹底する。
- 5 スピードスプレーヤを使用した防除ではドリフトが発生しやすいため、風の無い日に適正な方法で散布する。
- 6 農薬の最新情報は、農薬登録情報提供システム（農林水産省）から確認できます。  
<https://pesticide.maff.go.jp/>

※ 埼玉県農薬危害防止運動実施中！（令和6年5月1日～8月31日）

4 問合せ先

埼玉県病害虫防除所 電話：048-539-0661



## 令和6年度病害虫発生予察注意報第7号

令和6年8月8日  
埼玉県病害虫防除所

県内のシロイチモジヨトウのフェロモントラップへの誘殺数が、調査4地点中の3地点で多く、平年及び準平年との比較ができる3地点中の2地点で平年を大きく上回っています。この2地点では多発した昨年より多くなっています<sup>\*</sup>。すでに、ネギやダイズで幼虫による食害が確認されています。

本虫は野菜、花きを中心として60種類以上の作物を加害するため、今後ブロッコリー等への被害も懸念されます。

とくに、ネギでは幼虫が葉身内へ食入してしまうと、薬剤の効果が低下するため、被害を確認したら直ちに防除を実施しましょう。

※今年度よりフェロモントラップの種類を粘着トラップからファネル型トラップに変更していますが、その影響を加味しても誘殺数が多い状況です。

作物名 ネギ、ブロッコリー、ダイズ  
病害虫名 シロイチモジヨトウ

### 1 注意報の内容

- (1) 発生地域 県内全地域
- (2) 発生程度 多

### 2 注意報発表の根拠

- (1) 病害虫防除所が設置したシロイチモジヨトウのフェロモントラップへの雄成虫誘殺数が、4地点中3地点で多い。平年及び準平年との比較が可能な3地点中の2地点では平年を大きく上回って推移し、注意報を出した昨年を上回る増加傾向が見られる(図)。
- (2) 8月1日に気象庁が発表した季節予報によれば、関東甲信地方の向こう1か月の気温は高いと予想されており、今後の本虫の活動がさらに活発になることが予想される。
- (3) ネギおよびダイズほ場において、幼虫による食害が確認されている。今後、定植期となるブロッコリー等の他作物でも被害拡大が懸念される。

### 3 防除対策等

- (1) 早期発見に努め、卵塊やふ化直後の1～2齢幼虫の集団を見つけたら速やかに取り除き、ほ場外で適切に処分する。

- (2) 幼虫が作物内に食入すると薬剤の効果が低下するため、被害を確認したら直ちに防除を実施する。
- (3) 老齢幼虫に対しては薬剤の効果が低下するため、薬剤散布は若齢幼虫のうちに実施する。また、抵抗性害虫の発生を避けるため、作用機構が同じ薬剤の連用を避ける（表1～3）。

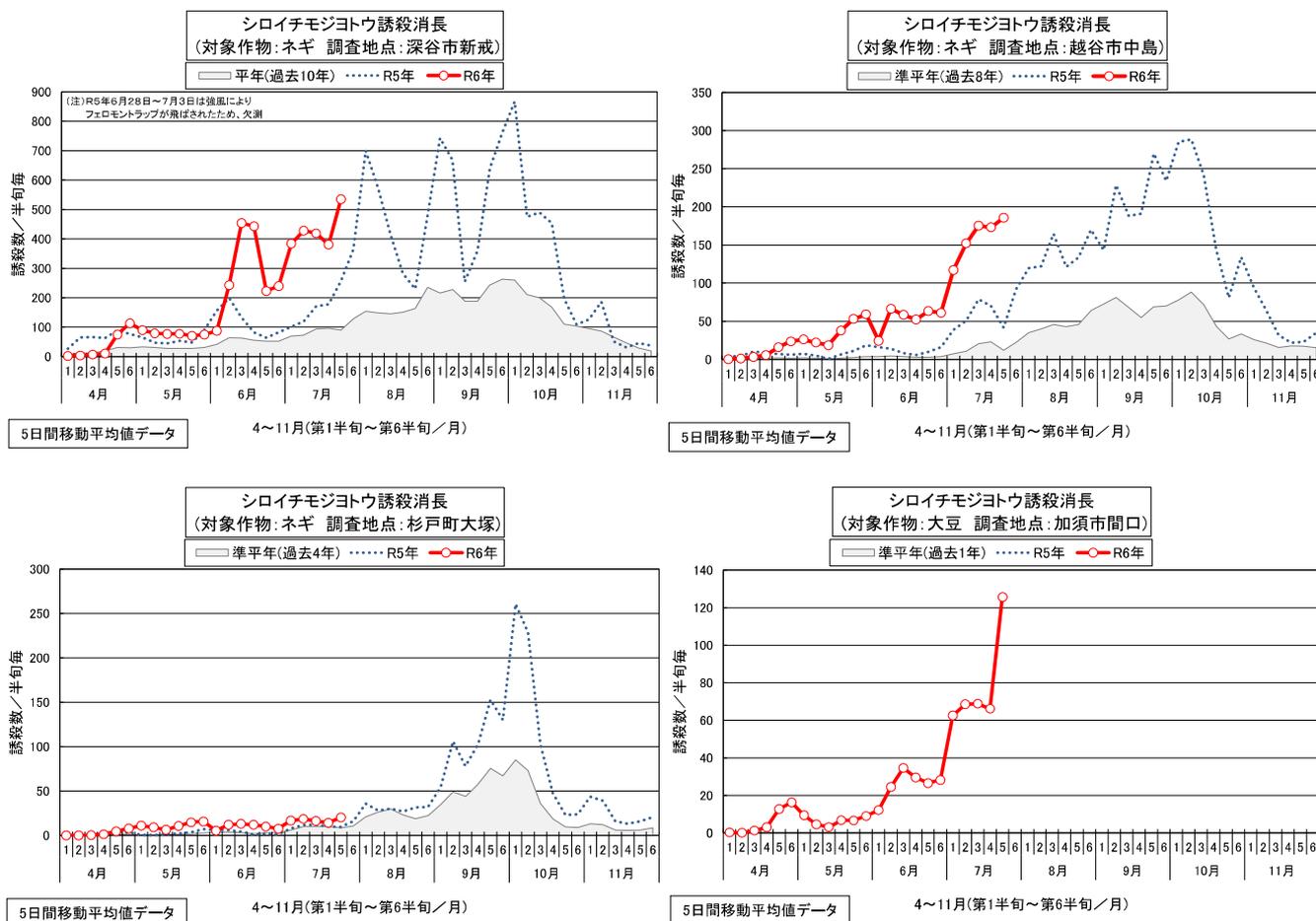


図 シロイチモジヨトウ誘殺消長（左上：深谷市、右上：越谷市、左下：杉戸町、右下：加須市\*）※加須市はR6年からの調査のため当年データのみ



写真1 ふ化直後のシロイチモジヨトウ若齢幼虫（ネギ葉）



写真2 ネギを食害するシロイチモジヨトウ中齢幼虫



写真3 ブロッコリー葉を食害する  
シロイチモジヨトウ老齢幼虫



写真4 ダイズ葉を食害する  
シロイチモジヨトウ老齢幼虫

表1 ネギのシロイチモジヨトウの防除薬剤例

薬 剤 名	I R A C コード	使用時期	使用 回数
アディオソ乳剤	3 A	収穫7日前まで	3回以内
スピノエース顆粒水和剤	5	収穫3日前まで	3回以内
アフームエクセラ顆粒水和剤	6、15	収穫7日前まで	3回以内
コテツフロアブル	13	収穫7日前まで	2回以内
ロムダンフロアブル	18	収穫7日前まで	3回以内
トルネードエースDF	22A	収穫14日前まで	2回以内
ベネビアOD	28	収穫前日まで	3回以内
グレース乳剤	30	収穫7日前まで	2回以内

(使用基準は令和6年7月24日現在)

表2 ブロッコリーにおけるシロイチモジヨトウの防除薬剤例

薬 剤 名	I R A C コード	使用時期	使用 回数
ディアナSC	5	収穫前日まで	2回以内
アニキ乳剤	6	収穫3日前まで	3回以内
ジャックポット顆粒水和剤	11A	発生初期 但し、収穫前日まで	—
コテツフロアブル	13	収穫3日前まで	2回以内
ブロフレアSC	30	収穫前日まで	3回以内

(使用基準は令和6年7月24日現在)

表3 ダイズにおけるシロイチモジヨトウの防除薬剤例

薬 剤 名	I R A C コード	使用時期	使用 回数
プレオフロアブル	UN	収穫7日前まで	2回以内
デルフィン顆粒水和剤	11A	発生初期 但し、収穫前日まで	—

(使用基準は令和6年7月24日現在)

＜農薬使用上の注意事項＞

- 1 農薬は、ラベルの記載内容を必ず守って使用する。
- 2 剤の使用回数、成分毎の総使用回数、使用量及び希釈倍数は使用の都度確認する。特に、蚕や魚に対して影響の強い農薬など、使用上注意を要する薬剤を用いる場合は、周辺への危被害防止対策に万全を期すること。
- 3 農薬を散布するときは、農薬が周辺に飛散しないよう注意する。
- 4 周辺の住民に配慮し、農薬使用の前に周知徹底する。
- 5 農薬の最新情報は、農薬登録情報提供システム（農林水産省）で確認できる。  
農薬登録情報提供システム（農林水産省） <https://pesticide.maff.go.jp/>

**※ 埼玉県農薬危害防止運動実施中！（令和6年5月1日～8月31日）**

- 4 問合せ先  
埼玉県病害虫防除所 電話：048-539-0661



コバトン



## 令和6年度病害虫発生予察注意報第8号

令和6年8月28日  
埼玉県病害虫防除所

県内のナシヒメシンクイのフェロモントラップへの誘殺数が複数の地点で平年を大きく上回っております。令和6年4月15日に注意報（令和6年度第1号）を発表しましたが、世代を重ねるにつれ増加し、7～8月頃にかけて、誘殺数の増加が顕著になってきます。向こう1か月の気温は高い予報のため、さらなる多発生が予想されます。（8月22日時点）

本虫はなしの果実に産卵し、ふ化した幼虫は果実内部を食害します。

フェロモントラップでの誘殺数は、例年の7・8月はそれほど多くはありませんが、本年は誘殺数が多いことから晩生品種での被害が懸念されます。速やかな防除に努めましょう。

作物名 なし

病害虫名 ナシヒメシンクイ

### 1 注意報の内容

- (1) 発生地域 県内全地域
- (2) 発生程度 多

### 2 注意報発表の根拠

- (1) 病害虫防除所等が設置したナシヒメシンクイのフェロモントラップへの雄成虫誘殺数が複数か所で平年を上回り、多い地点では8月の総誘殺数が平年の3.7～4.8倍になっている（8月21日時点）。（図）
- (2) 8月22日に気象庁が発表した季節予報によれば、関東甲信地方の向こう1か月の気温は高いと予想されており、本虫の活動が活発な状態が継続すると予想される。
- (3) 例年ではそれほど目立たない7～8月の誘殺数が多いため、これから収穫を迎える品種（豊水、あきづき等）での加害が懸念される。

### 3 防除対策等

- (1) 交信攪乱剤を5月中に設置した園では、発生状況や収穫状況に応じて追加の設置を検討する（表1）。
- (2) 食入後では薬剤の効果が低下するため、食入前の防除に重点を置く。薬剤防除を行う際には収穫前日数と使用回数に注意して散布を行う（表2）。
- (3) 被害にあった果実は速やかに摘除し適切に処分する。

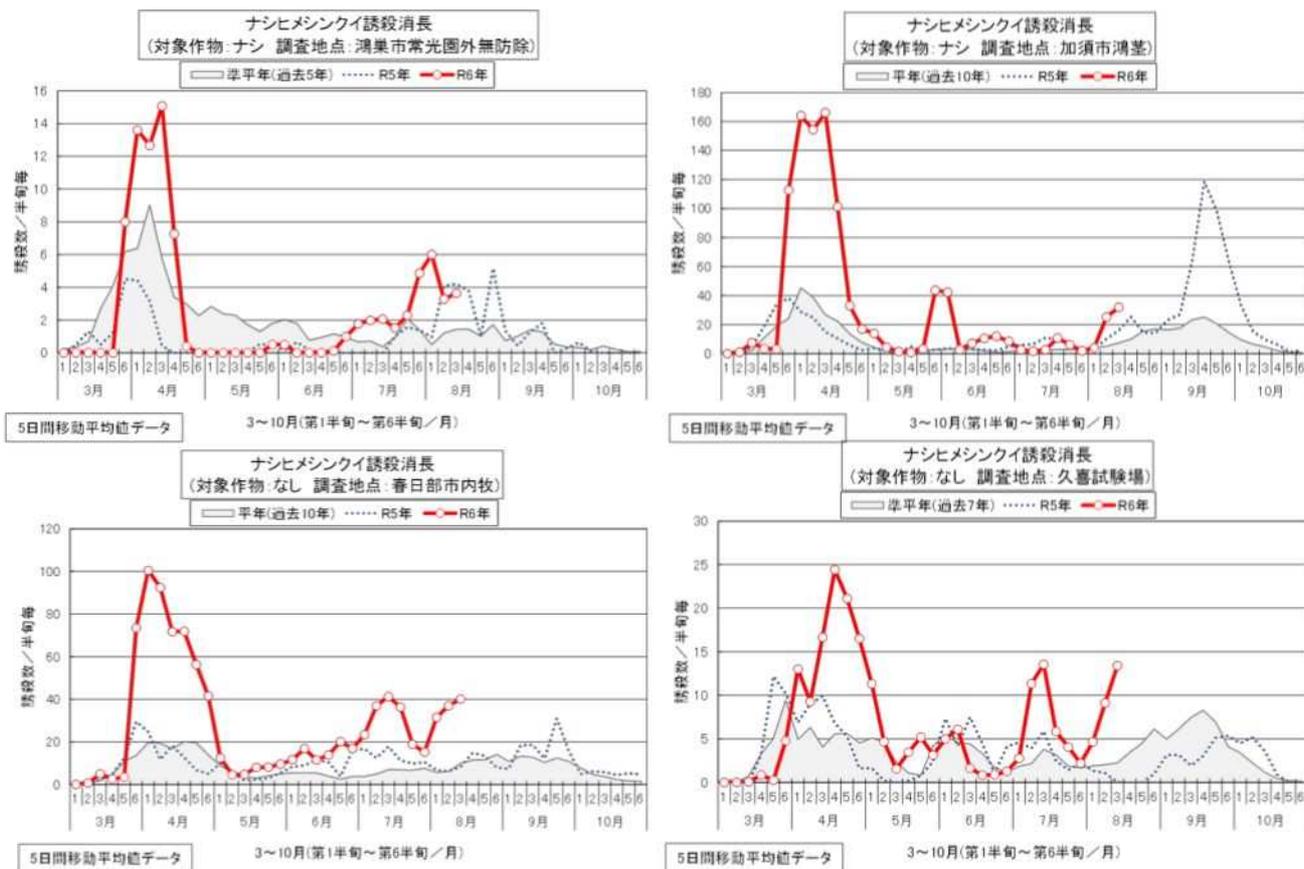


図 ナシヒメシンクイ誘殺消長（鴻巣、加須、春日部、久喜）

※フェロモントラップ等調査データ

<https://www.pref.saitama.lg.jp/b0916/bojo/pheromonetrapp.html>



写真1 ナシヒメシンクイの成虫



写真2 ナシヒメシンクイの幼虫と被害果

※ナシヒメシンクイの詳細については病害虫診断のポイントと防除対策を参照

<https://www.pref.saitama.lg.jp/b0916/point-h27kai.html>

表1 果樹類におけるシンクイムシ類の交信攪乱剤例

薬 剤 名	IRAC コード	使用時期	使用 回数
コンフューザーN	—	成虫発生初期から終期	—

(使用基準は令和6年8月23日現在)

表2 なしにおけるシンクイムシ類の防除薬剤例

薬 剤 名	IRAC コード	使用時期	使用 回数
ロディー水和剤	3 A	収穫前日まで	2回以内
テルスターフロアブル	3 A	収穫前日まで	2回以内
モスピラン顆粒水溶剤	4 A	収穫前日まで	3回以内
フェニックスフロアブル	2 8	収穫前日まで	2回以内
ディアナWDG	5	収穫前日まで	2回以内

(使用基準は令和6年8月23日現在)

＜農薬使用上の注意事項＞

- 1 農薬は、ラベルの記載内容を必ず守って使用する。
- 2 剤の使用回数、成分毎の総使用回数、使用量及び希釈倍数は使用の都度確認する。特に、蚕や魚に対して影響の強い農薬など、使用上注意を要する薬剤を用いる場合は、周辺への危被害防止対策に万全を期すること。
- 3 農薬を散布するときは、農薬が周辺に飛散しないよう注意する。
- 4 周辺の住民に配慮し、農薬使用の前に周知徹底する。
- 5 農薬の最新情報は、農薬登録情報提供システム（農林水産省）で確認できる。  
農薬登録情報提供システム（農林水産省） <https://pesticide.maff.go.jp/>
- 6 スピードスプレーヤを使用した防除ではドリフトが発生しやすいため、風の無い日に適正な方法で散布する。

**※ 埼玉県農薬危害防止運動実施中！（令和6年5月1日～8月31日）**

4 問合せ先

埼玉県病害虫防除所 電話：048-539-0661

## トマトキバガの誘殺について

県内に設置した性フェロモントラップにおいて、本種と疑われる成虫が誘殺された。農林水産省横浜植物防疫所に同定を依頼した結果、県内未発生のトマトキバガであると確認された。

\* 特殊報：新規の有害動植物を発見した場合及び重要な有害動植物の発生消長に特異な現象が認められた場合であって、従来と異なる防除対策が必要となるなど、生産現場への影響が懸念される場合に発表するものです。

1 害虫名 トマトキバガ *Tuta absoluta* (Meyrick)

2 対象作物 —

3 誘殺確認の経緯及び国内での状況

- (1) 令和6年10月2日に、県内5地点に設置したトマトキバガ侵入調査用のフェロモントラップのうち2地点において、本種と疑われる成虫が複数誘殺された（写真1）。農林水産省横浜植物防疫所に同定を依頼したところ、本県で未発生のトマトキバガと同定された。
- (2) 県内の農作物における本種幼虫の発生及び被害は認められていない。
- (3) 本種は、国内では令和3年10月に熊本県で確認されて以降、フェロモントラップ調査等によって、関東の一部の県を除き、これまでに本県を含めて合計45都道府県で誘殺が確認されている。

4 本種の特徴及び生態

- (1) 成虫は、開張約10mm、前翅長約5mm。前翅は灰褐色の地色に黒色斑が散在する。後翅は一樣に淡黒褐色、翅頂下でえぐれる（写真2）。
- (2) 終齢幼虫の体長は約8mm。体色は淡緑色～淡赤白色。頭部は淡褐色。前胸の背面後方に細い黒色横帯が確認できる（写真3）。
- (3) 成虫は夜行性で、日中は葉の間に隠れていることが多い。1年に複数世代が発生するため、繁殖力が非常に強いことが知られている。

5 被害の特徴

- (1) トマトでは、葉の内部に幼虫が潜り込んで食害し、葉肉内に孔道が形成される。食害部分は表面のみを残して薄皮状になり、白～褐変した外観となる（写真4）。
- (2) 果実では、幼虫が穿孔侵入して内部組織を食害するため、果実表面に数mm程度の穿孔痕が生じるとともに食害部分の腐敗が生じる（写真5）。

## 6 防除対策

- (1) ほ場内をよく見回り、見つけ次第捕殺する。本種と疑われる害虫や食害を発見した場合は、速やかに埼玉県病害虫防除所まで連絡する。
- (2) 被害葉や被害果等が発見した場合はほ場に放置せず、土中深くに埋めるか、ビニル袋等に入れて密封することで、成幼虫を死滅させたうえで、適切に処分する。
- (3) 施設栽培では、出入口のほか、側窓や天窗等の開口部に防虫ネットを展張する。
- (4) トマトまたはミニトマトでは、トマトキバガに登録のある防除薬剤を使用する。なお、農薬を使用する際は必ず最新の情報を確認し、使用基準を遵守する。
- (5) 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統（IRAC コード）が異なる薬剤でローテーション散布を行う。



写真1：フェロモントラップに誘殺された雄成虫



写真2 トマトキバガ成虫



写真3 トマトキバガ終齢幼虫



写真4 トマトの被害葉（飼育個体）



写真5 トマトの被害果（飼育個体）

(写真2～5は、農林水産省植物防疫所原図)

<p>令和6年度 発生予察情報</p>	<p><b>特殊報第2号</b></p>	<p>令和6年10月31日 埼玉県病害虫防除所 (TEL:048-539-0661)</p>
-------------------------	----------------------	--

## チュウゴクアミガサハゴロモの発生について

県内の複数地域において、ハゴロモ類の発生と複数の農作物で産卵痕が確認された。加害虫について農林水産省横浜植物防疫所に同定を依頼した結果、チュウゴクアミガサハゴロモであることが判明した。

\* 特殊報：新規の有害動植物を発見した場合及び重要な有害動植物の発消長に特異な現象が認められた場合であって、従来と異なる防除対策が必要となるなど、生産現場への影響が懸念される場合に発表するものです。

- 1 害虫名 チュウゴクアミガサハゴロモ *Ricania shantungensis* (Chou & Lu, 1977)
- 2 対象作物 チャ、ナシ、ブルーベリー、カンキツ、カキ、宿根アスター
- 3 発生確認の経緯及び発生状況
  - (1) 令和6年9月から10月にかけて、県内の経済栽培されている複数の農作物において、ハゴロモ類の成虫・幼虫と枝への産卵が確認された。一部の個体を採取し、農林水産省横浜植物防疫所に同定を依頼したところ、チュウゴクアミガサハゴロモであることが判明した。
  - (2) 本種は中国を原産地としており、韓国、トルコ、フランス、ドイツおよびイタリアに外来種としての侵入が確認されている。国内では2017年に初確認されて以降、本州、九州及び四国の各地で発生が報告されている。また、神奈川県より本年8月に発表された病害虫発生予察特殊報においてブルーベリー枝への加害が報告されている。
- 4 本種の特徴及び生態
  - (1) 成虫の翅端までの体長は14~16mm、前翅長14mm程度で、前翅は茶褐色から鉄さび色であり、前翅前縁中央部に三角形の白斑が存在する(写真1、2)。
  - (2) 幼虫は白色で、腹部から白い糸状の蠟物質の毛束を広げる。また虫体の背面に小黑点を有し、翅芽は褐色である(写真3)。
  - (3) 本種は広食性であり、カバノキ科、クワ科、ブナ科、マメ科、モクセイ科等の様々な植物を宿主として利用することが知られている。本県では、ツバキ科、バラ科、ツツジ科、カキノキ科等の樹種およびキク科の草本植物における寄生および産卵を確認している。
- 5 被害の特徴
  - (1) 成虫および幼虫が枝を吸汁加害し、発生が多いと排泄物によるすす病が発生する。
  - (2) 成虫は寄主植物の枝に、多数の卵を規則正しく配列された状態で産み付けるため、枝の組織を損傷し、植物体を衰弱させる(写真4)。
  - (3) 産卵痕は白色で毛状の蠟物質で被覆される(写真5)。

## 6 防除対策

- (1) 令和6年10月現在、対象作物において本虫を対象とした登録農薬はない。
- (2) 産卵された枝を発見した場合は放置せず、切除して土中深くに埋めるか、焼却するなどして適切に処分する。
- (3) 当年枝の上部に産卵される場合が多いため、樹種の特徴に合わせて秋季の整枝や冬季の剪定を十分に励行し、耕種的防除につとめる。
- (4) 本種は多くの植木類にも産卵することが確認されている。対象作物以外の樹木類で産卵を確認した場合は、防除対策(2)のとおり適切に処分する。



写真1 成虫



写真2 チャ枝上で産卵中の雌成虫



写真3 幼虫



写真4 枝内の卵 (矢印)



写真5 カンキツにおける産卵跡



## 病虫害防除情報

コバトン

令和6年4月26日  
埼玉県病虫害防除所

### 1 情報名 ムギ類赤かび病について

### 2 情報内容

#### (1) ムギ類赤かび病の病徴について

ムギ類赤かび病は北海道から九州まで、全国各地に発生する病害で、カビが原因で発生します。幼苗、茎、葉、葉鞘等にも発生しますが、穂での発生が最も問題となります。

穂では、乳熟期ころから穂の一部または全体が褐変し、穎（えい）の合わせ目に桃色～橙色の胞子を生じるのが特徴です。穂軸や穂首が侵されて部分的あるいは穂全体が白穂になることもあります。発生が甚だしいときは、罹病子実は白っぽい屑麦や不稔粒となり、大きな減収となることがあります。

赤かび病菌は毒素を産生することから、罹病子実を多く含んだものを食用や飼料に用いると、人や家畜に中毒症状を起こすことがあります。このため、食品衛生法でかび毒の基準が定められており、赤かび粒が混入すれば出荷できません。



六条大麦の被害穂



小麦の被害穂

#### (2) 病原の特徴及び伝染

ムギ類の穂に胞子が作られ、その後、黒色の小粒が生じます。病原菌は罹病したムギの被害穂の他、ムギわら、イネわら、イネやトウモロコシの刈り株などで越冬します。越冬した病原菌は翌春、胞子を再形成し、これが飛散してムギ類に感染、

発病を起こします。種子伝染・土壌伝染することもあります。

本県奨励品種のうち、小麦「あやひかり」「さとのそら」及びはだか麦「イチバンボシ」の本病抵抗性は「中」、小麦「ハナマンテン」及び六条大麦「すずかぜ」の本病抵抗性は「弱」とされており、罹病しやすいので注意が必要です。



穂に生じたサーモンピンクの胞子

### (3) 胞子飛散好適日の出現状況

本年の熊谷のアメダスデータから推定される赤かび病子のう胞子飛散好適日は、4月1日から4月24日までの積算日数が10日(平年同期5.9日)で、過去10年で2番目に多くなっています。特に、4月17日～24日は8日間連続で子のう胞子飛散好適日が出ています。

本年は、11月下旬～12月上旬に播種した「さとのそら」の出穂期が4月10日～15日頃と見られ、最も感染しやすい開花期(出穂7～10日後)と子のう胞子飛散好適日が完全に一致しているため、赤かび病の多発生が懸念されます。

表1 赤かび病の発生に好適な気象条件の出現状況(熊谷)

日付(2024年4月)	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	
子のう穀形成好適日	○	○		○		○	○	○									○	○	○	○	○	○	○	○	
子のう胞子飛散好適日				●				●									●	●	●	●	●	●	●	●	
飛散好適日積算日数(4月1日～)	本年	0	0	0	1	1	1	1	2	2	2	2	2	2	2	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
	平年	0.2	0.3	0.4	0.6	0.7	1.0	1.2	1.4	1.4	1.5	1.6	1.8	2.0	2.1	2.5	2.7	3.1	3.7	4.1	4.3	4.5	5.1	5.5	5.9

○ 子のう穀形成好適日 : 平均気温が13℃以上で降雨直後(前日または当日)

● 子のう胞子飛散好適日 : 最高気温が15℃以上かつ最低気温が10℃以上で、湿度80%以上または降雨直後(前日または当日)

### (4) 防除対策

本病の防除は、開花期の薬剤散布が基本です。防除適期の目安は、小麦では出穂の7～10日後、六条大麦では穂揃期、二条大麦(ビール麦)では穂揃期の10日後頃となります。11月下旬～12月上旬まき小麦は、現在防除適期となっているほ場が多いので、早急に防除してください。

大麦など4月中旬に開花期防除を実施してその後降雨が続いたほ場、あるいは4月17日～24日が開花期に当たったほ場では、開花期防除の7～10日後に2回目の薬剤散布を実施してください。

表2 ムギ類赤かび病の防除薬剤例(地上散布<sup>1</sup>及び無人航空機散布<sup>2</sup>両対応)

薬剤名	FRACコード*	対象作物	使用時期	使用回数
ファンタジスタフロアブル	11	小麦	収穫14日前まで	3回以内
トップジンMゾル	1	小麦	収穫14日前まで	出穂期以降は2回以内
		麦類* (小麦を除く)	収穫14日前まで <sup>1</sup> 収穫21日前まで <sup>2</sup>	出穂期以降は1回以内
ミラビスフロアブル	7	小麦	収穫7日前まで	2回以内
		大麦	収穫14日前まで	2回以内
シルバキュアフロアブル	3	小麦	収穫7日前まで	2回以内
		大麦	収穫14日前まで	2回以内
ワークアップフロアブル	3	麦類	収穫7日前まで	3回以内

\* トップジンMゾルの麦類は散布方法によって使用時期が異なるので注意してください  
(使用基準は令和6年4月23日現在)

※ IRACコード及びFRACコードについて

病害虫の薬剤抵抗性発現防止の観点から、IRAC（世界農薬工業連盟殺虫剤抵抗性対策委員会）及びFRAC（同連盟殺菌剤耐性菌対策委員会）の農薬有効成分作用機構分類コードを記載しています。

農薬工業会ホームページ <http://www.jcpa.or.jp/lab0/mechanism.html>

#### <農薬使用上の注意事項>

- 1 農薬は、ラベルの記載内容を必ず守って使用する。
- 2 剤の使用回数、成分毎の総使用回数、使用量及び希釈倍数は使用の都度、確認する。  
特に、蚕や魚に対して影響の強い農薬など、使用上注意を要する薬剤を用いる場合は、周辺への危被害防止対策に万全を期すること。
- 3 農薬を散布するときは、農薬が周辺に飛散しないよう注意する。
- 4 周辺の住民に配慮し、農薬使用の前に周知徹底する。
- 5 農薬の最新情報は、農薬登録情報提供システム（農林水産省）で確認できる。  
農薬登録情報提供システム（農林水産省） <https://pesticide.maff.go.jp/>

※ 埼玉県農薬危害防止運動実施中（令和6年5月1日～8月31日）

問い合わせ先 埼玉県病害虫防除所 TEL：048-539-0661



## 病虫害防除情報



コバトン

令和6年6月26日  
埼玉県病虫害防除所

### 1 情報名 イネ縞葉枯病（ヒメトビウンカ）について

### 2 情報内容

#### (1) イネ縞葉枯病の病徴について

生育初期に感染すると、新葉が黄白色に退色し、こより状に巻いたまま弓状に徒長します。このような株は「ゆうれい」症状とも呼ばれ、分げつが少なく、枯死します。幼穂形成期以降の感染では出穂しないか、出穂しても出すくみ症状となり、これらの症状によって減収します。



縞状病斑とゆうれい症状



出すくみ穂

#### (2) 病原の特徴及び伝染

ヒメトビウンカが媒介する縞葉枯ウイルスによるウイルス病で、一度保毒したヒメトビウンカは死ぬまでウイルスを保毒するほか、卵を通じて次世代にも伝染します。麦類や畦畔雑草地で増殖したヒメトビウンカ第1世代保毒虫が、水田に移動してイネに感染させ、発病します。また、移植時期が6月中下旬のイネでは第2世代成虫が7月上旬頃から水田に飛来し、ウイルスを媒介します。感染・発病しやすい時期はイネの生育初期～幼穂形成期までで、その後は感染しにくくなります。

本県主要奨励品種のうち、本県育成の「彩のきずな」「彩のかがやき」は本病に抵抗性を持っていますが、「コシヒカリ」「キヌヒカリ」は罹病性です。特に、6月移植の「キヌヒカリ」は、本病感受性が高い時期であるため、ヒメトビウンカが

多発すると被害が大きくなる可能性があります。



ヒメトビウンカ5 齢幼虫(体長約 2mm)



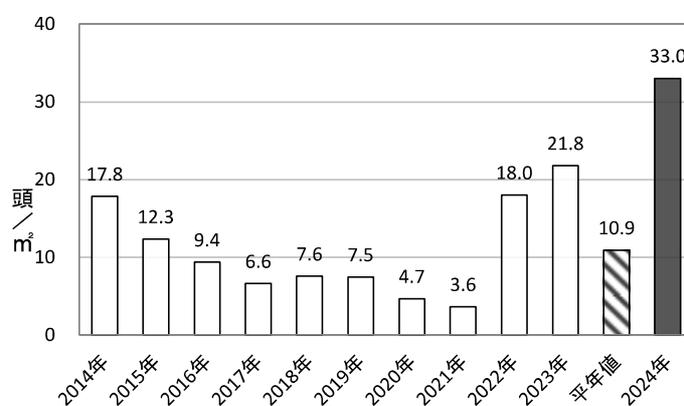
ヒメトビウンカ雌成虫(全長約 4mm)

### (3) ヒメトビウンカの発生状況

5月中旬に実施した麦類ほ場内でのヒメトビウンカの叩き出し調査の結果は33.0頭/m<sup>2</sup>で、過去10年で最も高い生息密度となりました(右図)。

6月中旬に実施した早期早植栽培の本田内のすくい取り調査(20回振り)の結果も平均

虫数49.9頭と、昨年の平均虫数68.8頭に次ぐ本田生息密度となっています。本年は小麦の出穂が例年より遅く、麦刈り前に本田内すくい取りを実施した地区もあり、さらにヒメトビウンカの生育もやや遅れていたため、6月下旬以降の本田生息密度はかなり高まっていると予測されます。



麦類ほ場内でのヒメトビウンカの叩き出し調査結果

### (4) 防除対策

縞葉枯病は、発生してからの防除はできないので、媒介虫であるヒメトビウンカの防除が重要です。

また、ヒメトビウンカは黒すじ萎縮ウイルスも媒介し、2013年には「彩のかがやき」等で感染株が見られました。ヒメトビウンカ多発時は、縞葉枯病抵抗性品種であっても防除が必要となります。



黒すじ萎縮病によるわい化株

ヒメトビウンカを対象とする箱施薬を実施していない場合は、速やかに本田での薬剤防除を行いましょう。

表 ヒメトビウンカの本田防除薬剤例(地上散布及び無人航空機散布両対応)

薬 剤 名	IRAC コード※	使用時期	使用回数
スタークル1キロH粒剤	4A	収穫7日前まで	3回以内
ダントツフロアブル	4A	収穫7日前まで	3回以内
エクシードフロアブル	4C	収穫7日前まで	3回以内
エミリアフロアブル	4F	収穫7日前まで	2回以内
キラップフロアブル	2B	収穫14日前まで	2回以内

(使用基準は令和6年6月25日現在)

※ IRACコード及びFRACコードについて

病害虫の薬剤抵抗性発現防止の観点から、IRAC（世界農薬工業連盟殺虫剤抵抗性対策委員会）及びFRAC（同連盟殺菌剤耐性菌対策委員会）の農薬有効成分作用機構分類コードを記載しています。

農薬工業会ホームページ <http://www.jcpa.or.jp/labo/mechanism.html>

#### <農薬使用上の注意事項>

- 1 農薬は、必ず最新のデータ及びラベル等を確認の上、使用する。
- 2 剤の使用回数、成分毎の総使用回数、使用量及び希釈倍数は使用の都度確認する。特に、蚕や魚に対して影響の強い農薬など、使用上注意を要する薬剤を用いる場合は、周辺への危被害防止対策に万全を期すること。
- 3 農薬の選定に当たっては、系統の異なる薬剤を交互に散布する。
- 4 農薬を散布するときは、農薬が周辺に飛散しないよう注意する。
- 5 周辺の住民に配慮し、農薬使用の前に周知徹底する。

※ 埼玉県農薬危害防止運動実施中（令和6年5月1日～8月31日）

問い合わせ先 埼玉県病害虫防除所 TEL：048-539-0661



コバトン&さいたまっち

## 病虫害防除情報

令和6年8月6日  
埼玉県病虫害防除所

### 1 情報名 チャのチャノミドリヒメヨコバイについて

### 2 情報内容

#### (1) チャノミドリヒメヨコバイの発生状況

4月以降、本虫の発生量\*が平年を大きく上回って推移しています。7月中旬の発生予察調査における発生量は過去10年間で最も多く、平年の2倍以上となっています(図)。

また、本県の茶業研究所(入間市)の県予察ほ場にて7月に実施した調査では、本虫による被害芽率は66%(平年値54.9%)と発生が多くなっています。【\*発生量:発生面積に、発生程度に応じた係数を掛けたもの】



図: チャノミドリヒメヨコバイの発生量

#### (2) チャノミドリヒメヨコバイの特徴と被害

成虫の体長は約3mmで体色は淡緑色、幼虫は黄緑色をしています(写真1,2)。成虫で越冬し、6月下旬から発生が目立つようになり、7月と9月に多発する傾向があります。本虫の吸汁・加害により、葉脈褐変・葉色の黄化や葉の湾曲が発生し(写真3、点線内)、加害が進むと葉の辺縁部に黒色の枯死部が見られるようになります(写真3、矢印部分)。



写真1: 成虫



写真2: 幼虫



写真3: 被害葉  
黄化や湾曲が生じ、加害の進展により辺縁部が黒変・枯死する。

### (3) 防除のポイント

乾燥した晴天が続くと急激に増殖することがあり、秋芽の萌芽および伸長期の被害につながります。本虫は若い葉や幼梢を好むため、8月のうちに三番茶芽の上位3葉を整枝すると発生抑制効果があります。今後の、秋芽の萌芽および伸長期の加害は被害が大きくなりやすいため、芽の生育と本虫の発生状況に合わせ、表を参考に早期の防除につとめてください。

表2 チャのチャノミドリヒメヨコバイの防除薬剤例

薬 剤 名	IRAC コード	使 用 時 期	使用回数
コテツフロアブル*	1 3	摘採 7 日前まで	2 回以内
ガンバ水和剤*	1 2 A	摘採 1 4 日前まで	1 回
スタークル顆粒水溶剤/ アルバリン顆粒水溶剤	4 A	摘採 7 日前まで	2 回以内
ハチハチフロアブル*	2 1 A	摘採 1 4 日前まで	1 回
ウララ D F	2 9	摘採 7 日前まで	1 回
コルト顆粒水和剤	9 B	摘採 7 日前まで	2 回以内
ヨーバルフロアブル	2 8	摘採 7 日前まで	1 回

\* 劇物 (使用基準は令和6年8月5日現在)

※ IRAC コード及び FRAC コードについて

病害虫の薬剤抵抗性発現防止の観点から、IRAC（世界農薬工業連盟殺虫剤抵抗性対策委員会）及びFRAC（同連盟殺菌剤耐性菌対策委員会）の農薬有効成分作用機構分類コードを記載しています。

農薬工業会ホームページ <http://www.jcpa.or.jp/labo/mechanism.html>

< 農薬使用上の注意事項 >

- 1 農薬は、必ず最新のデータ及びラベル等を確認の上、使用する。
- 2 剤の使用回数、成分毎の総使用回数、使用量及び希釈倍数は使用の都度確認する。特に、蚕や魚に対して影響の強い農薬など、使用上注意を要する薬剤を用いる場合は、周辺への危被害防止対策に万全を期すること。
- 3 農薬の選定に当たっては、系統の異なる薬剤を交互に散布する。
- 4 農薬を散布するときは、農薬が周辺に飛散しないよう注意する。
- 5 周辺の住民に配慮し、農薬使用の前に周知徹底する。

※ 埼玉県農薬危害防止運動実施中（令和6年5月1日～8月31日）

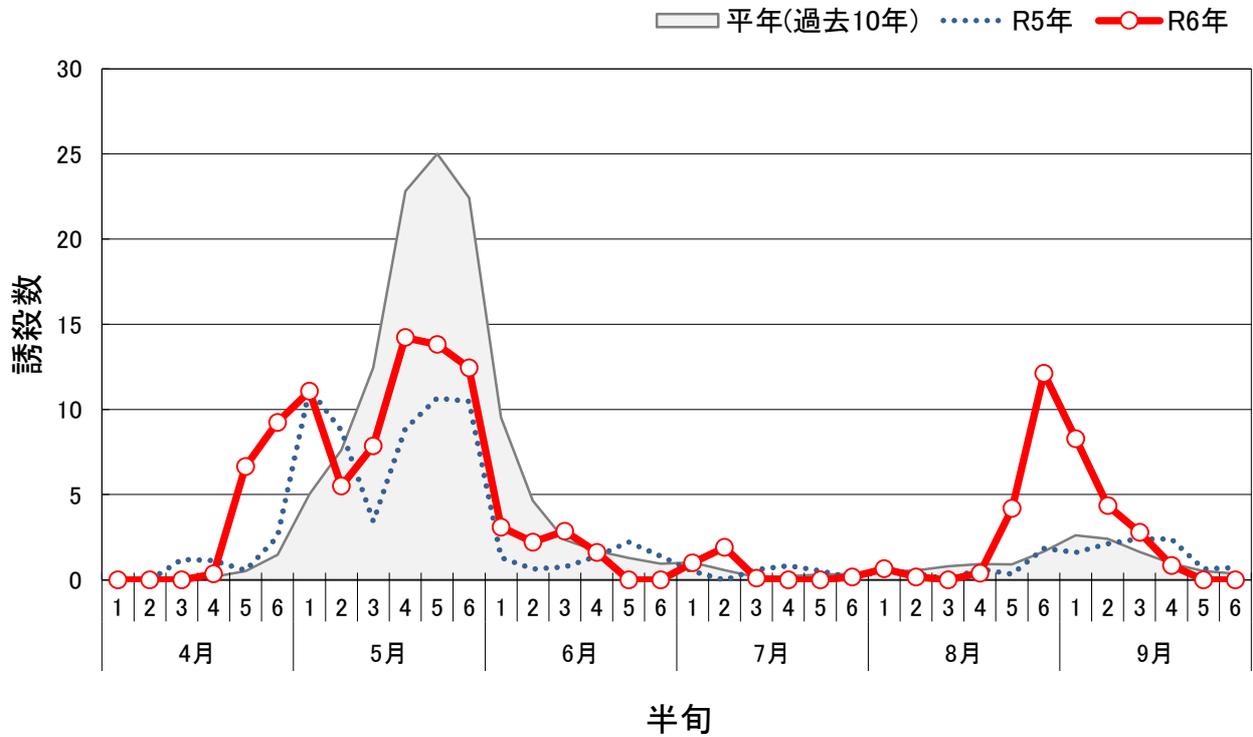
問い合わせ先 埼玉県病害虫防除所 TEL：048-539-0661

(2) 病虫害発生予察調査等結果

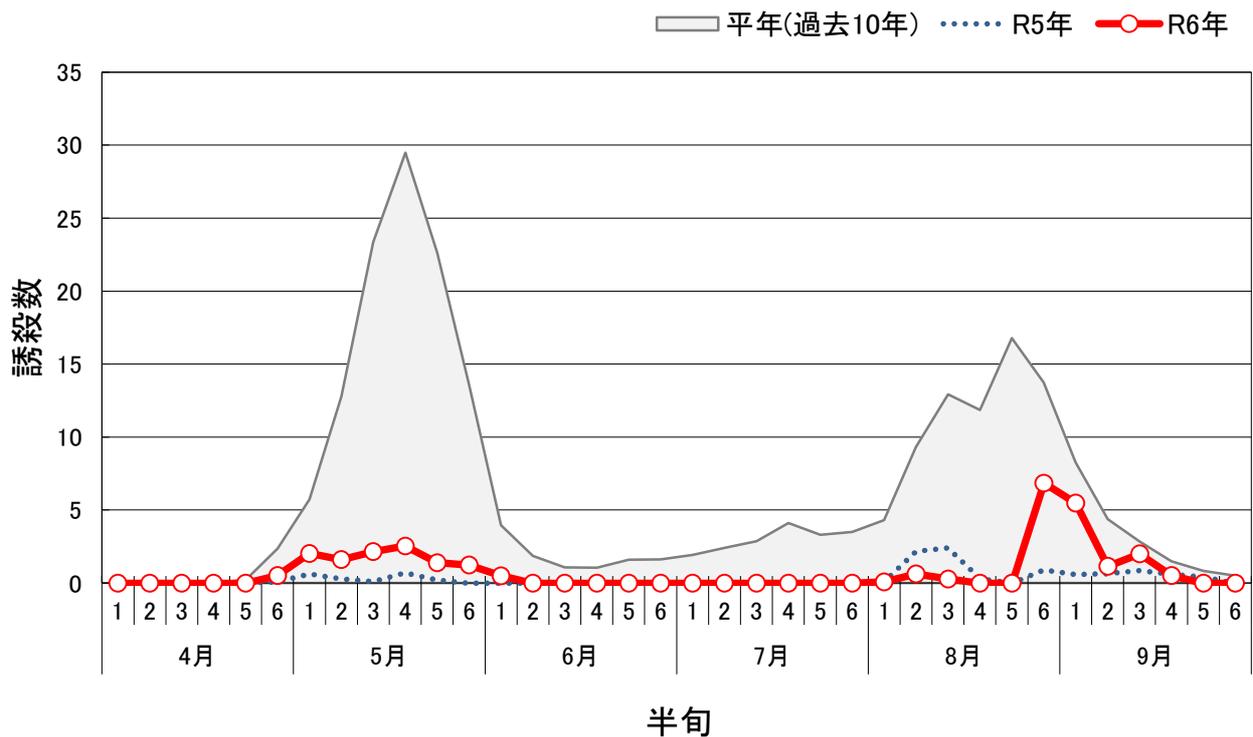
ア 水稲・麦

(ア) フタオビコヤガ (イネアオムシ) のフェロモントラップ調査 (4~9月)

対象作物:水稲 調査地点:熊谷市中曽根



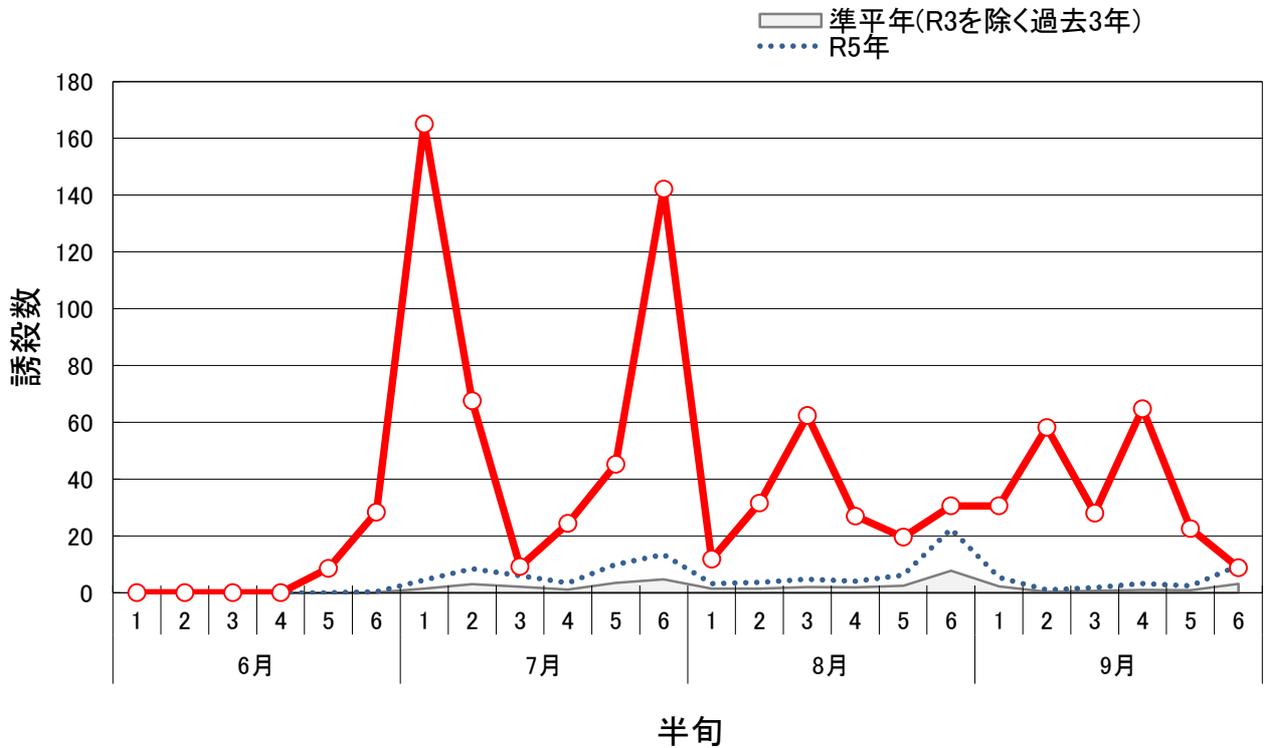
対象作物:水稲 調査地点:加須市戸室



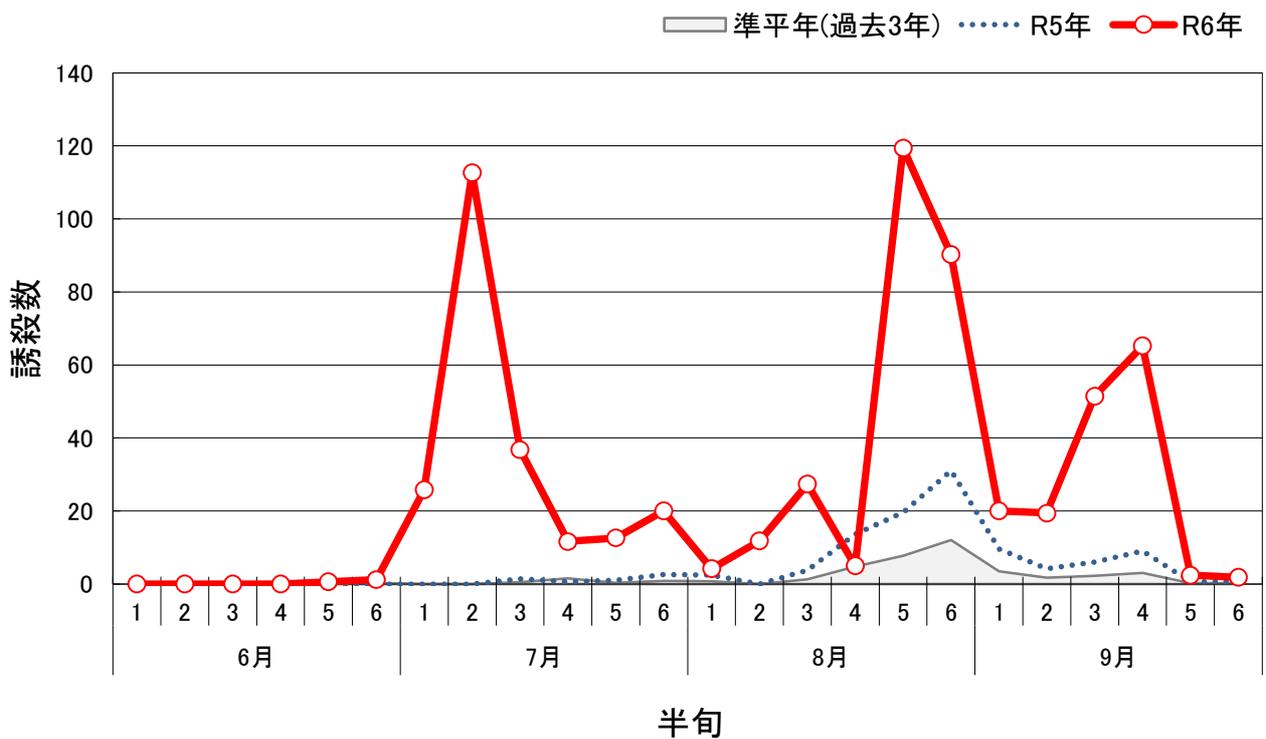
(イ) イネカメムシ予察灯誘殺消長 (6~9月、多誘殺地点のみ)

a 白熱電球予察灯 (水稻各種害虫調査用)

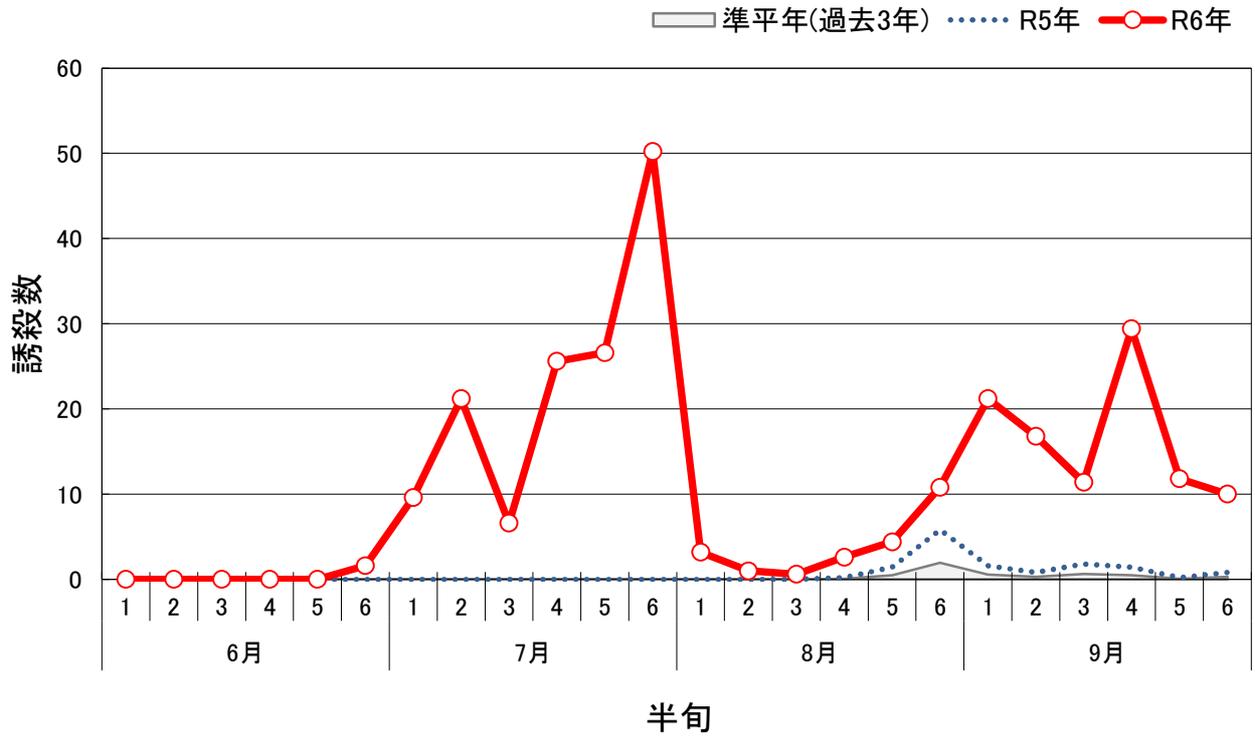
対象作物: 水稻 調査地点: 春日部市樋籠



対象作物: 水稻 調査地点: 加須市大越

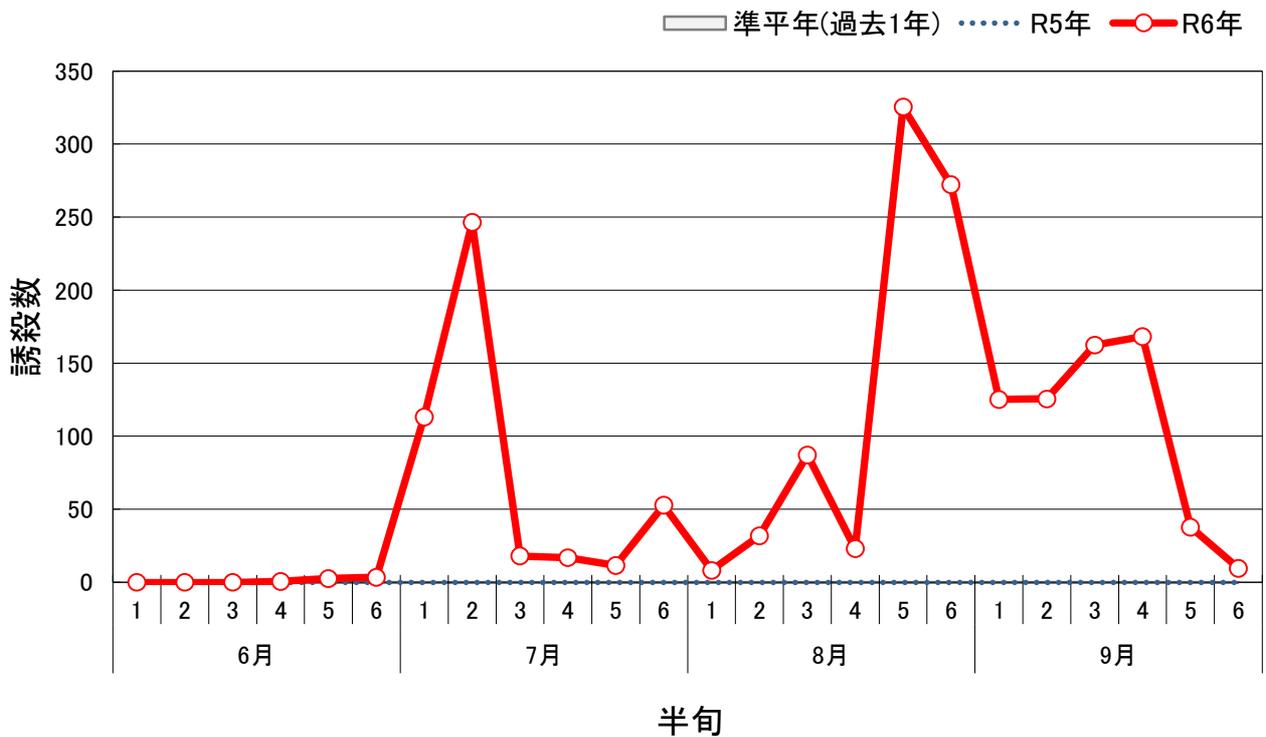


対象作物: 水稻 調査地点: 熊谷市玉井

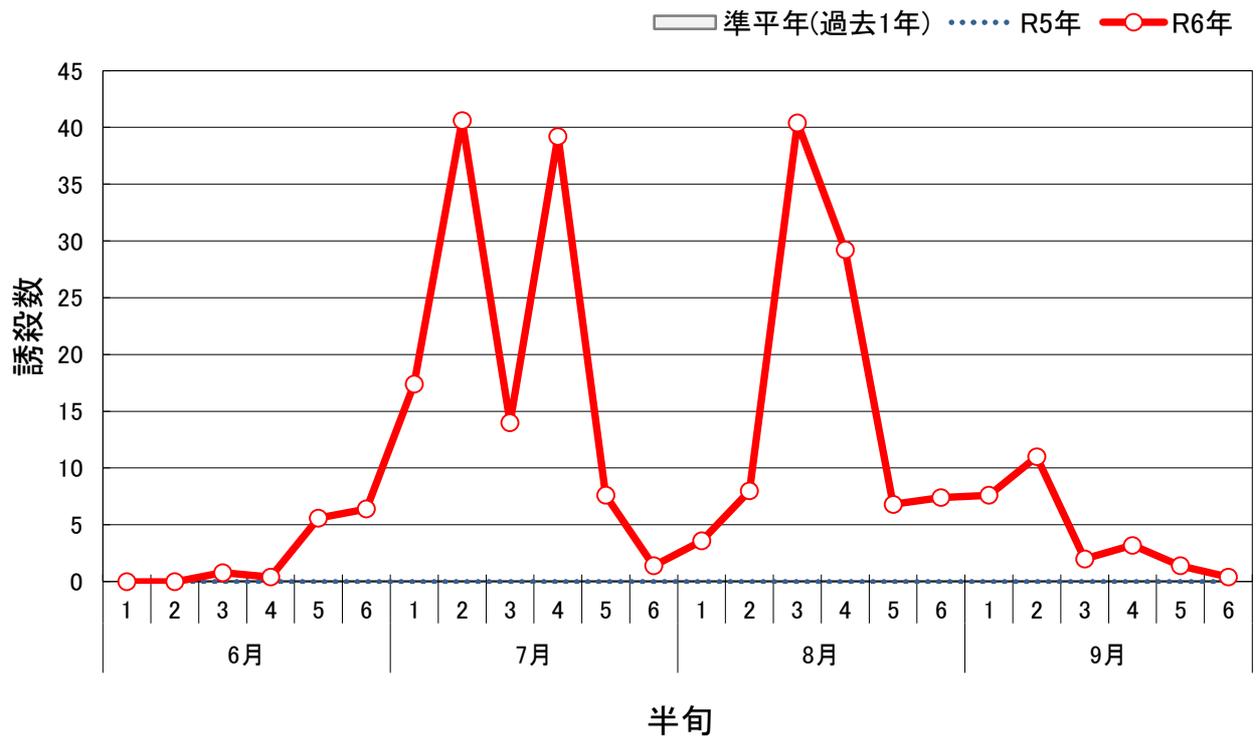


b 水銀灯予察灯 (果樹カメムシ類調査用)

対象作物: 水稻 調査地点: 久喜試験場



対象作物: 水稻 調査地点: 春日部市内牧



(ウ) 赤かび病の発生に好適な気象条件の出現状況 (熊谷)

本年の熊谷のアメダスデータから推定される赤かび病子のう胞子飛散好適日は、4月1日から4月30日までの積算日数が16日(平年同期8.1日)と過去10年で最も多くなった。特に、4月17日から5月3日まで17日間連続で子のう胞子飛散好適日が出ており、11月下旬以降に播種した小麦では最も感染しやすい開花期と子のう胞子飛散好適日が完全に一致した。

このため、5月中旬の病害虫発生状況調査では、各調査地点で各麦種とも本病の発生が見られ、5月中旬の発生量は過去10年で最も多く、平年比「多」となった。

年月日	平均気温	最高気温	最低気温	降水量	降水有無	平均湿度	子のう殻	子のう胞子	多発生	飛散好適日積算(3/1~)	
	(°C)	(°C)	(°C)	(mm)	(無=1)	(%)	形成好適日	飛散好適日	好適日	本年	平年
2024/3/26	9.1	11.4	7.1	44.0	0	94				0	0.8
2024/3/27	10.2	16.3	5.4	0.0	1	51				0	0.9
2024/3/28	8.6	13.0	4.0	11.0	0	68				0	0.9
2024/3/29	14.5	22.2	8.7	23.0	0	88	●			0	1.0
2024/3/30	17.3	25.9	8.8	0.0	1	59	●			0	1.3
2024/3/31	17.8	27.3	10.2	0.0	1	63				0	1.4
2024/4/1	14.9	19.5	9.4	0.5	0	57	●			0	1.6
2024/4/2	14.1	20.7	7.4	0.0	1	43	●			0	1.7
2024/4/3	11.2	14.2	9.5	14.5	0	76				0	1.8
2024/4/4	15.7	22.1	10.4	1.5	0	70	●	○		1	2.0
2024/4/5	10.4	13.9	8.0	1.0	0	81				1	2.1
2024/4/6	12.5	16.2	8.7	0.0	0	80				1	2.4
2024/4/7	17.2	24.0	9.7	0.0	1	74	●			1	2.6
2024/4/8	18.3	24.1	14.1	1.0	0	85	●	○	◎	2	2.8
2024/4/9	14.3	17.4	8.7	29.0	0	74	●			2	2.8
2024/4/10	11.4	18.7	6.1	0.0	1	44				2	2.9
2024/4/11	12.9	19.4	5.3	0.0	1	62				2	3.0
2024/4/12	15.6	20.8	11.4	0.0	1	67				2	3.2
2024/4/13	16.5	24.2	9.5	0.0	1	67				2	3.4
2024/4/14	18.3	26.3	10.8	0.0	1	63				2	3.5
2024/4/15	19.1	27.8	11.7	0.0	1	61				2	3.9
2024/4/16	18.1	25.0	12.1	0.0	1	70		△		2	4.1
2024/4/17	19.4	25.6	14.2	0.0	0	69	●	○		3	4.5
2024/4/18	17.8	21.5	13.9	2.0	0	65	●	○		4	5.1
2024/4/19	17.3	21.9	12.5	0.0	0	47	●	○		5	5.5
2024/4/20	19.8	27.9	11.4	0.0	1	43	●	○		6	5.7
2024/4/21	18.7	23.9	14.9	0.0	0	64	●	○		7	5.9
2024/4/22	15.6	18.4	13.0	1.0	0	83	●	○		8	6.5
2024/4/23	16.6	20.3	15.2	0.0	0	84	●	○		9	6.9
2024/4/24	14.2	15.7	13.4	15.0	0	95	●	○		10	7.3
2024/4/25	19.9	28.0	12.8	1.0	0	65	●	○		11	7.7
2024/4/26	20.3	26.3	13.2	0.0	1	63	●	○		12	8.0
2024/4/27	20.5	24.9	17.4	0.0	0	78	●	○		13	8.5
2024/4/28	22.4	30.8	14.3	0.0	1	63	●	○		14	8.8
2024/4/29	21.9	29.2	16.2	0.0	0	70	●	○		15	9.1
2024/4/30	20.3	23.2	18.3	1.0	0	85	●	○	◎	16	9.5
2024/5/1	16.2	20.5	11.5	21.5	0	92	●	○		17	
2024/5/2	15.7	21.7	11.0	5.0	0	67	●	○		18	
2024/5/3	17.9	26.6	10.3	0.0	1	64	●	○		19	
2024/5/4	20.9	29.7	12.3	0.0	1	50				19	
2024/5/5	22.1	31.7	13.0	0.0	1	50				19	
出現日数(3月)							2	0	0		1.4
出現日数(4月)							20	16	2		8.1
出現日数(3~4月)							22	16	2		9.5

●:子のう殻形成好適日:平均気温が13℃以上で降雨直後(前日または当日)  
 ○:子のう胞子飛散好適日:最高気温が15℃以上かつ最低気温が10℃以上で、湿度80%以上または降雨直後(前日または当日)  
 △:子のう胞子飛散好適日の温度条件が合致しており、かつ湿度70~79%の場合  
 ◎:多発生好適日:平均気温が18℃以上で、前日または当日に降雨があり、平均湿度が80%以上  
 ※赤かび病の第一次伝染源である子のう殻の形成が盛んになるのは、日平均気温が13℃以上で降雨直後である。子のう胞子の飛散が盛んになるのは、日最高気温で15℃以上、日最低気温が10℃以上で、湿度80%以上かつ降雨直後である。また、出穂期以降の平均気温が18~20℃を越え、湿度も80%以上が3日以上続く場合、あるいは降雨又は濃霧頻度が高い(日照時間が少ない)場合多発しやすい。

(エ) 麦ほ場におけるウンカ・ヨコバイ類生息密度調査(5月)

調査方法： 麦類の乳熟期(令和6年5月8日～14日)に、県内15地点の麦類ほ場において、1地点3か所で1m幅(0.2～0.6m<sup>2</sup>)の麦穂を10回叩いて落ちて来るヒメトビウンカを採取し、1m<sup>2</sup>当たりの生息密度を算出した。

調査結果： 令和6年度のヒメトビウンカの麦類叩き出し調査の結果は33.0頭/m<sup>2</sup>で、過去10年で最も生息密度が高く、次いで高かった昨年の約2倍、平年の約3倍となった。また、調査地点によるばらつきはあるが、昨年より低くなったのは4地点で、概ね増加傾向にあった。

図. 令和6年5月麦類ウンカ・ヨコバイ生息密度調査結果 (単位： 頭/m<sup>2</sup>)

調査場所	調査月日	麦種	ヒメトビウンカ			ツマグロヨコバイ		
			成虫	幼虫	計	成虫	幼虫	計
川越市古谷上	5/10	小麦	0.0	6.7	6.7	0.0	1.1	1.1
坂戸市片柳	5/10	小麦	0.0	9.3	9.3	0.0	0.4	0.4
熊谷市樋春	5/8	小麦	0.0	36.7	36.7	0.0	0.0	0.0
熊谷市中曽根	5/10	小麦	0.0	63.3	63.3	0.0	0.0	0.0
川島町戸守	5/10	小麦	0.0	102.2	102.2	0.0	0.0	0.0
川島町東部	5/10	小麦	0.0	38.9	38.9	0.0	1.1	1.1
鴻巣市屈巢	5/10	小麦	0.0	82.7	82.7	0.0	1.3	1.3
行田市上池守	5/10	小麦	0.0	6.7	6.7	0.0	0.0	0.0
行田市前谷	5/10	小麦	0.0	31.1	31.1	0.0	0.0	0.0
加須市大越	5/10	小麦	0.0	57.8	57.8	0.0	1.3	1.3
熊谷市飯塚	5/10	小麦	0.0	5.6	5.6	0.0	0.0	0.0
上里町長浜	5/10	小麦	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
本庄市児玉町	5/10	小麦	0.0	21.3	21.3	0.0	0.0	0.0
白岡市太田新井	5/14	小麦	0.0	21.1	21.1	0.0	0.0	0.0
蓮田市駒崎	5/14	小麦	0.0	12.2	12.2	0.0	0.0	0.0
平均(15地点)			0.0	33.0	33.0	0.0	0.3	0.3
昨年(令和5年)			0.2	21.6	21.8	0.0	0.8	0.8
平年値(過去10年間:平成26年～令和5年)			2.2	8.7	10.9	0.1	0.5	0.5

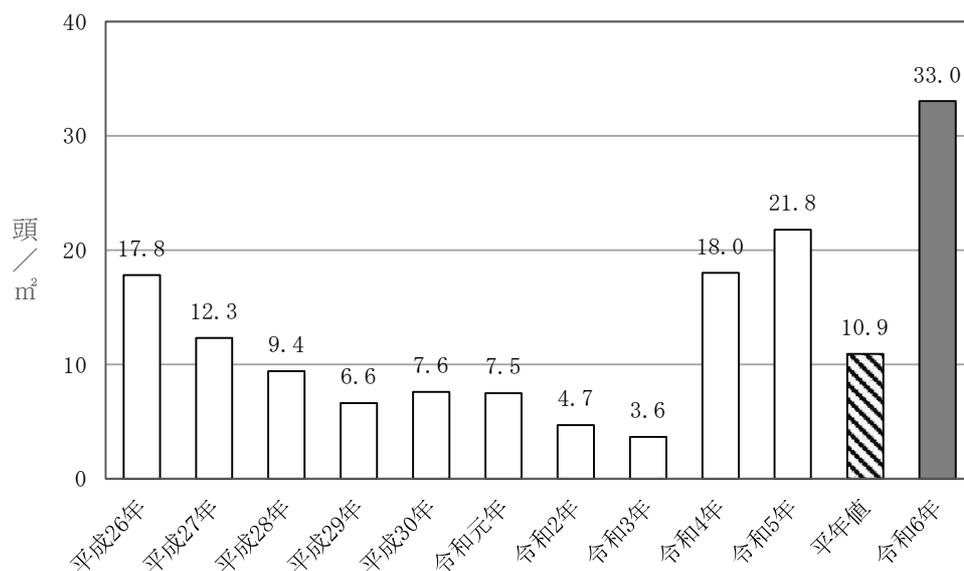


図. 令和6年5月ヒメトビウンカ密度調査結果 (麦類叩き出し)

(オ) 予察灯調査 (5~9月)

病害虫名		ニカメイガ					
地点名	半旬	5月	6月	7月	8月	9月	年計
川越市 南田島	1	1	1	5	0	3	
	2	0	0	9	2	0	
	3	2	2	1	3	0	
	4	1	0	1	1	0	
	5	1	0	0	3	0	
	6	0	0	0	7	0	
	計	5	3	16	16	3	43
	平年値	7.5	1.5	15.8	18.3	6.3	49.4
川島町 上八ツ林	1	0	3	1	3	19	
	2	0	2	5	2	19	
	3	0	7	5	3	9	
	4	2	3	8	2	4	
	5	0	0	7	5	0	
	6	0	8	8	11	0	
	計	2	23	34	26	51	136
	平年値	3.6	4.9	2.6	3.3	2.9	17.3
本庄市 児玉町 吉田林	1	0	0	0	0	0	
	2	0	0	0	0	0	
	3	0	0	0	0	0	
	4	1	0	0	0	0	
	5	0	0	0	0	0	
	6	0	0	0	0	0	
	計	1	0	0	0	0	1
	平年値	1.1	1.2	7.2	4.4	1.1	15.0
熊谷市 玉井	1	0	0	0	0	1	
	2	0	1	0	0	0	
	3	0	5	0	0	0	
	4	0	0	0	1	0	
	5	0	1	0	0	0	
	6	0	0	0	0	0	
	計	0	7	0	1	1	9
	平年値	2.1	4.7	2.7	1.6	1.9	13.0
加須市 大越	1	14	1	7	0	2	
	2	10	0	3	5	1	
	3	18	4	0	0	3	
	4	5	1	2	1	0	
	5	2	1	3	13	0	
	6	1	3	12	12	0	
	計	50	10	27	31	6	124
	平年値	32.4	9.2	12.3	12.8	6.5	71.1
春日部市 樋籠	1	2	2	3	6	12	
	2	0	2	2	14	2	
	3	3	4	2	3	2	
	4	20	6	16	6	0	
	5	6	4	23	10	0	
	6	2	4	25	27	0	
	計	33	22	71	66	16	208
	平年値	3.4	3.7	9.2	15.4	2.1	33.8

病害虫名		イネミズゾウムシ					
地点名	半旬	5月	6月	7月	8月	9月	年計
川越市 南田島	1	0	0	2	1	0	
	2	0	0	1	1	0	
	3	0	0	2	0	0	
	4	0	0	2	0	0	
	5	0	0	0	0	0	
	6	0	0	0	3	0	
	計	0	0	7	5	0	12
	平年値	2.0	1.4	15.1	6.4	4.5	29.4
川島町 上八ツ林	1	0	0	0	0	0	
	2	0	0	0	0	0	
	3	0	0	0	0	0	
	4	0	0	0	0	0	
	5	0	0	0	0	0	
	6	0	0	0	0	0	
	計	0	0	0	0	0	0
	平年値	1.3	0.4	1.3	0.8	0.1	3.9
本庄市 児玉町 吉田林	1	0	0	0	0	0	
	2	0	0	0	0	0	
	3	0	0	0	0	0	
	4	0	0	0	0	0	
	5	0	0	0	0	0	
	6	0	0	0	0	0	
	計	0	0	0	0	0	0
	平年値	0.4	0.6	0.7	1.4	0.2	3.3
熊谷市 玉井	1	0	0	0	0	0	
	2	0	0	0	0	0	
	3	0	0	0	0	0	
	4	0	0	0	0	0	
	5	0	0	0	0	0	
	6	0	0	0	0	0	
	計	0	0	0	0	0	0
	平年値	1.0	1.3	7.8	1.6	0.0	11.7
加須市 大越	1	0	0	16	1	0	
	2	0	0	252	5	0	
	3	0	0	31	3	0	
	4	2	0	61	0	0	
	5	3	0	46	0	0	
	6	1	0	46	0	0	
	計	6	0	452	9	0	467
	平年値	24.4	1.2	100.4	7.8	0.3	133.2
春日部市 樋籠	1	4	0	12	4	2	
	2	0	0	90	2	0	
	3	0	0	22	0	1	
	4	9	0	43	0	0	
	5	6	0	43	0	0	
	6	0	0	19	1	0	
	計	19	0	229	7	3	258
	平年値	13.3	3.9	130.6	10.1	0.5	158.4

注) 平年値は直近10年間の平均値。加須市大越はR3年度開始のため、隣接の加須市外野のH26~R1年度と大越R3~R5の9年間の平均値を使用。

病害虫名		ツマグロヨコバイ					
地点名	半旬	5月	6月	7月	8月	9月	年計
	1	0	0	0	1	0	
	2	0	0	1	1	1	
川越市	3	0	0	2	0	0	
南田島	4	0	1	1	0	0	
	5	0	0	0	0	0	
	6	0	1	1	0	0	
計	0	2	5	2	1	10	
平年値	0.0	0.4	1.4	3.0	1.0	5.8	
	1	0	0	2	0	1	
	2	0	0	3	2	3	
川島町	3	0	0	0	2	4	
上八ツ林	4	0	0	2	4	1	
	5	0	0	2	0	1	
	6	0	1	0	1	0	
計	0	1	9	9	10	29	
平年値	0.2	1.3	11.6	13.6	23.6	50.3	
	1	1	1	0	0	0	
	2	0	0	0	0	1	
本庄市	3	0	0	0	0	6	
児玉町	4	0	0	0	0	18	
吉田林	5	0	0	0	0	0	
	6	0	0	0	0	0	
計	1	1	0	0	25	27	
平年値	0.9	3.2	10.9	59.5	277.0	351.5	
	1	0	0	1	1	1	
	2	0	0	0	0	2	
熊谷市	3	0	0	0	0	2	
玉井	4	0	0	2	0	5	
	5	0	0	0	0	0	
	6	0	0	1	0	0	
計	0	0	4	1	10	15	
平年値	0.5	0.2	8.8	15.1	20.1	44.7	
	1	0	0	4	0	1	
	2	0	0	23	10	11	
加須市	3	0	0	3	8	1	
大越	4	0	1	9	0	9	
	5	0	0	19	3	0	
	6	0	0	18	1	2	
計	0	1	76	22	24	123	
平年値	1.6	7.3	73.7	72.9	50.1	191.9	
	1	0	0	5	1	5	
	2	0	0	3	3	9	
春日部市	3	0	0	1	6	19	
樋籠	4	0	1	5	1	7	
	5	0	2	2	1	0	
	6	0	0	2	0	0	
計	0	3	18	12	40	73	
平年値	0.3	9.8	7.7	4.4	2.3	24.5	

病害虫名		セジロウンカ					
地点名	半旬	5月	6月	7月	8月	9月	年計
	1	0	0	2	31	1	
	2	0	0	3	11	26	
川越市	3	0	0	1	33	35	
南田島	4	0	0	0	20	11	
	5	0	0	2	37	0	
	6	0	0	1	0	2	
計	0	0	9	132	75	216	
平年値	0.0	1.5	10.0	70.5	53.4	135.4	
	1	0	0	0	0	0	
	2	0	0	0	1	0	
川島町	3	0	0	0	1	0	
上八ツ林	4	0	0	0	0	0	
	5	0	0	3	0	0	
	6	0	0	1	0	0	
計	0	0	4	2	0	6	
平年値	0.0	0.3	0.6	3.4	3.8	8.1	
	1	0	0	0	0	0	
	2	0	0	0	6	0	
本庄市	3	0	0	0	3	0	
児玉町	4	0	0	0	0	0	
吉田林	5	0	0	0	10	0	
	6	0	0	14	0	0	
計	0	0	14	19	0	33	
平年値	0.0	0.0	1.3	22.4	10.2	33.9	
	1	0	0	0	2	2	
	2	0	0	0	1	2	
熊谷市	3	0	0	0	4	3	
玉井	4	0	0	1	2	0	
	5	0	12	1	5	0	
	6	0	1	2	4	0	
計	0	13	4	18	7	42	
平年値	0.0	0.1	4.1	13.0	10.3	27.5	
	1	0	0	1	0	5	
	2	0	0	0	2	10	
加須市	3	0	0	0	1	27	
大越	4	0	0	1	5	27	
	5	0	0	2	21	0	
	6	0	1	0	2	0	
計	0	1	4	31	69	105	
平年値	0.0	0.6	2.2	7.5	4.6	13.6	
	1	0	0	0	0	0	
	2	0	0	0	0	0	
春日部市	3	0	0	0	1	0	
樋籠	4	0	0	0	2	3	
	5	0	0	2	0	1	
	6	0	0	1	0	0	
計	0	0	3	3	4	10	
平年値	0.1	0.8	1.1	2.3	0.3	4.6	

注) 平年値は直近10年間の平均値。加須市大越はR3年度開始のため、隣接の加須市外野のH26～R1年度と大越R3～R5の9年間の平均値を使用。

病害虫名		ヒメトビウンカ					
地点名	半旬	5月	6月	7月	8月	9月	年計
	1	0	0	14	21	1	
	2	0	0	4	34	0	
川越市	3	0	0	3	30	1	
南田島	4	0	0	0	3	0	
	5	0	0	1	18	1	
	6	0	0	10	2	0	
計	0	0	32	108	3	143	
平年値	2.9	23.9	102.8	165.2	12.9	307.7	
	1	0	0	4	23	1	
	2	0	0	6	13	4	
川島町	3	0	0	1	7	2	
上八ツ林	4	0	0	1	9	0	
	5	0	1	6	1	0	
	6	0	0	16	0	0	
計	0	1	34	53	7	95	
平年値	2.7	13.8	34.5	94.6	14.3	159.9	
	1	0	0	5	2	0	
	2	0	0	1	4	0	
本庄市	3	0	0	0	0	0	
児玉町	4	0	0	4	3	0	
吉田林	5	0	0	23	3	0	
	6	2	1	3	0	0	
計	2	1	36	12	0	51	
平年値	2.4	3.8	46.4	128.4	38.6	219.6	
	1	0	0	90	107	4	
	2	0	0	48	30	16	
熊谷市	3	0	1	0	12	1	
玉井	4	0	0	10	7	2	
	5	0	11	13	1	0	
	6	0	20	19	2	0	
計	0	32	180	159	23	394	
平年値	3.5	13.6	166.2	189.1	27.7	400.1	
	1	0	2	104	377	6	
	2	0	8	160	216	24	
加須市	3	0	5	3	228	18	
大越	4	0	0	4	14	9	
	5	13	0	78	29	1	
	6	9	33	674	26	0	
計	22	48	1023	890	58	2041	
平年値	2.1	34.2	187.4	479.9	14.4	663.1	
	1	0	0	7	15	2	
	2	0	0	45	40	1	
春日部市	3	0	1	3	19	1	
樋籠	4	0	0	1	2	3	
	5	0	0	19	0	0	
	6	0	0	23	0	1	
計	0	1	98	76	8	183	
平年値	0.5	26.8	24.3	14.8	2.9	69.3	

病害虫名		フタオビコヤガ					
地点名	半旬	5月	6月	7月	8月	9月	年計
	1	0	0	0	0	0	
	2	0	0	0	0	0	
川越市	3	0	0	0	0	0	
南田島	4	0	0	0	1	0	
	5	0	0	0	0	0	
	6	0	0	0	1	0	
計	0	0	0	0	2	0	2
平年値	0.6	1.3	5.4	7.3	2.9	17.5	
	1	1	1	2	0	0	
	2	0	2	2	0	2	
川島町	3	0	1	1	3	0	
上八ツ林	4	0	0	0	0	0	
	5	3	4	3	0	0	
	6	2	2	1	1	0	
計	6	10	9	4	2	31	
平年値	6.0	4.0	2.6	13.0	4.8	30.4	
	1	0	0	0	0	0	
	2	0	0	0	0	0	
本庄市	3	0	0	0	0	0	
児玉町	4	0	0	0	0	1	
吉田林	5	0	0	0	0	0	
	6	0	0	0	0	0	
計	0	0	0	0	0	1	1
平年値	0.1	1.6	11.5	20.8	9.6	43.6	
	1	0	0	0	0	1	
	2	0	0	0	0	2	
熊谷市	3	0	0	0	1	0	
玉井	4	0	0	0	0	0	
	5	0	0	0	1	1	
	6	0	0	0	0	0	
計	0	0	0	2	4	6	
平年値	0.3	0.7	0.6	2.6	3.1	7.3	
	1	0	0	1	13	8	
	2	0	0	1	53	3	
加須市	3	0	0	2	30	0	
大越	4	0	0	1	3	0	
	5	0	0	0	11	0	
	6	0	0	9	12	0	
計	0	0	14	122	11	147	
平年値	3.7	5.0	18.3	45.8	11.4	77.8	
	1	0	0	0	2	3	
	2	0	2	1	7	6	
春日部市	3	0	0	0	7	1	
樋籠	4	0	1	1	3	0	
	5	0	1	0	5	0	
	6	0	0	2	2	0	
計	0	4	4	26	10	44	
平年値	0.4	2.3	1.1	5.1	1.0	9.9	

注) 平年値は直近10年間の平均値。加須市大越はR3年度開始のため、隣接の加須市外野のH26～R1年度と大越R3～R5の9年間の平均値を使用。

病害虫名		斑点米カメムシ類(イネカメ、イネホソを除く)					
地点名	半旬	5月	6月	7月	8月	9月	年計
	1	0	0	3	2	7	
	2	0	1	4	1	4	
川越市	3	0	0	0	2	1	
南田島	4	0	1	3	6	1	
	5	0	2	0	0	0	
	6	0	3	0	3	1	
計	0	7	10	14	14	45	
平年値	0.5	1.0	6.2	11.3	4.3	23.3	
	1	0	0	2	1	12	
	2	0	0	2	2	6	
川島町	3	0	0	0	2	7	
上八ツ林	4	0	0	0	4	10	
	5	0	1	1	1	2	
	6	0	0	0	2	0	
計	0	1	5	12	37	55	
平年値	0.2	3.8	3.7	10.0	4.2	21.9	
	1	0	0	16	3	5	
	2	0	0	4	0	7	
本庄市	3	0	0	3	0	26	
児玉町	4	0	1	4	6	33	
吉田林	5	0	10	3	7	12	
	6	0	1	8	4	12	
計	0	12	38	20	95	165	
平年値	1.7	5.8	12.2	21.2	34.0	74.9	
	1	0	0	11	9	26	
	2	0	0	26	4	20	
熊谷市	3	0	1	4	3	11	
玉井	4	0	0	29	3	46	
	5	0	0	33	6	8	
	6	0	0	54	7	10	
計	0	1	157	32	121	311	
平年値	0.1	1.3	1.7	2.3	3.2	8.6	
	1	0	0	48	6	25	
	2	0	0	156	16	40	
加須市	3	0	0	26	47	55	
大越	4	0	0	7	4	89	
	5	0	3	31	144	2	
	6	1	7	51	80	2	
計	1	10	319	297	213	840	
平年値	0.2	1.6	6.2	18.9	7.6	31.6	
	1	0	0	202	9	35	
	2	0	0	67	40	68	
春日部市	3	0	5	8	65	29	
樋籠	4	1	13	22	24	104	
	5	3	26	55	24	10	
	6	3	25	146	32	10	
計	7	69	500	194	256	1026	
平年値	1.6	5.1	3.5	2.4	4.5	17.1	

病害虫名		イネホソミドリカスミカメ (別和名:アカヒゲホソミドリカスミカメ)					
地点名	半旬	5月	6月	7月	8月	9月	年計
	1	0	2	25	0	2	
	2	0	23	39	6	5	
川越市	3	0	22	4	2	2	
南田島	4	0	18	1	5	3	
	5	0	3	0	3	0	
	6	0	12	5	0	1	
計	0	80	74	16	13	183	
平年値	0.7	28.2	67.5	38.7	6.5	141.6	
	1	0	0	0	0	1	
	2	0	0	7	0	0	
川島町	3	0	0	1	0	2	
上八ツ林	4	0	0	0	0	3	
	5	0	0	0	0	2	
	6	0	0	0	0	1	
計	0	0	8	0	9	17	
平年値	0.3	13.3	18.1	9.3	2.6	43.6	
	1	0	0	27	3	3	
	2	0	0	9	0	3	
本庄市	3	0	0	13	2	2	
児玉町	4	0	0	10	1	4	
吉田林	5	0	7	8	17	1	
	6	0	0	10	8	1	
計	0	7	77	31	14	129	
平年値	2.8	60.7	152.6	74.7	29.5	320.3	
	1	0	1	34	0	2	
	2	0	4	64	0	7	
熊谷市	3	0	15	6	2	3	
玉井	4	0	7	15	0	8	
	5	0	16	6	1	1	
	6	0	13	3	1	3	
計	0	56	128	4	24	212	
平年値	19.3	246.5	208.4	85.5	22.8	582.5	
	1	0	0	47	2	0	
	2	0	5	110	3	2	
加須市	3	1	21	11	5	3	
大越	4	0	7	9	4	5	
	5	2	6	28	7	0	
	6	4	9	20	2	0	
計	7	48	225	23	10	313	
平年値	3.1	53.8	49.7	42.9	11.4	154.8	
	1	0	0	18	2	1	
	2	0	1	20	2	2	
春日部市	3	0	1	4	13	2	
樋籠	4	0	4	3	5	10	
	5	1	6	4	0	1	
	6	0	2	2	2	1	
計	1	14	51	24	17	107	
平年値	1.2	20.6	13.8	6.4	2.5	44.5	

注) 平年値は直近10年間の平均値。加須市大越はR3年度開始のため、隣接の加須市外野のH26～R1年度と大越R3～R5の9年間の平均値を使用。

病害虫名		イネカメムシ					
地点名	半旬	5月	6月	7月	8月	9月	年計
	1	0	0	0	0	4	
	2	0	0	0	0	1	
川越市	3	0	0	0	1	0	
南田島	4	0	0	0	4	1	
	5	0	0	0	0	0	
	6	0	0	0	0	0	
計		0	0	0	5	6	11
平年値		0.0	0.0	0.0	0.7	0.0	0.7
	1	0	0	0	0	2	
	2	0	0	0	1	3	
川島町	3	0	0	0	1	0	
上八ツ林	4	0	0	0	4	3	
	5	0	0	1	0	1	
	6	0	0	0	2	0	
計		0	0	1	8	9	18
平年値		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	1	0	0	0	0	0	
	2	0	0	0	0	0	
本庄市	3	0	0	0	0	0	
児玉町	4	0	0	0	1	0	
吉田林	5	0	0	0	4	0	
	6	0	0	0	0	0	
計		0	0	0	5	0	5
平年値		0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.1
	1	0	0	10	3	25	
	2	0	0	24	1	15	
熊谷市	3	0	0	4	0	7	
玉井	4	0	0	25	3	38	
	5	0	0	28	6	7	
	6	0	0	51	6	8	
計		0	0	142	19	100	261
平年値		0.0	0.0	0.0	0.7	0.7	1.4
	1	0	0	21	4	24	
	2	0	0	133	11	25	
加須市	3	0	0	23	30	43	
大越	4	0	0	5	4	68	
	5	0	1	19	128	2	
	6	0	0	19	78	1	
計		0	1	220	255	163	639
平年値		0.0	0.1	0.9	9.5	2.8	13.3
	1	0	0	186	5	32	
	2	0	0	63	34	61	
春日部市	3	0	0	7	64	19	
樋籠	4	0	0	22	23	84	
	5	0	11	53	22	8	
	6	0	12	143	28	7	
計		0	23	474	176	211	884
平年値		0.0	0.0	4.7	5.4	2.3	12.4

病害虫名		トビイロウンカ					
地点名	半旬	5月	6月	7月	8月	9月	年計
	1	0	0	0	0	0	
	2	0	0	0	0	0	
川越市	3	0	0	0	0	0	
南田島	4	0	0	0	0	0	
	5	0	0	0	0	0	
	6	0	0	0	0	0	
計		0	0	0	0	0	0
平年値		0.0	0.0	0.1	0.4	0.0	0.5
	1	0	0	0	1	0	
	2	0	0	0	2	0	
川島町	3	0	0	0	0	0	
上八ツ林	4	0	0	0	0	0	
	5	0	0	0	0	0	
	6	0	0	0	0	0	
計		0	0	0	3	0	3
平年値		0.0	0.0	0.1	0.2	1.0	1.3
	1	0	0	0	0	0	
	2	0	0	0	0	0	
本庄市	3	0	0	0	0	0	
児玉町	4	0	0	0	0	0	
吉田林	5	0	0	0	0	0	
	6	0	0	0	0	0	
計		0	0	0	0	0	0
平年値		0.0	0.0	0.4	0.0	0.0	0.4
	1	0	0	0	0	0	
	2	0	0	0	0	1	
熊谷市	3	0	0	0	0	0	
玉井	4	0	0	0	0	0	
	5	0	0	0	0	0	
	6	0	0	0	0	0	
計		0	0	0	0	1	1
平年値		0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.1
	1	0	0	0	0	1	
	2	0	0	0	0	0	
加須市	3	0	0	0	0	2	
大越	4	0	0	0	0	0	
	5	0	0	0	0	0	
	6	0	0	0	0	0	
計		0	0	0	0	3	3
平年値		0.0	0.1	0.4	0.7	0.0	1.2
	1	0	0	0	0	0	
	2	0	0	0	0	0	
春日部市	3	0	0	0	0	0	
樋籠	4	0	0	0	0	0	
	5	0	0	0	0	1	
	6	0	0	0	0	0	
計		0	0	0	0	1	1
平年値		0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.1

注) 平年値は直近10年間の平均値。加須市大越はR3年度開始のため、隣接の加須市外野のH26～R1年度と大越R3～R5の9年間の平均値を使用。

(カ) いもち病（葉いもち）感染好適条件出現状況（BLASTAM）（5～9月）

a 葉いもち発生予測システム（BLASTAM）について

イネいもち病は空気伝染性病害であるため、発生には気象条件が大きく影響する。気温が20～25℃で曇雨天の日が続き、イネの葉に水滴が付いている状態がいもち病菌の分生子の発芽、侵入、蔓延に好適な条件であり、発生が助長される。

葉いもち発生予測システム（BLASTAM）では、アメダス各地点の気象データの降水量、日照時間、風速からイネ葉面の濡れ時間（湿潤時間）を推定し、気温との組み合わせで、いもち病感染好適条件を判定するものである。

b イネいもち病の発生状況について

ホームページ上で、6月1日から15日ごとに、県内の感染好適日の出現状況を発表し、平年（過去10年間）との比較を数値化することで、適期防除を啓発した。

埼玉県において感染好適日が初出現したのは5月29日（平年6月6日）であり、平年より早かった。例年では6月上旬から7月中旬ごろまでが梅雨であり、いもち病の感染好適日が多く出現するが、本年の6～7月の感染好適日は18日で平年（51.1日）の35%と少なかった。梅雨期の降水量は平年並だったが、6月中旬から9月中旬まで高温に経過したため、7月17日を最後に9月23日まで感染好適日は出現しなかった。令和5年は7月6日を最後に感染好適日が出現しなかったが、6月中旬にまとまって出現したため、集計期間中（5月1日～9月30日）の総出現日数は過去10年で最も少なくなった（下図）。

毎年7月中旬に実施しているイネいもち病（葉いもち）発生予察調査においても、発病地点率は27.3%（平年42.5%、昨年22.7%）、発病株率0.8%（平年8.5%、昨年0.6%）といずれも過去10年で最も少ない昨年に次ぐ値となった。

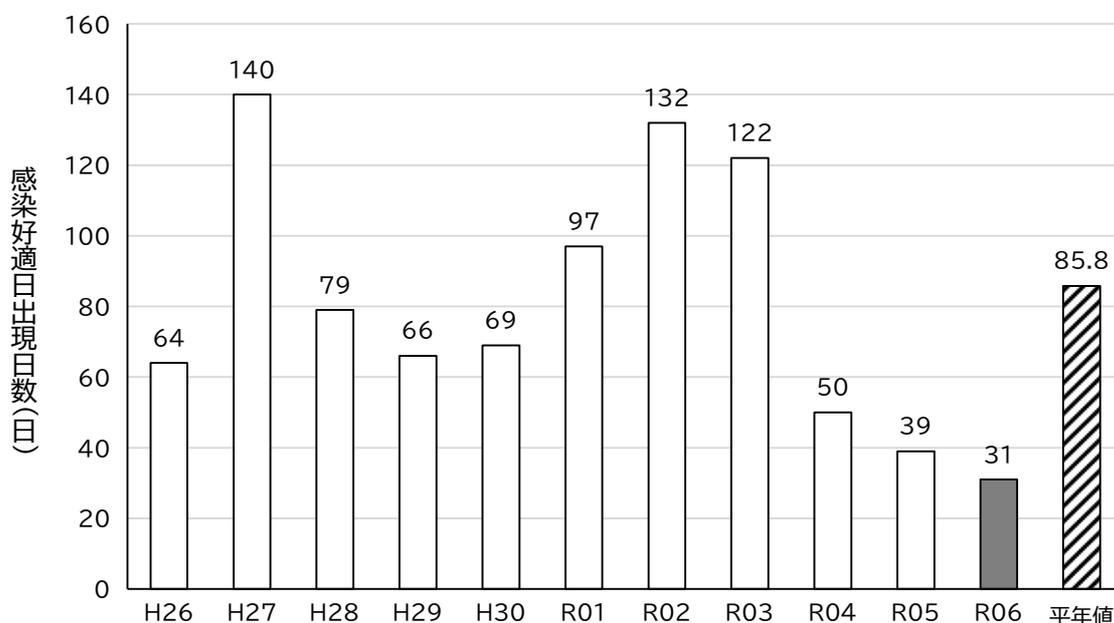


図. 葉いもち感染好適日の出現日数  
(5月1日～9月30日における県内8地点の合計日数)

表. いもち病（葉いもち）感染好適条件出現状況（令和6年5～9月、JPP-N E Tより引用）

地点 月日	寄居	熊谷	久喜	秩父	鳩山	たさい まい	越谷	所沢
5月1日	-	-	-	-	-	-	-	-
↓ 感染好適日が出現しなかったため、省略								
5月17日	-	-	-	-	-	-	-	-
5月18日	-	-	-	-	-	-	-	-
5月19日	-	-	-	-	-	-	-	-
5月20日	4	-	4	-	-	-	-	-
5月21日	-	-	-	-	-	-	-	-
5月22日	-	-	-	-	-	-	●	-
5月23日	-	-	-	-	-	-	-	-
5月24日	-	-	-	-	-	-	-	-
5月25日	-	-	-	-	-	-	-	-
5月26日	-	-	-	-	-	-	-	-
5月27日	-	-	-	-	-	-	-	-
5月28日	-	-	-	-	-	-	-	-
5月29日	4	-	-	●	-	-	-	-
5月30日	-	-	-	-	-	-	-	-
5月31日	-	-	-	-	-	-	-	-
6月1日	-	-	-	-	-	-	-	-
6月2日	-	-	-	-	-	-	-	-
6月3日	-	-	-	-	-	-	-	-
6月4日	-	-	4	3	4	-	-	-
6月5日	-	-	-	-	-	-	-	4
6月6日	-	-	-	-	-	-	-	-
6月7日	-	-	-	-	-	-	-	-
6月8日	-	-	-	-	-	-	-	-
6月9日	-	-	-	-	-	-	-	-
6月10日	-	-	-	-	-	-	-	-
6月11日	-	-	-	-	-	-	-	-
6月12日	-	-	-	-	-	-	-	-
6月13日	-	-	-	-	-	-	-	-
6月14日	-	-	-	-	-	-	-	-
6月15日	-	-	-	-	-	-	-	-
6月16日	-	-	-	-	-	-	-	-
6月17日	-	-	-	-	-	-	-	-
6月18日	●	2	2	●	2	-	-	-
6月19日	-	-	-	-	-	-	-	-
6月20日	-	-	-	-	-	-	-	-
6月21日	-	-	-	-	-	-	-	-
6月22日	-	-	-	-	-	-	-	-
6月23日	-	-	-	●	4	-	-	-
6月24日	●	●	●	-	-	●	●	-
6月25日	-	-	-	-	-	-	-	-
6月26日	-	-	-	-	-	-	-	-
6月27日	-	-	-	-	-	-	2	-
6月28日	-	-	-	-	-	-	-	-
6月29日	-	-	-	-	-	-	-	-
6月30日	-	-	-	-	-	-	-	-
7月1日	-	-	●	-	●	-	-	-
7月2日	-	-	-	-	-	-	-	●

地点 月日	寄居	熊谷	久喜	秩父	鳩山	たさい まい	越谷	所沢
7月3日	-	-	-	-	-	-	-	-
7月4日	-	-	-	-	-	-	-	-
7月5日	-	-	-	-	-	-	-	-
7月6日	-	-	-	-	-	-	-	-
7月7日	-	-	-	2	-	-	-	-
7月8日	-	-	-	-	-	-	-	-
7月9日	-	-	-	-	-	-	-	-
7月10日	-	-	-	-	-	-	-	-
7月11日	-	3	-	-	-	-	-	-
7月12日	-	-	-	2	-	-	2	-
7月13日	-	2	-	-	-	-	-	2
7月14日	-	-	-	-	-	-	-	-
7月15日	●	2	2	●	2	-	-	-
7月16日	-	●	-	-	-	-	-	-
7月17日	●	●	●	-	●	●	-	-
↓ 感染好適日が出現しなかったため省略								
8月31日	3	-	3	-	3	-	3	-
9月1日	2	2	2	-	2	2	-	-
9月2日	-	-	-	-	-	-	3	-
9月3日	-	3	-	2	-	-	-	-
9月4日	2	-	-	-	-	-	-	-
9月5日	-	-	-	-	-	-	-	-
9月6日	-	-	-	-	-	-	-	-
9月7日	-	-	-	-	-	-	-	-
9月8日	-	-	-	-	-	-	-	-
9月9日	-	-	-	-	-	-	-	-
9月10日	-	-	-	-	3	-	-	3
9月11日	-	-	-	-	-	-	-	-
9月12日	3	3	-	-	-	-	-	-
9月13日	-	-	-	-	-	-	-	-
9月14日	-	-	-	-	3	-	-	-
9月15日	-	-	-	-	-	-	-	-
9月16日	-	-	3	-	-	-	-	-
9月17日	-	-	-	-	-	-	-	-
9月18日	-	-	-	3	-	-	-	-
9月19日	2	-	2	-	2	3	-	2
9月20日	-	-	-	-	-	-	-	-
9月21日	-	-	-	-	-	-	-	-
9月22日	2	2	2	2	2	2	-	-
9月23日	-	-	-	-	-	-	-	-
9月24日	-	-	-	4	●	-	-	-
9月25日	-	-	-	-	-	-	-	-
9月26日	-	●	-	-	-	-	●	-
9月27日	-	-	-	-	-	-	-	-
9月28日	-	-	-	-	●	●	●	●
9月29日	-	-	●	-	-	-	-	-
9月30日	4	-	-	●	-	-	-	●
計	5	6	5	7	5	4	4	3
平年値	11.7	11.1	10.2	12.5	12	8.8	11.8	7.7

・発生指標の解説(数字の1～4は感染のしやすさの段階を示すものではない。)

●	感染好適条件	湿潤時間中の平均気温が15～25℃であり、湿潤時間が湿潤時間中の平均気温ごとに必要な時間満たし、当日を含めてその日以前5日間の日平均気温の平均値が20～25℃の範囲にある
1	準好適条件 1	湿潤時間は10時間以上であるが、前5日間の平均気温が20℃未満
2	準好適条件 2	湿潤時間は10時間以上であるが、前5日間の平均気温が21℃以上
3	準好適条件 3	湿潤時間は10時間以上であるが、湿潤時間中の平均気温が15～25℃の範囲外
4	準好適条件 4	湿潤時間が湿潤時間中の平均気温ごとに必要な時間数より短い
-	好適条件なし	
?	判定不能	

(オ) トビイロウンカ、セジロウンカ、コブノメイガ飛来予測日回数(5~9月)

令和6年

月日	本年	平年												
05/01	0	0.0	06/01	0	0.0	07/01	1	0.2	08/01	0	0.0	09/01	0	0.0
05/02	0	0.0	06/02	0	0.0	07/02	0	0.2	08/02	0	0.0	09/02	0	0.0
05/03	0	0.1	06/03	0	0.1	07/03	0	0.3	08/03	0	0.0	09/03	0	0.0
05/04	0	0.0	06/04	0	0.1	07/04	0	0.4	08/04	0	0.0	09/04	0	0.0
05/05	0	0.0	06/05	0	0.1	07/05	0	0.2	08/05	0	0.0	09/05	0	0.0
05/06	0	0.0	06/06	0	0.0	07/06	0	0.2	08/06	0	0.0	09/06	0	0.0
05/07	0	0.2	06/07	0	0.0	07/07	0	0.3	08/07	0	0.0	09/07	0	0.1
05/08	0	0.1	06/08	0	0.0	07/08	0	0.1	08/08	0	0.0	09/08	0	0.0
05/09	0	0.0	06/09	0	0.2	07/09	0	0.3	08/09	0	0.2	09/09	0	0.0
05/10	0	0.0	06/10	0	0.0	07/10	0	0.1	08/10	0	0.1	09/10	0	0.0
05/11	0	0.1	06/11	0	0.0	07/11	1	0.1	08/11	0	0.0	09/11	0	0.0
05/12	0	0.1	06/12	0	0.1	07/12	0	0.1	08/12	0	0.0	09/12	0	0.1
05/13	0	0.2	06/13	0	0.0	07/13	0	0.1	08/13	0	0.0	09/13	0	0.1
05/14	0	0.0	06/14	0	0.1	07/14	0	0.1	08/14	0	0.3	09/14	0	0.0
05/15	0	0.0	06/15	0	0.1	07/15	0	0.0	08/15	0	0.1	09/15	0	0.0
05/16	0	0.1	06/16	0	0.1	07/16	0	0.0	08/16	0	0.1	09/16	0	0.0
05/17	0	0.1	06/17	0	0.1	07/17	0	0.1	08/17	0	0.1	09/17	0	0.0
05/18	0	0.1	06/18	0	0.0	07/18	0	0.1	08/18	0	0.0	09/18	0	0.1
05/19	0	0.2	06/19	0	0.0	07/19	0	0.0	08/19	0	0.0	09/19	0	0.0
05/20	0	0.1	06/20	0	0.0	07/20	0	0.0	08/20	0	0.0	09/20	0	0.0
05/21	0	0.1	06/21	0	0.0	07/21	0	0.0	08/21	0	0.0	09/21	0	0.0
05/22	0	0.1	06/22	0	0.1	07/22	0	0.0	08/22	0	0.1	09/22	0	0.0
05/23	0	0.0	06/23	1	0.0	07/23	0	0.0	08/23	0	0.0	09/23	0	0.0
05/24	0	0.0	06/24	1	0.0	07/24	0	0.1	08/24	0	0.0	09/24	0	0.0
05/25	0	0.0	06/25	0	0.1	07/25	0	0.1	08/25	0	0.2	09/25	0	0.1
05/26	0	0.1	06/26	0	0.1	07/26	0	0.1	08/26	0	0.2	09/26	0	0.0
05/27	0	0.0	06/27	0	0.2	07/27	0	0.0	08/27	0	0.2	09/27	0	0.0
05/28	0	0.1	06/28	0	0.1	07/28	0	0.0	08/28	0	0.2	09/28	0	0.1
05/29	0	0.0	06/29	0	0.0	07/29	0	0.0	08/29	0	0.1	09/29	0	0.0
05/30	0	0.0	06/30	0	0.1	07/30	0	0.0	08/30	0	0.1	09/30	0	0.0
05/31	0	0.0				07/31	0	0.0	08/31	0	0.0	合計	4	9.3

(注1) 平年値は、平成24~令和5年のうち、令和4年を除く過去10年間の平均値  
(令和4年度は6月26日以降欠測であったため)

(注2) 数値の説明：0…飛来無し日 1…飛来有り日

(注3) 飛来予測日は、JPP-NET（（一社）日本植物防疫協会）が提供する、『ウンカ飛来予測システム』の数値を使用

(注4) トビイロウンカ、セジロウンカは、埼玉県内で越冬できず、中国大陸からジェット気流に乗って飛来する。

（一社）日本植物防疫協会では、大陸での害虫の飛び立ち日と気流の状況から、日本国内各地点への飛来予測日を算出する情報を提供している。予測飛来日回数が多いほど、害虫の多発が予想される。



トビイロウンカによる坪枯れ被害



トビイロウンカ成虫



セジロウンカ成虫

(ク) スクミリンゴガイの被害状況(6～7月)調査の結果

- 1 調査年月日:被害状況調査は、田植後1～2か月後に調査(6～7月頃に調査する)
- 2 調査場所:発生地点での拡大状況を水田及び用水路で実施する/各担当地域
- 3 調査項目等:次表のとおり(調査日、品種、生息域面積、被害面積率、被害面積、被害状況)
- 4 具体的な調査方法

生息域面積:生息域面積は水田や用排水路の貝や卵塊の目視

被害面積率:欠株率1%以上のほ場割合

卵塊数:用・排水路又は畦畔10m当たりの平均卵塊数

被害状況:欠株の目視



調査年月日	主な調査地点	品種名	作型	移植時期	生息域面積 (ha)	被害面積率 (%)	被害面積 (ha)	卵塊数 (塊/10m)	被害状況 (被害田の欠株率)		備考	
									平均 (%)	最大 (%)		
令和6年	6月14日	加須市砂原・下北新井	コシヒカリ	早期	4月下旬	73	10	7.3	22.1	17	70	欠株が多いほ場が数筆ある。排水路の卵塊も昨年より増えており、最大は82塊/10m。
6年	6月21日	加須市外記新田	コシヒカリ	早期	4月下旬	16	7	1.1	24.1	5	40	昨年より欠株が目立つ。排水路の卵塊も昨年より増えており、最大は87塊/10m。
6年	6月21日	加須市新川通	オオナリ	早植	5月下旬	32	3	1.0	12.0	1	8	周辺地域に比べて移植時期が遅いためか、貝は目立つが卵塊や欠株は少ない。
6年	6月14日	幸手市千塚	コシヒカリ	早期	5月上旬	5	6	0.3	23.0	2	15	昨年より欠株(被害面積昨年比3倍)、卵塊数(昨年比4.7倍)とも増加。一部に卵塊が多い畦畔(最大81塊/10m)がある。
6年	7月8日	さいたま市西区宝来	不明	早植	5月上旬	8	1	0.1	9.0	1	1	欠株は昨年・一昨年同様少ないが、卵塊はやや多く、一部に卵塊が多い排水路(最大18塊/10m)がある。
6年	7月6日	さいたま市桜区	不明	早植～普通	5月中旬～6月中旬	54	70	37.8	35.6	5	20	昨年より被害田は増加、卵塊数に関しては最大値(147塊/m)が大きく引き上げている。生息面積・被害面積も増加している。
6年	7月6日	富士見市南畑新田	不明	早植～普通	5月中旬～6月中旬	81	20	16.2	5.3	1	3	排水路に貝が生息しているが、水田には少なく、欠株等の被害も少ない。発生面積は昨年度とほとんど変化なし。
6年	7月6日	さいたま市西区塚本町	不明	普通	6月上旬	25	5	1.3	5.0	1	1	排水路に貝が生息しているが、水田には少なく、欠株等の被害も少ない。発生面積は昨年度より増加した。
6年	7月29日	吉見町久保田新田	不明	普通	5月下旬	27	8	2.2	10.3	5	10	卵塊数は昨年並みだが、被害水田の面積は昨年の2倍以上と多い。被害水田の欠株率も昨年より高くなっている。
6年	7月29日	鴻巣市大芦	不明	普通	6月中旬	84	5	4.2	5.3	1	2	被害水田面積は昨年より多いが、被害水田の欠株率は昨年より低く、卵塊数も少ない。
6年	8月5日	熊谷市中奈良・下奈良(南)	不明	普通	6月下旬	10	30	3.1	24.7	8	15	水田内に貝や卵塊が多く、被害水田の50%程度が欠株率5%以上で昨年より被害が大きい。
6年	8月5日	熊谷市今井・下奈良(南)	不明	普通	6月下旬	32	40	13.0	43.7	15	30	昨年90%欠株のほ場は休耕だったが、被害水田面積は昨年の約2倍。パイプライン口・排水路等の卵塊も多く、100塊/10m以上が数か所あった(最大は200塊/10m)。
6年	8月5日	熊谷市下奈良(北)	不明	普通	6月下旬	29	10	2.9	19.8	3	10	排水路等の卵塊、被害水田面積とも昨年より増加。被害水田の30%程度が欠株率5%以上と、昨年より被害程度も大きい。
6年	8月5日	熊谷市西城	不明	普通	6月下旬	37	25	9.2	42.4	7	30	昨年は地区水田の50%程度が休耕だったが、本年はほぼ戻り、昨年の2倍超の水稲作付となった。昨年のような激甚被害はないが、作付増に伴って被害面積も増大した。
6年	8月7日	熊谷市善ヶ島	不明	普通	6月下旬	52	40	20.8	10.6	25	90	卵塊数は昨年よりやや少ないが、被害水田は大幅に増加し、被害水田の3割程度が欠株率30%以上であった。
6年	8月7日	熊谷市八ツ口	不明	普通	6月下旬	72	30	21.6	24.7	15	50	被害水田の欠株率は昨年よりやや低減されたが、被害水田の面積は昨年の3倍程度と多い。卵塊数(平均、最大)は昨年並。
6年	8月7日	熊谷市弥藤吾	不明	普通	6月下旬	7	30	2.0	99.2	10	25	地区内全域で卵塊が多いが(最大卵塊数334塊/10m)、欠株は少ない。欠株率25%のほ場が1ha程度あるため、平均欠株率が高くなった。
合計(面積)／平均(卵塊数)						644		143.9	24.5			
昨年(令和5年度)						560		39.3	14.7			

(ク) 水稻観察地点調査(6~9月)

a 20回振りすくい取り(頭)

			ヒメトビウンカ				セジロウンカ				ツマグロヨコバイ			
			6月	7月	8月	9月	6月	7月	8月	9月	6月	7月	8月	9月
5/20までの 移植ほ場	令和6年	幼虫	41.9	80.8	180.3	36.0	0.0	0.1	15.8	0.7	0.0	34.4	341.1	18.5
		成虫	8.0	74.3	75.8	21.7	0.0	0.1	2.8	0.2	1.7	45.8	376.2	4.2
	平年値	幼虫	9.6	27.5	71.2	82.8	0.0	0.0	0.9	0.5	0.1	3.1	150.8	241.9
		成虫	6.9	34.8	71.5	74.8	0.0	0.1	3.9	1.3	3.3	9.6	66.8	89.0
5/20以降の 移植ほ場	令和6年	幼虫	0.0	46.2	73.6	88.5	0.0	2.8	7.4	6.1	0.0	1.5	20.0	26.7
		成虫	0.0	26.6	101.5	37.7	0.0	3.1	6.0	11.5	0.0	1.2	24.3	17.6
	平年値	幼虫	0.1	9.6	202.8	177.7	0.0	0.0	6.6	10.3	0.2	0.1	4.5	35.7
		成虫	1.1	15.8	119.2	88.0	0.0	0.2	6.0	6.8	0.0	0.7	2.3	34.4

			斑点米カメムシ類 (アカヒゲホリミドリカスガ)				斑点米カメムシ類 (クモヘリカメムシ)				斑点米カメムシ類 (その他)			
			6月	7月	8月	9月	6月	7月	8月	9月	6月	7月	8月	9月
5/20までの 移植ほ場	令和6年	1.1	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	4.4	0.0	
	平年値	1.3	0.2	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.4	0.3	
5/20以降の 移植ほ場	令和6年	0.0	1.2	0.2	0.2	0.0	0.0	0.0	0.4	0.0	0.2	0.3	1.4	
	平年値	1.8	1.1	1.7	0.2	0.0	0.0	0.2	1.0	0.0	0.0	0.4	0.9	

			イネツトムシ				イネアオムシ				イネカメムシ			
			6月	7月	8月	9月	6月	7月	8月	9月	6月	7月	8月	9月
5/20までの 移植ほ場	令和6年	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.0	3.5	0.0	
	平年値	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
5/20以降の 移植ほ場	令和6年	0.0	0.0	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2	3.5	3.7	
	平年値	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	

- ・空欄は移植直後及び収穫後等により調査不能のためデータ無し
- ・平年値：平成28~令和5年の8年間の平均値(イネカメムシは平年値なし)
- ・令和6年度調査地点

【5/20までの移植ほ場】

川越市小中居、毛呂山町箕和田、吉見町西吉見、熊谷市中曾根、加須市大越、加須市麦倉、春日部市樋籠、幸手市神扇

【5/20以降の移植ほ場】

坂戸市横沼、川島町曲師、嵐山町吉田、本庄市児玉町吉田林、美里町小茂田、吉川市中井

b 病虫害発生調査結果

		葉いもち				穂いもち (%)				紋枯病			
		(発病度)				(被害粒率)				(発病度)			
		6月	7月	8月	9月	6月	7月	8月	9月	6月	7月	8月	9月
5/20までの 移植ほ場	令和6年	0.0	0.4	0.1	1.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.4	1.2	4.0
	平年値	0.0	0.8	0.8	1.7	0.0	0.0	0.0	0.4	0.0	0.4	3.9	20.6
5/20以降の 移植ほ場	令和6年	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2	0.0	0.0	1.2	6.9
	平年値	0.0	0.3	2.6	2.4	0.0	0.0	0.0	0.7	0.0	0.5	1.8	12.6

		もみ枯細菌病 (%)				ごま葉枯病				ばか苗病 (%)			
		(発病粒率)				(発病度)				(発病株率)			
		6月	7月	8月	9月	6月	7月	8月	9月	6月	7月	8月	9月
5/20までの 移植ほ場	令和6年	0.0	0.0	2.5	5.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	平年値	0.0	0.0	0.0	0.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
5/20以降の 移植ほ場	令和6年	0.0	0.0	0.0	10.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	平年値	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

		縞葉枯病 (%)				心枯線虫病 (%)			
		(発病株率)				(発病株率)			
		6月	7月	8月	9月	6月	7月	8月	9月
5/20までの 移植ほ場	令和6年	0.0	3.2	7.5	11.2	0.0	0.0	0.0	0.0
	平年値	0.1	2.5	5.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
5/20以降の 移植ほ場	令和6年	0.0	0.0	0.5	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0
	平年値	0.0	0.6	1.2	1.3	0.0	0.0	0.0	0.0

		ニカメイガ (%)				イネツトムシ (個)				フタオビコヤガ* (頭)			
		(発病株率)				(苞数/25株あたり)				(虫数/1株あたり)			
		6月	7月	8月	9月	6月	7月	8月	9月	6月	7月	8月	9月
5/20までの 移植ほ場	令和6年	0.0	0.6	0.6	0.1	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0
	平年値	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
5/20以降の 移植ほ場	令和6年	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	平年値	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.5	0.2	0.0	0.0	0.0	0.1

\*別名：イネアオムシ

		コブノメイガ (%)				イネミズゾウムシ (頭)			
		(被害葉率)				(虫数/25株あたり)			
		6月	7月	8月	9月	6月	7月	8月	9月
5/20までの 移植ほ場	令和6年	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	平年値	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	0.0	0.0	0.0
5/20以降の 移植ほ場	令和6年	0.0	0.0	0.1	0.2	0.6	0.0	0.0	0.0
	平年値	0.0	0.0	0.2	1.4 #	0.1	0.0	0.0	0.0

- ・空欄は移植直後及び収穫後等により調査不能のためデータ無し
- ・平年値：平成28～令和5年の8年間の平均値
- ・発病度は「R5 発生予察事業の調査実施基準（農林水産省）」に基づき、算出した。

(ク) イネツトムシ発育予測 (6月)

(有効積算温度シミュレーション計算値：6月1日～)

a 6月25日現在の予測

表1 イネツトムシ第2世代の産卵最盛日～4齢終了までの予測

項目	令和6年予測	令和5年	平年	平年との差
産卵最盛日	7月18日	7月17日	7月20日	平年より2日早い
孵化最盛日	7月22日	7月20日	7月24日	平年より2日早い
3齢脱皮最盛日	7月30日	7月28日	8月2日	平年より3日早い
4齢脱皮最盛日	8月2日	7月31日	8月5日	平年より3日早い

注)：例年多発ほ場では予測値と一致し、少発生ほ場では発生時期が早い

算出方法：令和4年7月4日までの実測気象データ。その後は平年値を入力。

産卵最盛日は(6月1日～有効積算温度539日度の日)。孵化最盛日は(同594日度)

3齢脱皮最盛日は(同722日度)。4齢脱皮最盛日は(772日度) 発育零点は13.4℃。

b 実測気象データによる予測結果

表2 イネツトムシ第2世代の産卵最盛日～4齢終了までの予測結果

項目	令和6年予測	令和5年	平年	平年との差
産卵最盛日	7月17日	7月17日	7月20日	平年より3日早い
孵化最盛日	7月21日	7月20日	7月24日	平年より3日早い
3齢脱皮最盛日	7月28日	7月28日	8月2日	平年より5日早い
4齢脱皮最盛日	7月31日	7月31日	8月5日	平年より5日早い

\* 薬剤防除を必要とする目安(孵化最盛日より4～7日の間に密度調査を行う)

孵化直後の幼虫が存在しない場合(既に2～3齢以上に成長)

0.3個体/株 [100株調査で30個体]: 発生数が確定したと推定。

孵化直後の幼虫が存在する場合(1～2齢が中心)

0.05個体/株 [100株調査で5個体]: 今後増加が懸念される。

注) 0.3個体/株の発生によって、5%以下の減収とみなされる。

参考：神奈川以南、千葉県海岸線で越冬しているが、神奈川県のピークが5月下旬として、埼玉県への飛来は6/1としている。

(ケ) フタオビコヤガ(イネアオムシ)発育予測 (6月)

「有効積算温度シミュレーション計算値：フェロモン調査の越冬世代成虫の50%誘殺日(5月4日)の翌日から」

a 6月25日現在の予測

表1 フタオビコヤガの発育次世代予測

項目	令和6年予測	令和5年	平年	平年との差
基準日(越冬世代成虫50%誘殺数)	5月15日	5月4日	5月16日	平年より1日早い
第1世代成虫発蛾最盛日	6月14日	6月8日	6月16日	平年より2日早い
第2世代成虫発蛾最盛日	7月7日	7月3日	7月10日	平年より3日早い
第3世代成虫発蛾最盛日	7月26日	7月21日	7月31日	平年より5日早い

注)：発育零点は10.2℃

算出方法：令和4年7月4日までの気象データ。その後は平年値を入力。

第1世代成虫発蛾最盛日は(越冬世代成虫50%誘殺日から有効積算温度341日度の日)。

第2世代成虫発蛾最盛日は(越冬世代成虫50%誘殺日から有効積算温度682日度の日)。

第3世代成虫発蛾最盛日は(越冬世代成虫50%誘殺日から有効積算温度1023日度の日)。

b 実測気象データによる予測結果

表2 フタオビコヤガの発育次世代予測結果

項目	令和6年予測	令和5年	平年	平年との差
基準日(越冬世代成虫50%誘殺数)	5月15日	5月4日	5月16日	平年より1日早い
第1世代成虫発蛾最盛日	6月14日	6月8日	6月16日	平年より2日早い
第2世代成虫発蛾最盛日	7月6日	7月3日	7月10日	平年より4日早い
第3世代成虫発蛾最盛日	7月25日	7月21日	7月31日	平年より6日早い

注)：発育零点は10.2℃

\* 薬剤防除を必要とする目安(最盛日の2～7日後)

(シ) いもち病発生状況調査結果 (7月)

- 1 調査時期：7月中旬（基準日7月15日）
- 2 調査場所：定点および常発地
- 3 調査項目等：表のとおり
- 4 調査方法：任意の100株について調査

【参考】 発病度について

1～20：少発生、21～40：中発生  
41～70：多発生、71以上：甚発生



いもち病(葉いもち) 左:慢性型病斑 右:進行型病

調査年月日 (令和)	調査地点	定点又は 常発地別	品種名	移植期	草丈 (cm)	発病 株率 (%)	発病度	病斑の種類		発病 部位	備 考	
								慢性型	進行型			
6年	7月9日	鴻巣市関新田	過去発生地点	不明	5月下旬	75	0	0.0	—	—	—	
〃	7月16日	蓮田市駒崎	過去発生地点	不明	6月中旬	60	0	0.0	—	—	—	
〃	7月8日	川越市小中居	定点	コシヒカリ	5月中旬	74.5	0	0.0	—	—	—	
〃	7月10日	坂戸市横沼	定点	むさしの 26号	5月下旬	65.7	0	0.0	—	—	—	
〃	7月10日	毛呂山町箕和田	定点	コシヒカリ	5月中旬	76.8	0	0.0	—	—	—	畦畔のメヒシバに病 斑あり
〃	7月16日	嵐山町吉田	定点	コシヒカリ	6月上旬	74.9	0.3	0.08	—	1	葉	300株調査 (100株×3)
〃	7月16日	川島町曲師	定点	にじの きらめき	6月上旬	64.6	0	0.0	—	—	—	300株調査 (100株×3)
〃	7月12日	吉見町西吉見	定点	コシヒカリ	5月中旬	77.1	0.7	0.17	2	0	葉	300株調査 (100株×3)
〃	7月10日	秩父市太田	常発地	彩のきずな	5月下旬	85	0	0.0	—	—	—	
〃	7月10日	秩父市小柱	常発地	彩のきずな	6月中旬	55	1	0.3	1	0	葉	
〃	7月10日	小鹿野町下小鹿野	常発地	不明	6月中旬	60	0	0.0	—	—	—	畦畔のメヒシバも病 斑少
〃	7月10日	皆野町三沢	常発地	コシヒカリ	6月上旬	70	3	0.8	1	2	葉	
〃	7月9日	本庄市児玉町吉田林	定点	彩のかがや き	6月下旬	41.5	0	0.0	—	—	—	
〃	7月9日	美里町小茂田	定点	コシヒカリ	5月下旬	69.3	0	0.0	—	—	—	
〃	7月12日	熊谷市中曾根	定点	コシヒカリ	5月上旬	91.2	7.3	1.8	22	0	葉	300株調査 (100株×3)
〃	7月16日	行田市前谷	旧定点	彩のかがや き	6月下旬	20	0	0.0	—	—	—	
〃	7月17日	加須市麦倉	定点	コシヒカリ	4月下旬	90	0	0.0	—	—	—	畦畔のメヒシバは病 斑多
〃	7月17日	加須市大越 1	定点	ほしじるし	5月中旬	83	5	1.3	5	—	葉	
〃	7月9日	加須市大越 2	過去発生地点	不明	6月上旬	65	0	0.0	—	—	—	
〃	7月16日	春日部市樋籠	定点	コシヒカリ	5月上旬	98	0	0.0	—	—	—	
〃	7月17日	吉川市中井	定点	彩のきずな	5月中旬	72	0	0.0	—	—	—	
〃	7月16日	幸手市神扇	定点	コシヒカリ	5月中旬	98	0	0.0	—	—	—	
調査地点数：22		発病地点数：6		<b>発病地点率：27.3%</b>			<b>平均</b>	<b>0.8</b>	<b>0.2</b>	<b>6.2</b>	<b>0.6</b>	

いもち病発生状況調査 過去の調査結果

調査年月日 (平成)	調査地点数	発病地点数	発病地点率 (%)	平均発病株 率 (%)	平均発病度	病斑の種類		備 考(注意報発表の有無など)
						慢性型	進行型	
平成 26年	7月中下旬	32	4	12.5	1.3	0.6	0.7	6月1日～7月25日の感染好適日は平年の1.4倍。平坦 地でも発生を確認した。
27年	7月中下旬	31	23	74.2	17.7	16.0	1.6	7月9日 注意報発表(葉いもち、穂いもち)
28年	7月中下旬	36	22	61.1	14.8	6.4	2.8	7月27日 注意報発表(葉いもち、穂いもち)
29年	7月中下旬	51	12	23.5	3.6	8.8	0.0	
30年	7月中下旬	22	5	22.7	22.7	1.3	0.0	
令和 元年	7月中下旬	23	13	56.5	2.0	2.0	0.3	発生地点率は高かったが、発生程度や発生株率が低 かったため、予察情報の発表はしなかった。
2年	7月中下旬	23	14	60.9	4.1	2.0	2.3	7月28日 注意報発表(葉いもち、穂いもち)
3年	7月中下旬	22	13	59.1	12.7	13.0	8.6	7月7日 注意報発表(葉いもち)
4年	7月中下旬	22	7	31.8	5.5	1.1	14.0	
5年	7月中下旬	22	5	22.7	0.6	2.5	0.0	
<b>過去10年間平均</b>		<b>28.4</b>	<b>11.8</b>	<b>42.5</b>	<b>8.5</b>	<b>5.4</b>	<b>3.0</b>	

(ス) 水稻の斑点米カメムシ類の畦畔・雑草地発生調査結果

- 1 調査年月日:7月中旬旬を基準日として調査した。
- 2 調査場所:これまで実施してきた調査地点(畦畔・雑草地・土手等)／各担当地域。
- 3 調査項目等:斑点米カメムシ類の幼虫・成虫別に計数調査した。  
次表のとおり。(調査地点、調査日、カメムシ類別、調査場所の状況(雑草の種類、草丈などの管理状況等について分かる範囲で記載する。))
- 4 具体的な調査方法:捕虫網による10往復・20回振り調査。



主な斑点米カメムシ類(表中出現順)

調査年月日	調査地点/種類	イネホソドリカスミカメ*		アカスジカスミカメ		クモヘリカメムシ		ホソハリカメムシ		シラホシカメムシ		トゲシラホシカメムシ		その他		合計 頭	参考 前年 (R5年)	備考  (雑草などの管理状況等)
		幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫			
令和																		
6年 7月8日	川越市小中居	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	4	畦畔、メヒシバ(5cm)とクサネム主体
6年 7月10日	坂戸市横沼	1	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	7	8	農道脇法面、イネ科雑草(1m)主体、その他(ブチヒゲカメムシ1、アカヒメハリカメムシ成2)
6年 7月10日	毛呂山箕和田	0	0	0	0	0	0	1	2	0	0	0	0	0	2	5	12	休耕田、カモシグサ(60cm)とツユクサ主体、その他(アカヒメハリカメムシ成2)
6年 7月8日	嵐山町吉田	0	1	0	6	0	0	0	4	0	0	0	0	0	0	11	12	畦畔(イネ定点調査水田付近)。メヒシバ(40cm)、ノビエ主体(60cm)。
6年 7月5日	滑川町福田	0	0	4	56	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	61	-	畦畔(ダイズ定点)。セイバンモロコシ(1~1.5m)優占。
6年 7月8日	川島町曲師	1	49	0	11	0	0	0	1	2	0	0	0	4	0	68	16	畦畔(イネ定点調査水田)。メヒシバ(40cm)、ノビエ(60cm)主体。その他(ブチヒゲカメムシ幼4)
6年 7月8日	川島町大屋敷	0	3	0	5	0	0	1	5	0	0	0	0	0	0	14	-	水田畦畔(ノビエ類主体:60~70cm)
6年 7月4日	吉見町西吉見	19	47	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	69	15	畦畔(イネ定点調査水田)。ほとんどメヒシバ優占(草丈50cm)。
6年 7月9日	本庄市児玉町吉田林	0	0	0	8	0	0	2	6	0	0	0	0	0	6	22	156	イネカメムシ調査定点横の雑草地、エノコログサ、セイバンモロコシ、ギシギシ(90~150cm)、その他(アカヒメハリカメムシ成6)
6年 7月9日	美里町小茂田1	1	17	4	5	0	0	0	10	0	4	0	0	0	5	46	231	定点南水路脇、オヒシバ(75cm)主体、その他(アカヒメハリカメムシ成5)
6年 7月9日	美里町小茂田2	0	0	7	4	1	1	0	5	0	0	0	0	1	2	21	216	ねぎほ場横の雑草地、エノコログサ(90cm)主体、その他(ミナミアオカメムシ幼1、アカヒメハリカメムシ成2)
6年 7月5日	熊谷市中曾根1	2	4	0	8	0	0	3	9	3	4	0	0	0	5	38	43	畦畔、通殿川沿い、エノコログサ主体(草丈60cm)、その他(アカヒメハリカメムシ5)
6年 7月5日	熊谷市中曾根2	0	0	0	5	0	0	0	3	4	0	0	0	0	1	13	108	畦畔、メヒシバ(草丈50cm)主体、その他(ブチヒゲカメムシ成1)
6年 7月5日	熊谷市中曾根3	6	16	0	7	0	0	8	6	1	2	0	0	0	1	47	-	ニカメイガトラップ付近水田畦畔、メヒシバ(草丈50cm)主体、その他(アカヒメハリカメムシ成2)
6年 7月9日	行田市前谷	4	23	3	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	37	143	畦畔、メヒシバ(60cm)主体
6年 7月9日	加須市麦倉	0	0	0	0	0	0	0	7	0	1	0	0	0	0	8	14	畦畔、エノコログサ(100cm)、メヒシバ(70cm)主体
6年 7月9日	加須市大越	0	51	0	1	0	0	0	9	0	0	0	0	0	0	61	22	畦畔、オヒシバ(50cm)主体
6年 7月9日	加須市間口	0	7	4	13	0	0	8	10	1	1	0	0	0	5	49	-	畦畔、メヒシバ(70cm)主体(アカヒメハリカメムシ成3、イネカメムシ成1、ブチヒゲハリカメムシ成1)
6年 7月4日	幸手市神扇	0	0	5	32	0	0	0	1	0	0	0	0	0	8	46	40	水路法面、穂付きセイバンモロコシ主体、その他(イネカメムシ成8)
6年 7月9日	春日部市桶籠	10	3	11	2	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	28	12	畦畔、メヒシバ、エノコログサ
6年 7月11日	吉川市中井	33	37	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	72	37	畦畔、メヒシバ主体
合計	調査地点数:21	77	263	39	171	1	1	23	83	11	12	0	1	5	38	725	1,090	発生地点率 21/21地点 100%
平均	1地点あたり頭数	3.7	12.5	1.9	8.1	0.0	0.0	1.1	4.0	0.5	0.6	0.0	0.0	0.2	1.8	34.5	60.6	

過去のデータ

調査年月日	調査地点/種類	イネホソドリカスミカメ*		アカスジカスミカメ		クモヘリカメムシ		ホソハリカメムシ		シラホシカメムシ		トゲシラホシカメムシ		その他		合計 頭	発生 地点 率 %	備考  (調査地点のうち斑点米カメムシの発生地点数)
		幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫			
平成																		
26年 7月上中旬	18調査地点 1地点当たり平均	304 16.9	343 19.1	107 5.9	37 2.1	0 0.0	0 0.0	2 0.1	13 0.7	1 0.1	2 0.2	0 0.0	1 0.1	1 0.1	9 0.5	820 45.6	94.4%	発生地点 17/18地点 平成26年6月30日に、平成26年度病害虫発生予察注意報第4号「斑点米カメムシ類」を発表
27年 7月上中旬	18調査地点 1地点当たり平均	43 2.4	135 7.5	3 0.2	12 0.7	0 0.0	0 0.0	0 0.0	11 0.6	10 0.6	2 0.1	0 0.0	0 0.0	0 0.0	9 0.5	225 12.5	77.8%	発生地点 14/18地点 -
28年 7月上中旬	15調査地点 1地点当たり平均	8 0.5	32 2.1	1 0.1	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	3 0.2	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	44 2.9	73.3%	発生地点 11/15地点 -
29年 7月上中旬	22調査地点 1地点当たり平均	17 0.8	64 2.9	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	2 0.1	6 0.3	0 0.0	0 0.0	0 0.0	1 0.0	9 0.4	1 0.0	100 4.5	77.2%	発生地点 17 /22地点 平成29年7月3日に、平成29年度病害虫発生予察注意報第1号「斑点米カメムシ類(特に、アカヒゲホソドリカスミカメ、アカスジカスミカメ)」を発表
30年 7月上中旬	17調査地点 1地点当たり平均	31 1.8	97 5.7	1 0.1	12 0.7	0 0.0	1 0.1	0 0.0	4 0.2	0 0.0	0 0.0	0 0.0	2 0.1	0 0.0	0 0.0	148 8.7	58.8%	発生地点 10/17地点 -
元年 7月上中旬 (令和)	17調査地点 1地点当たり平均	200 11.8	210 12.4	0 0.0	1 0.1	1 0.1	0 0.0	19 1.1	10 0.6	1 0.1	3 0.2	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	445 26.2	82.4%	発生地点 14/17地点 -
2年 7月上中旬 (令和)	17調査地点 1地点当たり平均	52 3.1	94 5.5	9 0.5	14 0.8	0 0.0	11 0.6	1 0.1	13 0.8	0 0.0	1 0.1	0 0.0	1 0.1	0 0.0	14 0.8	210 12.4	100.0%	発生地点 17/17地点 -
3年 7月上中旬 (令和)	17調査地点 1地点当たり平均	21 1.2	87 5.1	0 0.0	12 0.7	0 0.0	2 0.1	3 0.2	27 1.6	0 0.0	1 0.1	0 0.0	1 0.1	0 0.0	0 0.0	154 9.1	100.0%	発生地点 17/17地点 -
4年 7月上中旬 (令和)	17調査地点 1地点当たり平均	107 6.3	240 14.1	30 1.8	41 2.4	0 0.0	0 0.0	1 0.1	13 0.8	0 0.0	1 0.1	1 0.1	1 0.1	2 0.1	2 0.1	439 25.8	88.2%	発生地点 15/17地点 -
5年 7月上中旬 (令和)	18調査地点 1地点当たり平均	336 18.7	291 16.2	175 9.7	160 8.9	0 0.0	0 0.0	26 1.4	42 2.3	20 1.1	8 0.4	0 0.0	4 0.2	8 0.4	20 1.1	1,090 60.6	100.0%	発生地点 18/18地点 -
平年	1地点当たり平均	6.3	9.1	1.8	1.6	0.0	0.1	0.3	0.8	0.2	0.1	0.0	0.1	0.1	0.3	20.8	85.2%	

## (セ) ヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率調査結果(1月)

病害虫調査データ

### ヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率調査結果

令和7年1月16日  
埼玉県病害虫防除所

病害虫防除所では、イネ縞葉枯病の発生量を予測するため、ヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率を調査しています。

令和元年度～5年度までは保毒虫率が減少傾向にありましたが、今年度は保毒虫率が平年よりも低いものの増加に転じました。このうち、コシヒカリ早植栽培、キヌヒカリ普通期栽培などイネ縞葉枯病感受性が特に高い生育ステージにヒメトビウンカが飛来する品種・作型が多い地域では、近年になくかなり高い保毒虫率となっています。

イネ縞葉枯病は移植後から幼穂形成期までに感染します。感受性品種では、育苗箱施薬剤等を用いた感染前の予防対策を徹底してください。

#### 1 調査方法

令和6年11月に、県内25か所の水田周辺でヒメトビウンカ幼虫(写真1)をサンプリング(100頭程度/1か所)し、ELISA法(図1)により保毒虫を判定し、イネ縞葉枯ウイルス保毒虫率を算出した。



写真1 ヒメトビウンカ幼虫  
(体長2mm)

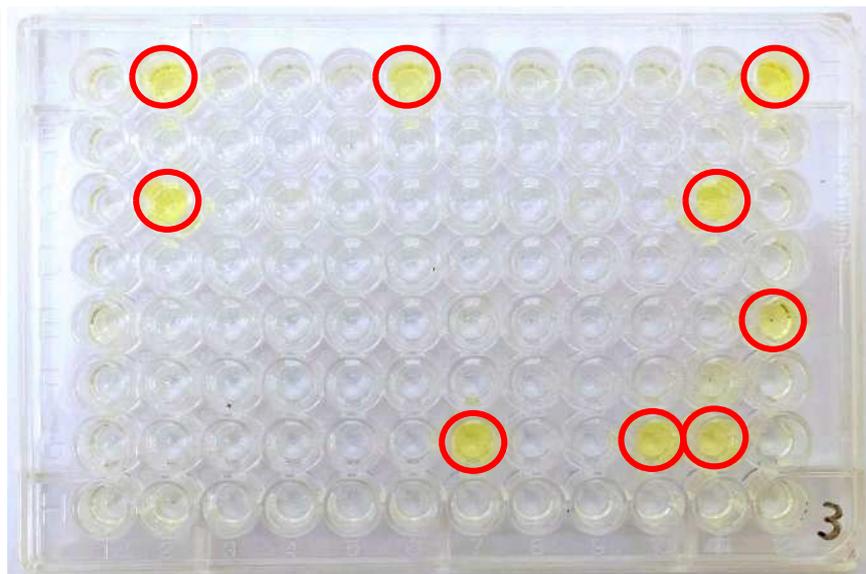


図1 ELISA法による保毒虫判定  
ウイルス有り：黄色(○内)、ウイルス無し：無色

#### 2 調査結果の概要

縞葉枯病抵抗性品種の作付比率が縞葉枯病感受性品種の作付比率を上回った令和元年度以降、ヒメトビウンカ幼虫のイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率は減少傾向にあったが、令和6年度は平均で3.8%と平年よりは低いものの前年比1.6倍と増加に転じた(図2)。

昨年度は統計的な有意差はないもののコシヒカリ早期栽培地域を主体に5月中旬までの移植主体の地域で保毒虫率が若干高い傾向が見られたが、令和6年度は移植時期による保毒虫率に差は見られなかった(表1)。ただし、コシヒカリ早植栽培、キヌヒカリ普通期栽培などイネ縞葉枯病感受性が高い生育ステージにヒメトビウンカが飛来する品種・作型が多い地域では、過去3年と比較するとかなり高い保毒虫率となっている(表2)。

(セ) ヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率調査結果(1月)

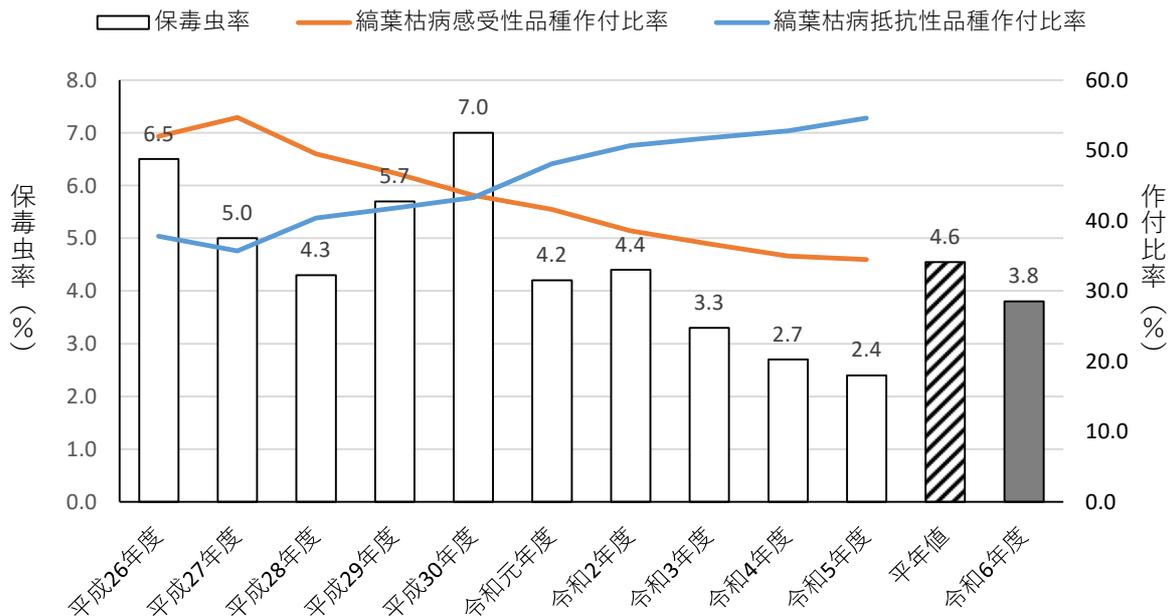


図2 ヒメトビウンカのイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率の推移

表1 ヒメトビウンカのイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率(令和6年度)

5月中旬までの移植地域		5月下旬以降の移植地域		
採集地点	保毒虫率(%)	採集地点	保毒虫率(%)	
さいたま市桜区昭和	5.2	坂戸市横沼	0.0	
鴻巣市屈巢	0.0	小川町高谷	4.2	
富士見市みどり野	1.0	川島町上八ツ林	5.2	
川越市小中居	9.4	吉見町久保田	2.1	
熊谷市中曾根	13.5	嵐山町吉田	5.2	
加須市大越	0.0	秩父市小柱	4.2	
加須市柏戸	1.0	本庄市児玉町吉田林	9.4	
春日部市八丁目	4.2	美里町阿那志	1.0	
幸手市神扇	3.1	上里町長浜	0.0	
杉戸町大塚	1.0	熊谷市中恩田	10.4	
		熊谷市御正新田	8.3	
		行田市前谷	0.0	
		行田市下池守	5.2	
		加須市下谷	0.0	
		久喜市菖蒲町台	0.0	
地域平均(10地点)	3.9	地域平均(15地点)	3.7	NS
採集地点数	25	平均保毒虫率(%)	3.8	

表2 過去3年との高保毒虫率地点数の比較

年度	令和3	令和4	令和5	令和6
最大保毒虫率(%)	13.5	8.2	8.2	13.5
保毒虫率8%以上の地点数	2	1	1	5
保毒虫率5%以上の地点数	7	3	3	9

## (ソ) イネカメムシ越冬調査結果（11月～3月）

病害虫発生予察情報

### イネカメムシ越冬状況調査結果について

令和7年3月31日  
埼玉県病害虫防除所

イネの穂を激しく加害して不稔や斑点米を引き起こすイネカメムシについて、越冬場所と越冬量を把握するため越冬状況調査を行いました。

調査の結果、イネカメムシ越冬成虫が100地点で確認され、全172地点の58.1%に達し、広範囲で越冬していることが確認されました。調査地点中、全体の傾向としては落ち葉内や落ち葉の下で越冬成虫を確認できた割合が57～88%と高く、ジャノヒゲ株内やススキなどイネ科雑草株元でも約50%の地点で越冬成虫が確認されました。

また、越冬密度の把握を目的に調査面積を定めて調査を実施した結果、落ち葉内や落ち葉の下で1㎡当たり12.4～42.4頭、雑草地で3.8頭であったほか、ジャノヒゲ株内で279.4頭に達しました。

このように、本年は越冬成虫数がきわめて多いことが明らかであり、水稻においてイネカメムシが多発生となるリスクがきわめて高いと考えられますので、広域で適切な防除を行ってください。

#### 1. 調査時期

令和6年11月1日～令和7年3月18日

#### 2. 調査地点

県内21市10町

さいたま市（西区・桜区・岩槻区）、川口市、鴻巣市、草加市、志木市、川越市、富士見市、東松山市、滑川町、嵐山町、小川町、川島町、吉見町、本庄市、美里町、神川町、熊谷市、深谷市、寄居町、行田市、加須市、羽生市、久喜市、蓮田市、白岡市、春日部市、越谷市、幸手市、吉川市、杉戸町、松伏町、

#### 3. 調査方法

- (1) 前年の多発生地や周辺的环境を考慮して予備的な調査を実施し、イネカメムシ越冬成虫を確認した場所を主体に、以下の手法で「本調査」を実施。
- (2) 林地、林床、生垣等から1地点につき2～4か所（各0.25～1㎡）の落ち葉を採取。採取した落ち葉内に潜入して越冬しているイネカメムシ成虫の個体数を調査。
- (3) 畦畔や法面などのジャノヒゲ株を対象に、30～50cm四方の範囲をかき分けて調査し、目視により越冬成虫を採集、計数。
- (4) ススキ等の雑草の株元や立ち木の株元について、調査場所の状況に応じて30～50cm四方の範囲を調査し、目視により成虫を採集、計数。
- (5) 堤防や雑草地について、原則として1m四方の範囲の複数地点を対象にかき分けて調査し、目視により成虫を採集、計数

(ソ) イネカメムシ越冬調査結果 (11月～3月)

4. 結果

調査の結果、越冬成虫を確認した場所では全体として以下のような傾向が認められました。

- ①冬の季節風が当たりにくく、南側や西側に開けていて陽だまりになりやすい場所。
- ②落ち葉が堆積しており、乾燥しておらず適度な湿度が保たれている場所。
- ③表土が柔らかかったり、堆積物や落ち葉の腐植化が進んでいて膨軟な場所。
- ④厳冬期でも緑色の葉をつけているイネ科雑草の株元やジャノヒゲの株内。
- ⑤耕地や堤防などの開けている場所よりも、北側や東側に構造物や林がある場所。



日当たりの良い生垣下に堆積した落ち葉



水田に隣接する運動場脇に吹き寄せられた落ち葉



ジャノヒゲの株内で越冬中の成虫



落ち葉の下や浅い土中で越冬中の成虫

(1) 調査総数の内訳 (予備調査・本調査の計)

調査場所	調査地点数	成虫確認地点数	同左割合(%)
落ち葉内・落ち葉の下			
林内	5	3	60.0
林縁	7	4	57.1
植え込みの下	21	17	81.0
生垣下	5	4	80.0
ジャノヒゲ共	8	7	87.5
構造物わき	6	5	83.3
その他	37	25	67.6
立ち木			
株元	11	4	36.4
篠地			
堆積物・落ち葉下	3	1	33.3
ジャノヒゲ			
株内	20	10	50.0
河川敷・堤防			
雑草等	5	0	0
雑草地			
ススキ等の雑草株元	15	8	53.3
水田			
畦畔雑草等	3	0	0
刈株・わら	12	4	33.3
その他			
人工物等の下	5	3	60.0
果樹カメムシ類越冬調査			
林内落ち葉	9	5	55.6
合計(地点数)・平均(割合)	172	100	58.1

(ソ) イネカメムシ越冬調査結果 (11月～3月)

(2) 本調査における個体密度

調査場所	調査地点数	成虫確認地点数	同左割合 (%)	個体密度 頭/m <sup>2</sup>
落ち葉内・落ち葉下				
林内または林縁	15	10	66.7	12.4
植え込み下・生垣下等	18	18	100	42.4
その他	19	17	89.5	25.9
ジャノヒゲ株内	6	6	100	279.4
雑草地(ススキ等のイネ科雑草)・堤防等	9	4	44.4	3.8
水田内(刈株)	10	4	40.0	0.0014

※上表の落ち葉調査(林内)には果樹カメムシ類越冬調査9地点を含む。

(3) 果樹カメムシ類越冬調査時に混獲されてきた  
イネカメムシの状況

採取地点	令和7年	令和6年
東松山市松山	0	0
北本市荒井	—	0
鴻巣市関新田	24	—
寄居町鉢形	0	0
神川町新里	0	0
加須市上種足	192	2
蓮田市高虫	16	0
春日部市内牧	0	0
久喜市清久	227	8
久喜市菖蒲町	4	—
合計	463	10
1地点あたり平均頭数	51.4	1.3
1地点あたり密度(頭/m <sup>2</sup> )	17.1	0.4
確認地点率(%)	55.6	25.0



注) 果樹カメムシ越冬調査で混獲されたイネカメムシは  
計数時に死亡していたものも含まれます。

5. 生態と被害

越冬した成虫が6月下旬から7月上旬にかけて水田および周辺のイネ科雑草に飛来します。早期栽培水田では出穂前から成虫が侵入し、交尾・産卵を行います。また、7月下旬以降は出穂期の水田に成虫が侵入し、穂を加害します。

出穂期～乳熟期に激しく加害されると不稔となり、登熟期の加害により基部斑点米が生じ、収量および品質を著しく低下させます。

イネカメムシ成虫(上)と  
斑点米被害(下)

6. 令和7年産水稻で注意する点

越冬明けの、発生初期段階から多発生が見込まれます。6月下旬以降水田内外を注意深く観察して侵入有無を確認するとともに、出穂期とその8～14日後の2回、必ず防除を行ってください。とくに、周囲の水田に比較して出穂時期が早い、または遅い水田は集中的な加害を受けリスクが高いため、発生状況に応じて防除回数を増やす等の対応を取ってください。

集中的な加害を回避するため、出穂時期が極力揃うよう地域内での作型・品種選定も十分に検討してください。

(タ) 農業技術研究センター 県予察ほ場（玉井試験場）調査結果（6～9月）

a ほ場内見取り調査（%）

(a) 5月中旬移植「コシヒカリ」

調査月		6月			7月			8月			9月		
		2024年	2023年	平年	2024年	2023年	平年	2024年	2023年	平年	2024年	2023年	平年
葉いもち	発病株率%	0.0	0.3	0.0	3.3	2.0	3.1	0.7	0.7	0.2	-	-	-
穂いもち	発病株率%	-	-	-	-	-	-	0.0	2.0	1.6	0.0	0.7	-
紋枯病	発病株率%	0.0	0.0	0.0	2.0	0.7	0.2	0.0	4.7	4.5	10.7	6.7	22.9
ばか苗病	発病株率%	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	-	-	-	-	-	-
縞葉枯病	発病株率%	4.0	0.0	1.5	4.7	20.0	22.5	5.3	4.7	54.0	5.3	4.7	56.1
コマイチュウ (第1世代幼虫)	食害株率%	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	-	-	-	-	-	-
イチモンジセリ	食害株率%	0.0	0.3	2.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	-	-	-
イネアオムシ	食害株率%	-	-	-	-	-	-	0.0	0.0	0.0	-	-	-
コブノメイガ	食害株率%	-	-	-	-	-	-	0.0	0.0	0.0	-	-	-
イソメモグリハエ	食害株率%	0.0	0.0	0.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イネミズゾウムシ	食害株率%	0.0	0.7	1.1	0.0	0.0	0.0	-	-	-	-	-	-
イトヨトウムシ	食害株率%	0.0	0.0	0.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-

平年は、過去10年の平均。ただし、欠測年は除く。

(b) 5月中旬移植「彩のかがやき」

調査月		6月			7月			8月			9月		
		2024年	2023年	平年	2024年	2023年	平年	2024年	2023年	平年	2024年	2023年	平年
葉いもち	発病株率%	0.0	0.0	0.0	2.0	2.0	1.1	0.0	0.0	0.3	-	-	-
穂いもち	発病株率%	-	-	-	-	-	-	0.0	0.0	0.0	0.0	1.3	13.0
紋枯病	発病株率%	0.0	0.0	0.0	10.0	6.7	10.9	19.3	10.0	25.5	40.7	29.3	42.0
ばか苗病	発病株率%	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	-	-	-	-	-	-
縞葉枯病	発病株率%	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.3	0.0	0.0	0.3
コマイチュウ (第1世代幼虫)	食害株率%	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	-	-	-	-	-	-
イチモンジセリ	食害株率%	0.0	2.7	2.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
イネアオムシ	食害株率%	-	-	-	-	-	-	0.0	0.0	0.1	-	-	-
コブノメイガ	食害株率%	-	-	-	-	-	-	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2
イソメモグリハエ	食害株率%	0.0	1.3	0.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イネミズゾウムシ	食害株率%	0.0	1.0	2.1	0.0	0.0	0.0	-	-	-	-	-	-
イトヨトウムシ	食害株率%	0.0	0.0	0.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
クサキリ類	食害株率%	-	-	-	-	-	-	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1

平年は、過去10年の平均。ただし、欠測年は除く。

(c) 6月下旬移植「キヌヒカリ」

調査月		6月			7月			8月			9月		
		2024年	2023年	平年	2024年	2023年	平年	2024年	2022年	平年	2024年	2023年	平年
葉いもち	発病株率%	-	-	-	0.0	2.7	4.0	0.0	0.0	7.2	-	-	-
穂いもち	発病株率%	-	-	-	-	-	-	0.0	0.0	0.0	0.0	0.7	29.2
紋枯病	発病株率%	-	-	-	0.0	0.0	0.0	0.0	6.0	1.6	14.7	6.0	31.8
ばか苗病	発病株率%	-	-	-	0.0	0.0	0.0	-	-	-	-	-	-
縞葉枯病	発病株率%	-	-	-	0.0	0.0	1.8	3.3	5.3	20.5	0.0	5.3	26.8
コマイチュウ (第1世代幼虫)	食害株率%	-	-	-	0.0	0.0	0.0	-	-	-	-	-	-
イチモンジセリ	食害株率%	-	-	-	0.0	0.0	0.4	5.3	0.7	9.8	0.0	0.0	0.1
イネアオムシ	食害株率%	-	-	-	-	-	-	0.0	0.0	0.2	-	-	-
コブノメイガ	食害株率%	-	-	-	-	-	-	0.0	0.0	1.3	0.0	0.0	1.6
イソメモグリハエ	食害株率%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イネミズゾウムシ	食害株率%	-	-	-	0.7	0.0	4.4	-	-	-	-	-	-
イトヨトウムシ	食害株率%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
クサキリ類	食害株率%	-	-	-	-	-	-	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1

平年は、過去10年の平均。ただし、欠測年は除く。

b すくい取り調査(20回振)でのウンカ・ヨコバイ類等の捕獲数

(a) 5月中旬移植「コシヒカリ」

調査月	6月				7月				8月				9月			
	成虫	幼虫	計	平年(計)	成虫	幼虫	計	平年(計)	成虫	幼虫	計	平年(計)	成虫	幼虫	計	平年(計)
ヒメトビウンカ	19.0	17.3	36.3	31.2	47.5	28.0	75.5	66.7	141.0	86.5	227.5	461.6	82.5	40.0	122.5	396.3
ツマグロヨコバイ	2.0	7.7	9.7	4.5	37.5	17.5	55.0	10.8	47.0	337.5	384.5	162.5	550.5	2,512.0	3,062.5	727.3
セジロウンカ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.5	1.5	1.5	9.5	3.5	13.0	4.7	0.0	5.5	5.5	9.5
トビロウンカ	0.0	0.0	0.0	0.0			0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
アカハネトリカスミカメ			3.0	5.3			0.0	0.2			0.0	1.1			0.0	0.0

平年は、過去10年の平均。ただし、欠測年は除く。

(b) 5月中旬移植「彩のかがやき」

調査月	6月				7月				8月				9月			
	成虫	幼虫	計	平年(計)	成虫	幼虫	計	平年(計)	成虫	幼虫	計	平年(計)	成虫	幼虫	計	平年(計)
ヒメトビウンカ	19.0	149.7	168.7	43.4	38.5	26.0	64.5	69.6	156.0	140.0	296.0	431.2	122.0	27.0	149.0	425.1
ツマグロヨコバイ	3.0	1.7	4.7	3.6	29.5	3.5	33.0	3.8	28.0	417.0	445.0	23.8	391.0	2,276.0	2,667.0	442.6
セジロウンカ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.0	1.0	1.1	2.0	2.5	4.5	5.1	0.0	0.0	0.0	12.0
トビロウンカ	0.0	0.0	0.0	0.0			0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1
アカハネトリカスミカメ			7.3	6.2			0.0	0.2			0.5	0.5			0.0	0.2

平年は、過去10年の平均。ただし、欠測年は除く。

(c) 6月下旬移植「キヌヒカリ」

調査月	6月				7月				8月				9月			
	成虫	幼虫	計	平年(計)	成虫	幼虫	計	平年(計)	成虫	幼虫	計	平年(計)	成虫	幼虫	計	平年(計)
ヒメトビウンカ	-	-	-	-	9.0	4.0	13.0	49.9	20.0	16.0	36.0	302.4	121.0	38.0	159.0	504.4
ツマグロヨコバイ	-	-	-	-	10.0	1.5	11.5	7.7	22.0	7.0	29.0	84.9	498.0	2,656.0	3,210.7	2,668.3
セジロウンカ	-	-	-	-	0.5	0.0	0.5	0.4	6.5	0.0	6.5	17.9	2.0	6.0	8.0	69.0
トビロウンカ	-	-	-	-			0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3
アカハネトリカスミカメ	-	-	-	-			1.0	5.2			0.0	0.8			0.0	0.3

-は未調査

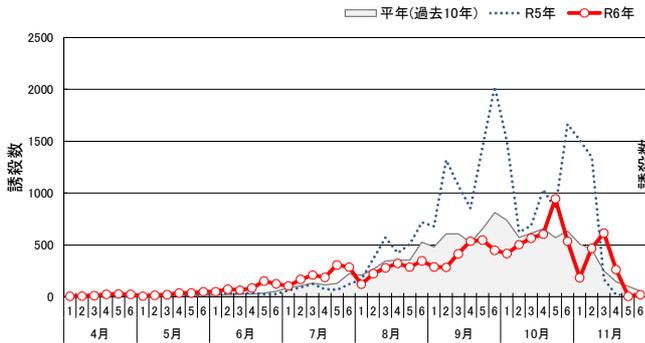
平年は、過去10年の平均。ただし、欠測年は除く。

## イ 野菜等

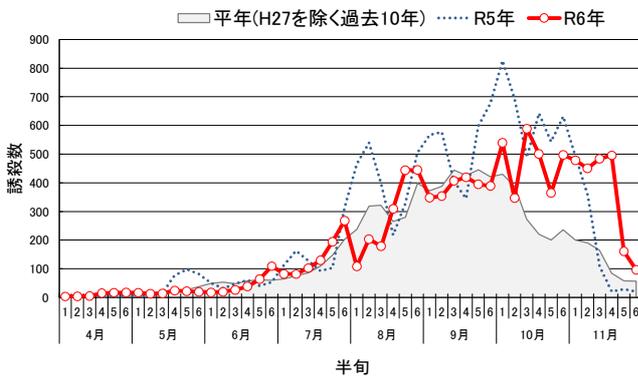
### (ア) ハスモンヨトウのフェロモントラップ調査 (4～11月)

対象作物: ブロッコリー 調査地点: 深谷市針ヶ谷(旧: 山河)

対象作物: ダイズ・野菜 調査地点: 熊谷市樋春



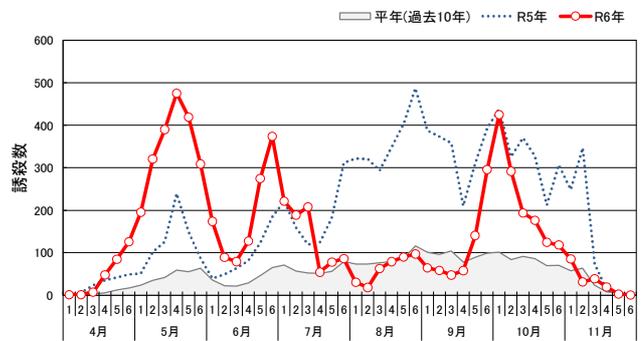
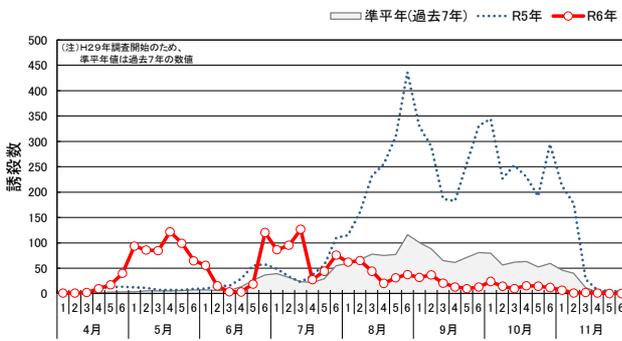
対象作物: イチゴ、ハウス花き 調査地点: 久喜市菖蒲町



### (イ) オオタバコガのフェロモントラップ調査 (4～11月)

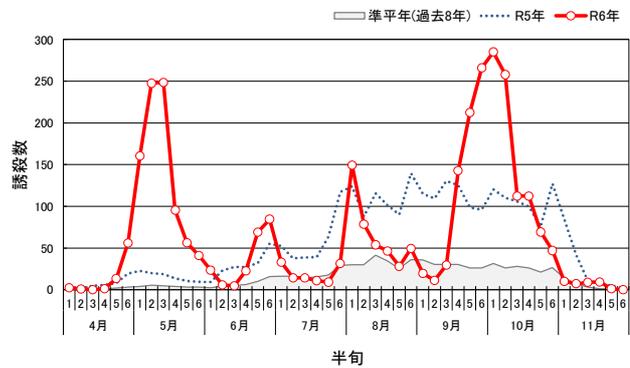
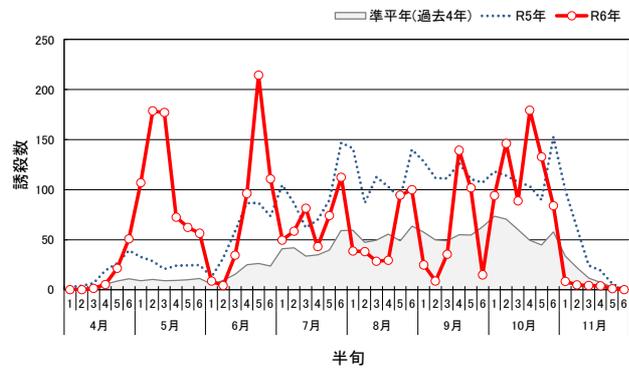
対象作物: 露地ナス 調査地点: 本庄市尻玉町小平

対象作物: 露地野菜 調査地点: 深谷市針ヶ谷(旧: 山河)



対象作物: ネギ 調査地点: 越谷市中島

対象作物: 露地ナス 調査地点: 杉戸町大塚

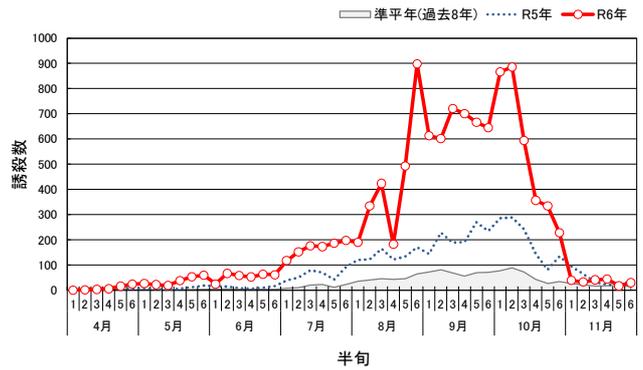


(ウ) シロイチモジヨトウのフェロモントラップ調査 (4~11月)

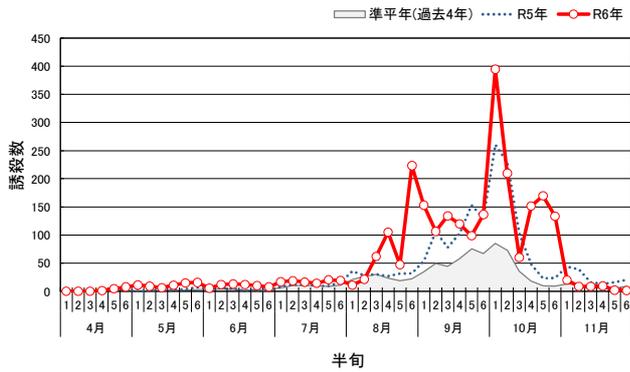
対象作物:ネギ 調査地点:深谷市新戒



対象作物:ネギ 調査地点:越谷市中島



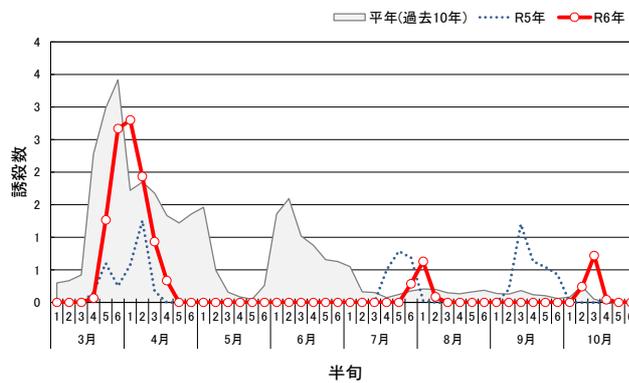
対象作物:ネギ 調査地点:杉戸町大塚



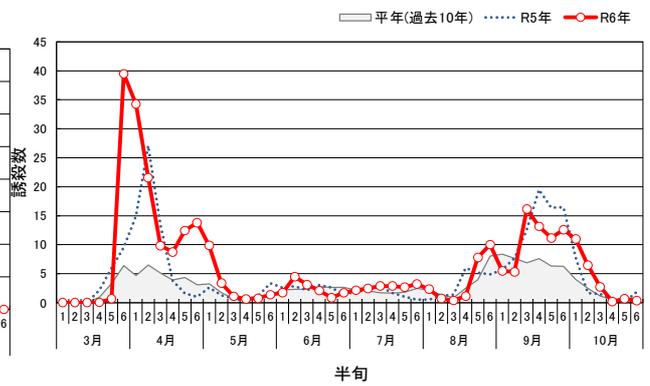
ウ 果樹

(ア) ナシヒメシンクイのフェロモントラップ調査 (3~10月)

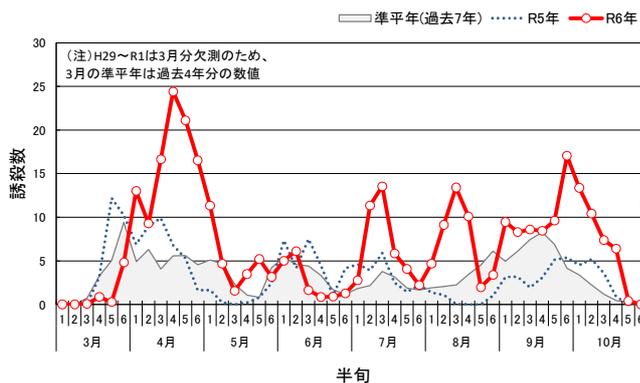
対象作物:ナシ 調査地点:鴻巣市常光



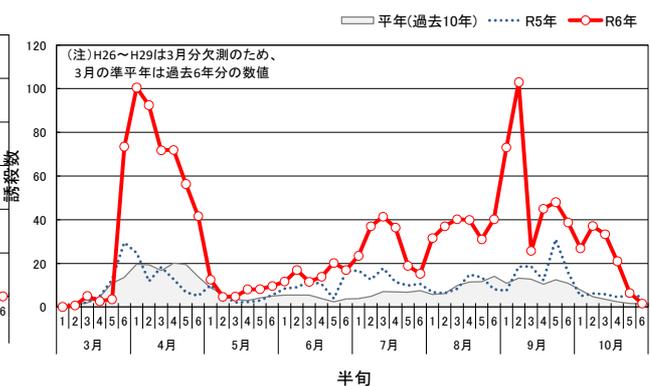
対象作物:ナシ 調査地点:上里町長浜



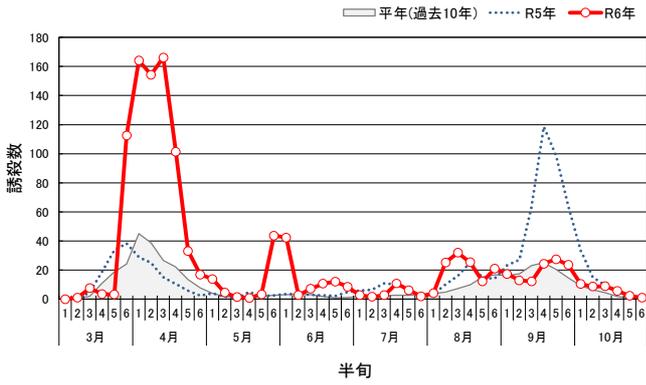
対象作物:なし 調査地点:久喜試験場



対象作物:なし 調査地点:春日部市内牧



対象作物:ナシ 調査地点:加須市鴻基

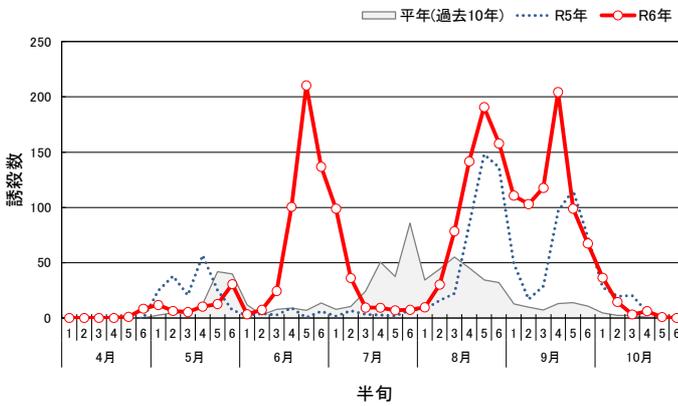


(イ) 果樹カメムシの予察灯調査 (4~10月)

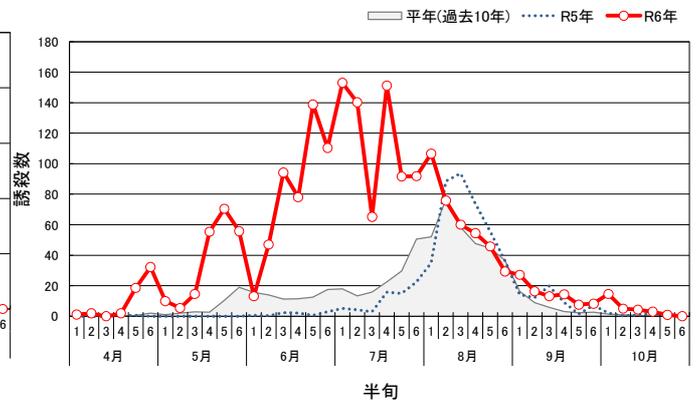
主要な果樹カメムシ (4種\*合計)

※チャバネアオカメムシ、クサギカメムシ、ツヤアオカメムシ、アオクサカメムシ

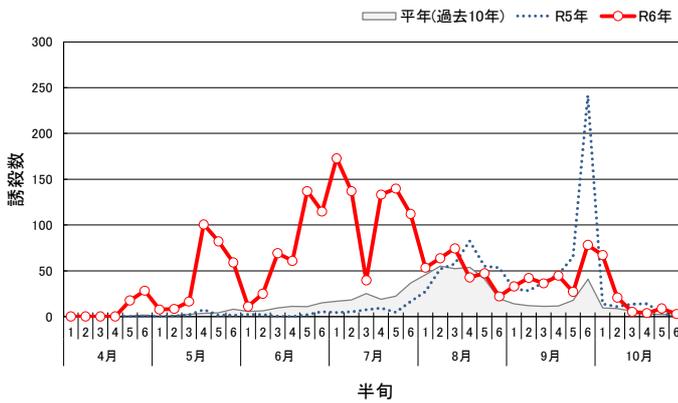
対象作物:ナシ 調査地点:上里町長浜



対象作物:なし 調査地点:春日部市内牧



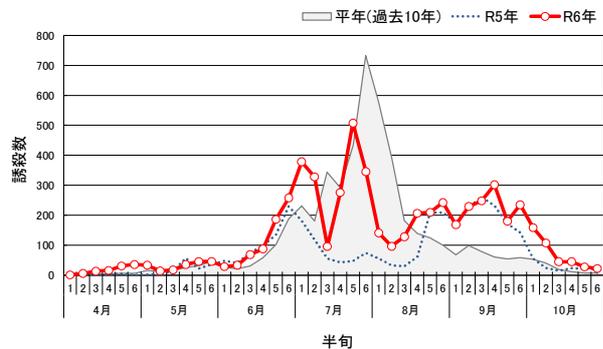
対象作物:なし 調査地点:久喜試験場



(ウ) 果樹カメムシのフェロモントラップ調査 (4~10月)

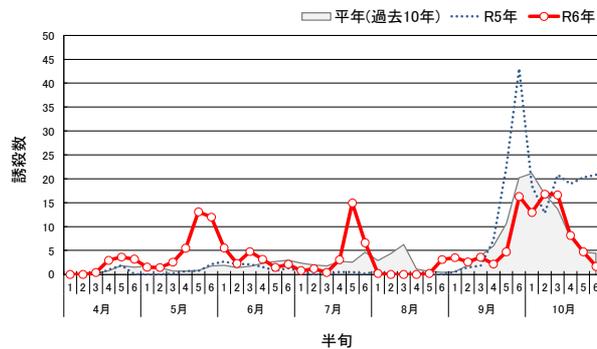
a チャバネアオカメムシ

対象作物:ヒノキ 調査地点:寄居町鉢形



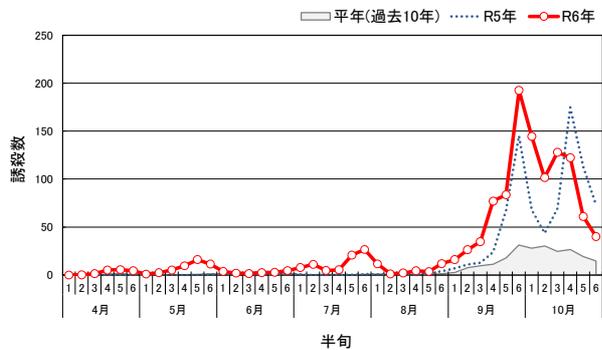
b クサギカメムシ

対象作物:ヒノキ 調査地点:寄居町鉢形



c ツヤアオカメムシ

対象作物:ヒノキ 調査地点:寄居町鉢形



### 果樹カメムシ類の越冬密度調査結果について

令和7年3月12日  
埼玉県病害虫防除所

ナシ、モモ、カンキツなどの果樹を加害する果樹カメムシ類の発生量の予測を目的として、チャバネアオカメムシなどの越冬密度調査を行いました。

調査の結果、チャバネアオカメムシ（越冬成虫）の捕獲数は1地点（計3㎡）あたり0.75頭/3㎡で過去10年の平均虫数（1.09頭/3㎡）と比較してやや少なく、確認地点率は63%で過去10年の平均地点率（43%）よりやや高くなりました。

果樹カメムシ類は、地域によって越冬密度が異なり、スギ・ヒノキが近くにある山間部の果樹園に多く飛来することがあります。

また、越冬密度が低い年でも気象条件やスギ・ヒノキの球果の量によって発生が多くなる場合もあります。今後、病害虫防除所が発表する情報（予察灯、フェロモントラップでの誘殺数）を参照し、果樹園等への初期飛来に注意して適切に防除してください。

#### 1 調査時期

令和7年1月23日～2月26日

#### 2 調査地点

8地点（表参照）

#### 3 調査方法

- (1) 雑木林の南斜面や林床から、1地点につき3か所（各1㎡）の落葉を採取。
- (2) 採取した落葉をビニル袋に詰めて口を閉じた状態で温室内（25℃加温）に2週間程度静置し、体色が緑化したチャバネアオカメムシ等の成虫数を調査

#### 4 結果

1地点あたりの平均越冬虫数は0.75頭で、過去10年の平均虫数1.09頭に比べ少なくなっています。確認地点率は63%で、平均地点率43%に比べやや高くなっています。（表、図1、図2）

特に越冬量の多かった昨年（1地点あたり平均越冬虫数4.75頭、確認地点率75%）と比較すると少なくなっています。

また、果樹カメムシ類の一種であるツヤアオカメムシ、イネの重要な害虫であるイネカメムシも落ち葉から確認されました。

表 果樹カメムシ類の越冬成虫数（生存個体）

採取地点	チャバネアオカメムシ	その他果樹カメムシ類	イネカメムシ	
			生存	死亡
東松山市松山	1		0	0
鴻巣市関新田	0		18	6
寄居町鉢形	1		0	0
神川町新里	1	ツヤアオカメムシ1	0	0
加須市上種足	1		173	19
蓮田市高虫	0	ツヤアオカメムシ2	13	3
春日部市内牧	0		0	0
久喜市清久	2	ツヤアオカメムシ2	30	197
計	6			

平均越冬成虫数（1地点あたり） 0.75 （過去10年の平均虫数 1.09）  
 確認地点率 63% （過去10年の平均地点率 43%）

注)イネカメムシは果樹を加害しませんが、近年、水稻での被害が増加しているため参考として掲載しています。

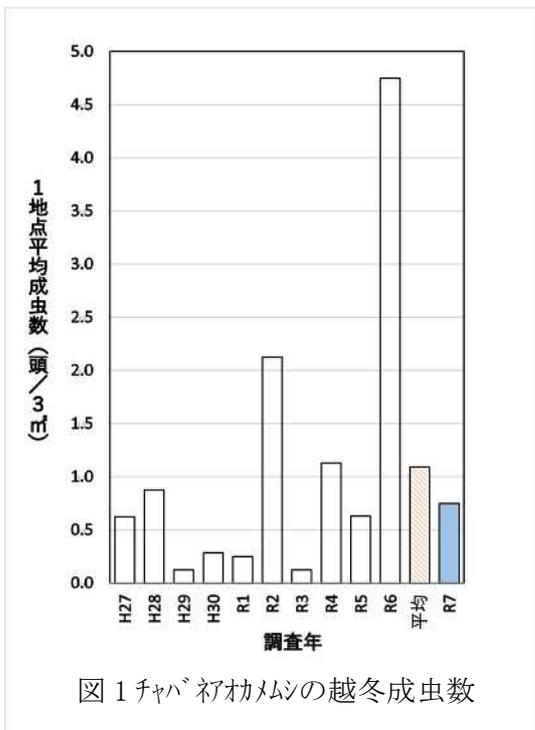


図1 チャバ初カメムシの越冬成虫数

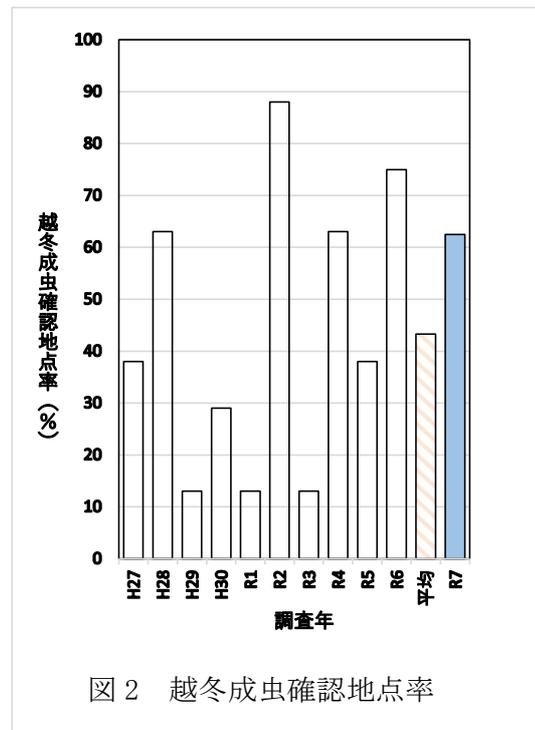


図2 越冬成虫確認地点率

## ○生態と被害

### ・チャバネアオカメムシ

体長10~12mmで光沢のある緑色で、前翅は紫がかった茶色をしています(図3)。広食性で、4月から夏にかけてはクワ、サクラ、ヒイラギ、キリなどに、夏以降はヒノキ、スギ、キリなどに寄生します。ナシ、モモ、ウメ等多くの果樹を加害しますが、幼虫はスギやヒノキの球果を餌として発育するため、本種は果樹園では増殖しません。



図3 チャバ初カメムシの成虫  
(体長10~12ミリメートル)

### ・被害(果樹カメムシ類共通)

果樹園に飛来し、果実を吸汁します。加害を受けると、吸汁部がくぼんで奇形果になります。収穫直前の被害では、くぼみの程度は軽くなりますが、吸汁部周辺の果肉は白くスポンジ状となり、商品価値が損なわれます(図4)。

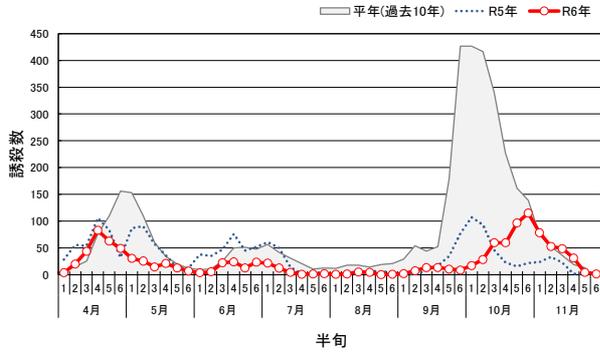


図4 被害を受けたナシの果実とその断面

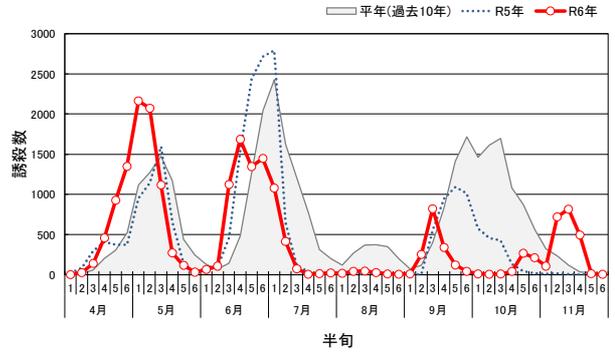
エ 茶

(ア) チャハマキのフェロモントラップ調査 (4～11月)

対象作物:チャ 調査地点:所沢市下富

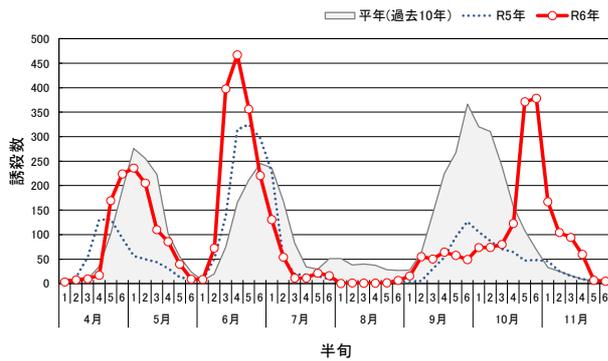


対象作物:チャ 調査地点:入間市根岸

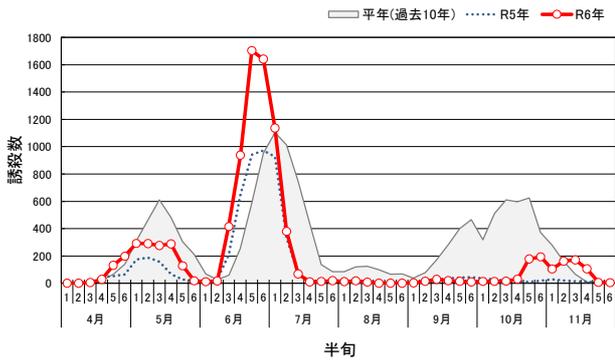


(イ) チャノコカクモンハマキのフェロモントラップ調査 (4～11月)

対象作物:チャ 調査地点:所沢市下富

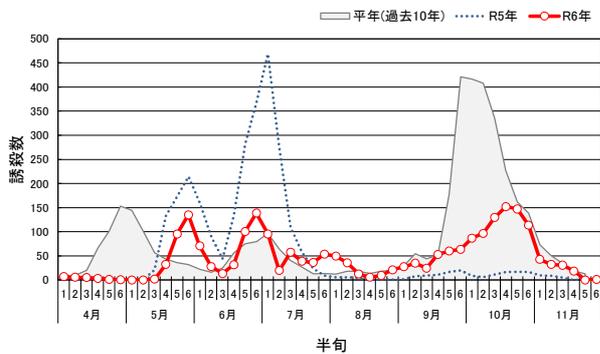


対象作物:チャ 調査地点:入間市根岸

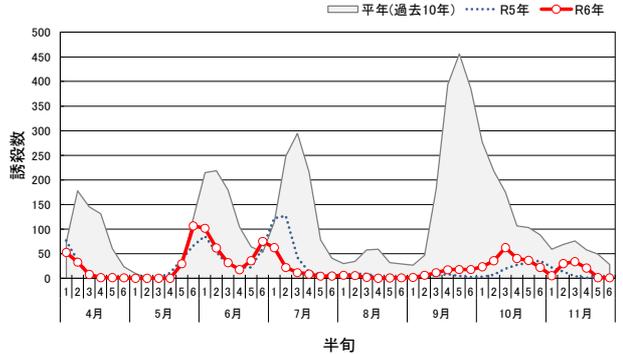


(ウ) チャノホソガのフェロモントラップ調査 (4～11月)

対象作物:チャ 調査地点:所沢市下富

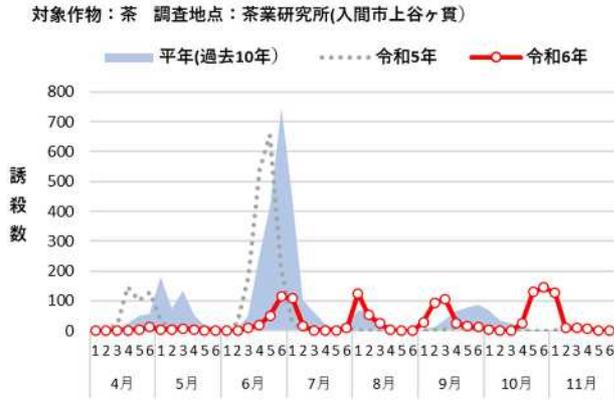


対象作物:チャ 調査地点:入間市根岸

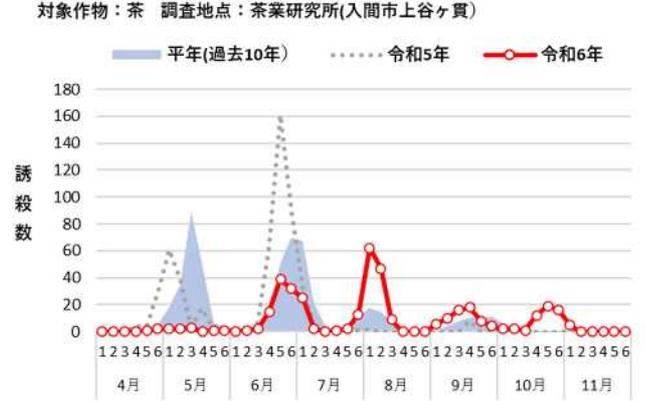


(エ) 茶業研究所のデータ

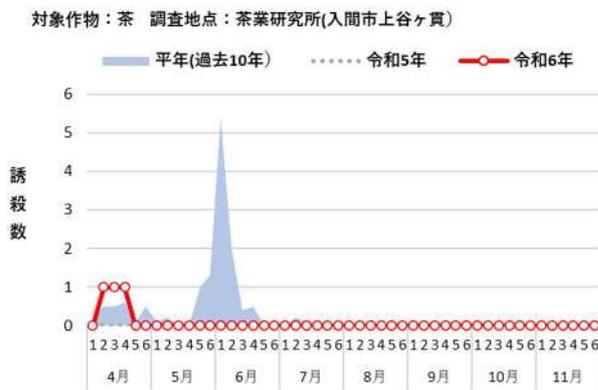
a 予察灯へのチャハマキの誘殺数



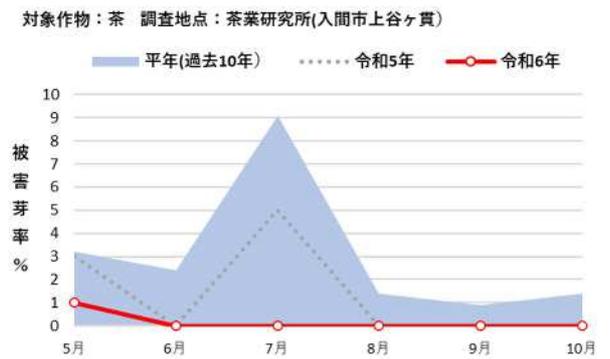
b 予察灯へのチャノコカクモンハマキの誘殺数



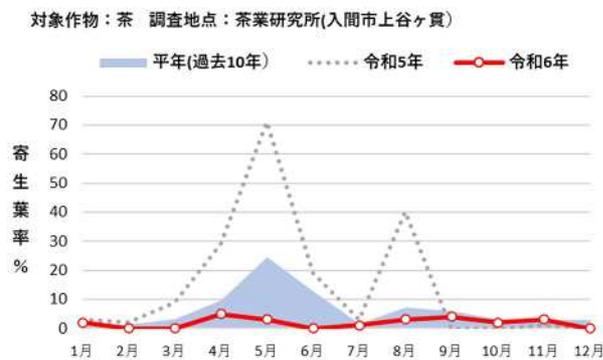
c 予察灯へのチャノホソガの誘殺数



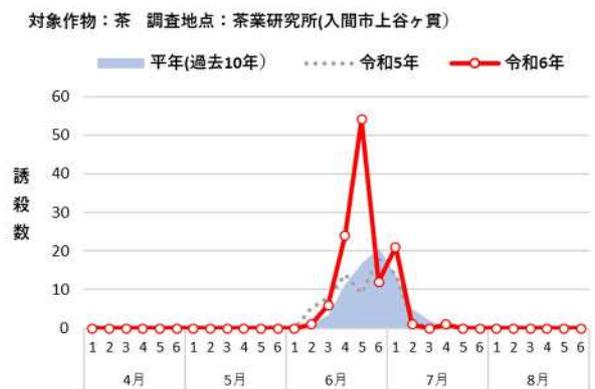
d ツマグロアオカスミカメ被害芽率



e カンザワハダニの発生推移



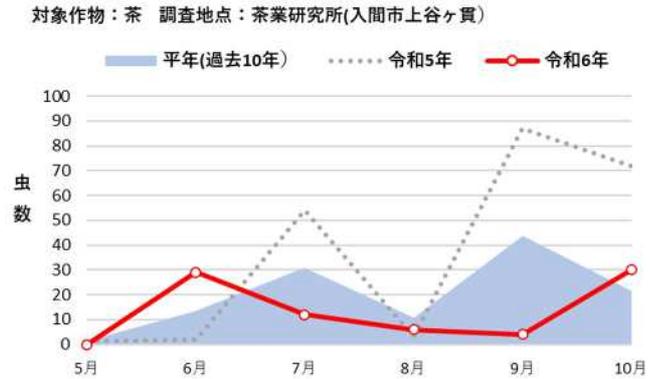
f 予察灯へのナガチャコガネ成虫の発生推移



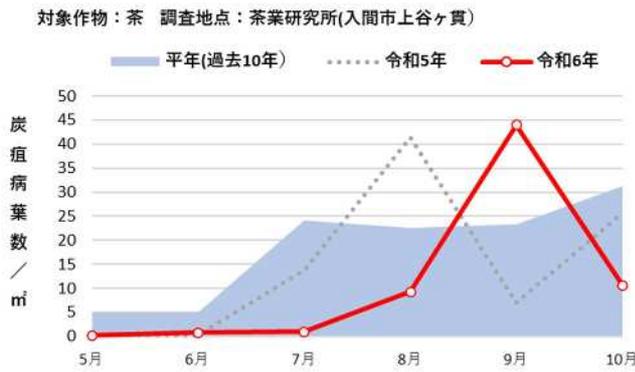
g チャノキイロアザミウマの発生推移



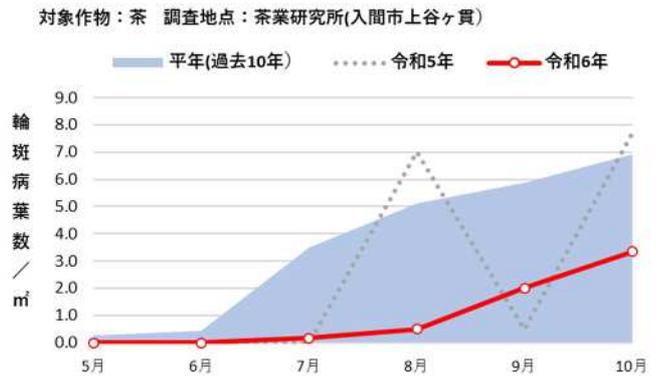
h チャノミドリヒメヨコバイの発生推移



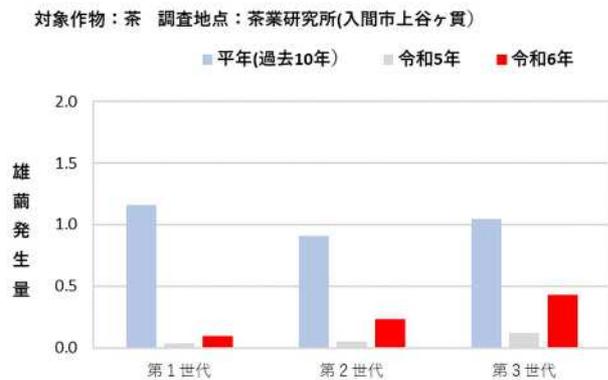
i 炭疽病の発生推移



j 輪斑病の発生推移



k クワシロカイガラムシの発生推移  
(30株あたりの平均)



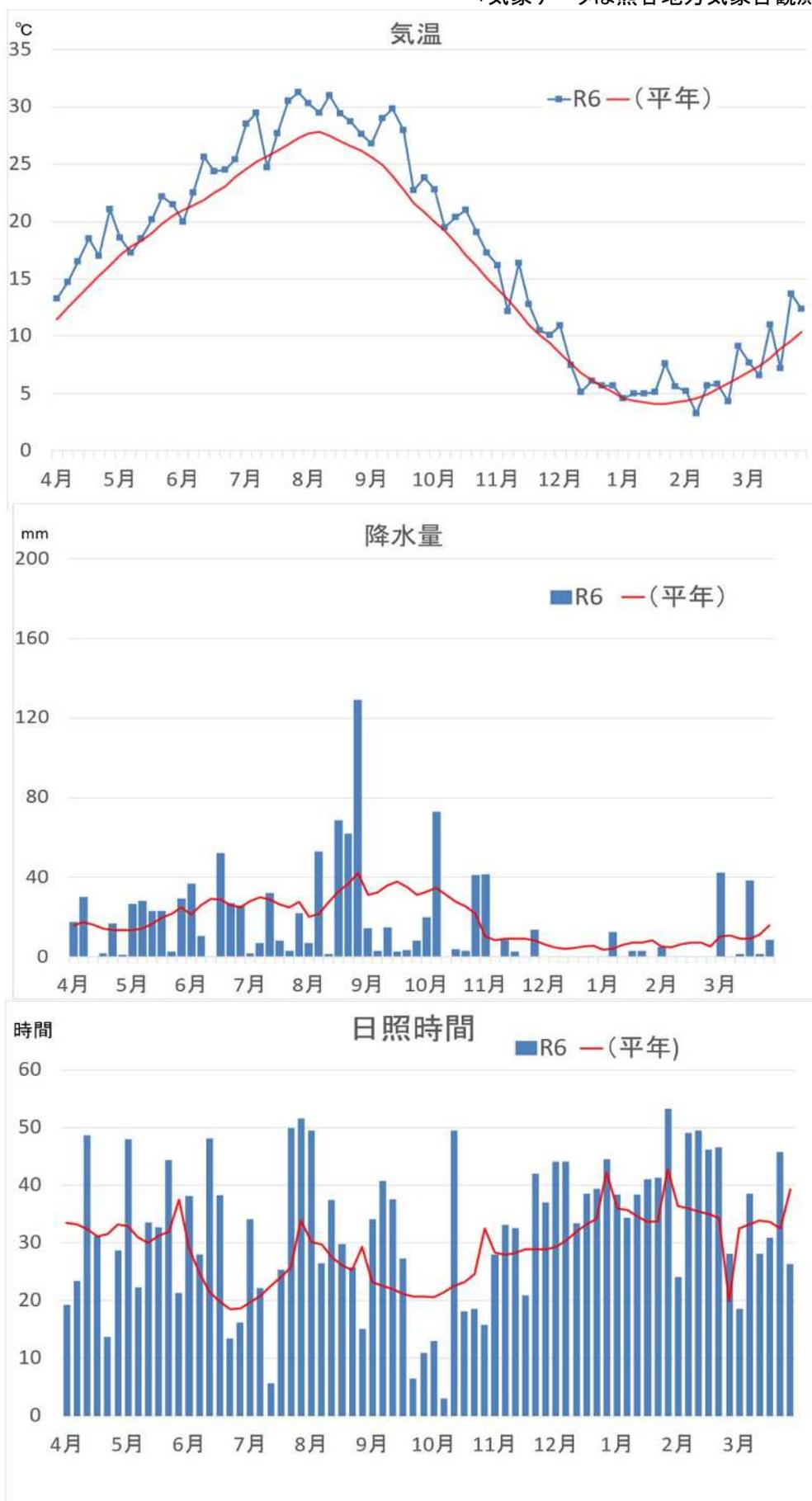
l チャトゲコナジラミの発生推移



(3) その他

ア 令和6年度熊谷の気象データ

\*気象データは熊谷地方気象台観測値を使用



ウ 過去の病害虫発生予察警報、注意報、特殊報発表状況

(ア) 警報

月 日	内 容
昭和 58 年 7 月 13 日	イネ縞葉枯病
昭和 59 年 6 月 22 日	イネ縞葉枯病
平成 5 年 8 月 20 日	イネいもち病 (穂いもち病)

(イ) 注意報及び特殊報

年	月 日	注 意 報	月 日	特 殊 報
昭和 54	5. 29	イネ縞葉枯病、黒すじ萎縮病	7. 20	キュウリ黄化病、キクのサビダニ、 チューリップのサビダニ イチゴ炭そ病
	7. 10	ナシのハダニ類		
	8. 8	ダイズ、野菜のハスモンヨトウ	9. 11	
55	4. 30	チャのサンカクハマキ		
	8. 1	イネいもち病 (穂いもち)		
	9. 9	キュウリ斑点細菌病、べと病、ナス 褐色腐敗病、トマト疫病、ニンジン 黒葉枯病、ネギ黒斑病、さび病、露 地野菜軟腐病		
57	8. 13	イネいもち病 (穂いもち)	3. 4	イチゴ疫病、クリのヨシノコブガ、 シクラメンホコリダニ
			5. 28	イネミズゾウムシ
			6. 1	コムギ条斑病
58	5. 23	イネミズゾウムシ		
	6. 3	イネ縞葉枯病		
59	2. 16	ムギダニ	7. 2	ニンジン斑点細菌病、タマネギ萎黄 病、クワイ茎腐病 シュンギクべと病 キュウリホモプシス根腐病
	4. 13	ムギアカタマバエ	10. 4	
	6. 14	イネ縞葉枯病	12. 21	
60	3. 19	キュウリ、ナス、トマト及びイチゴの 灰色かび病		
	4. 17	ムギアカタマバエ		
	5. 10	イネミズゾウムシ		
	8. 26	ダイコン及びハクサイウイルス病		
	8. 31	セジロウンカ		
61	4. 30	ムギアカタマバエ	1. 17	ニンジン菌核病、ダイコンバーティ シリウム黒点病 チャ輪斑病 ミナミキイロアザミウマ
	5. 12	イネミズゾウムシ	3. 28	
	7. 21	セジロウンカ	7. 9	
	8. 21	ニカメイチュウ第2世代幼虫		
62	5. 7	イネミズゾウムシ	3. 11	レタスビッグベイン病
	5. 11	野菜のアブラムシ類及びウイルス病		
	6. 17	イネ縞葉枯病		
	8. 11	セジロウンカ		
63	5. 10	イネミズゾウムシ		
	8. 19	イネいもち病 (穂いもち)		

年	月 日	注 意 報	月 日	特 殊 報
平成 元	8. 25	イネ白葉枯病	8. 25	イネ白葉枯病
2	5. 8 8. 1	ナシ黒星病 セジロウンカ	5. 8 9. 5	タバココナジラミ ミカンキイロアザミウマ
3	7. 12 8. 7 8. 7	ナシのカメムシ類 ニカメイチュウ第2世代 セジロウンカ	6. 4	カキクダアザミウマ
4	6. 19	ナシ、カンキツ類のカメムシ類	7. 29 12. 8	ヨメナスジハモグリバエ カラシコエのさび病(仮称)
5	3. 9 8. 5	チャのカンザワハダニ イネいもち病(葉いもち、穂いもち)	3. 9	マメハモグリバエ
6	6. 17	イネいもち病(葉いもち)	10. 7	トマトサビダニ
7	7. 21	イネいもち病(葉いもち)		
8	8. 6	ナシのカメムシ類	8. 26 9. 19	シロイチモジヨトウ オオタバコガ
9	7. 7 8. 1	ネギ等のシロイチモジヨトウ ナス等のオオタバコガ	6. 23 8. 1	トマト黄化壊疽ウイルス(TSWV) カボチャ台キュウリ立枯病
10	5. 14 6. 11 9. 30	ナシの疫病、黒星病 ナシのカメムシ類 チャのウスミドリメクラガメ		
11	9. 28	ダイズ、野菜のハスモンヨトウ		
12	9. 7	ダイズ、野菜のハスモンヨトウ		
13	6. 11 8. 16	ナシのカメムシ類 イネの斑点米カメムシ類	2. 1	イチジク株枯病
14			1. 23 5. 13 9. 17	トマトハモグリバエ アルファルファタコゾウムシ ルイスハダニ
15	8. 13	イネいもち病(穂いもち)	2. 10	インパチェンスえそ斑紋ウイルス (INSV)
16			6. 10	IYSV(Iris yellow spot virus) によるトルコギキョウ及びユーチャ リスの病害
17	6. 9 8. 4	キュウリ黄化えそ病(MYSV) 水稻のフタオビコヤガ	2. 17 5. 19 9. 16	トマト黄化葉巻病(TYLCV) キュウリ黄化えそ病(MYSV) クワシロカイガラムシ
18	6. 2 6. 27 7. 24 8. 2 11. 2	ナシのカメムシ類 イネいもち病(葉いもち、穂いもち) イネいもち病(葉いもち、穂いもち) フタオビコヤガ(イネアオムシ) トマト黄化葉巻病(TYLCV)	4. 11 10. 10 11. 15 12. 5	タバココナジラミバイオタイプQ フタスジヒメハムシによるダイズ被 害 ユリのイチゴセンチュウ クリバネアザミウマ(ミョウガ)
19	3. 27 7. 26 8. 13 9. 20	チャのカンザワハダニ イネいもち病(葉いもち、穂いもち) フタオビコヤガ(イネアオムシ) ハスモンヨトウ	3. 9 7. 26 8. 30 10. 4 11. 5	クロスジコバネアブラムシ(ミョウ ガ) IYSV(Iris yellow spot virus)によ るネギの病害 カキノヒメヨコバイ(カキ) アワダチソウグンバイ(キク科) プラタナスグンバイ(プラタナス)

年	月 日	注 意 報	月 日	特 殊 報
20	4. 7 5. 1 6. 4 10. 2	チャのカンザワハダニ ナシヒメシンクイ ナシ黒星病 チャハマキ	1. 16 3. 25 10. 30	ツマグロヒョウモン幼虫によるパンジー等の被害 クロトンアザミウマ (モントレイトスギ) キュウリ退緑黄化病 (CCYV:仮称)
21	5. 1 7. 29	ナシのナシヒメシンクイ イネいもち病(葉いもち、穂いもち)	11. 12	チャのミカントゲコナジラミ
22	6. 11 7. 8 8. 27	ナス、スイートコーンなどのオオタバコガ フタオビコヤガ (イネアオムシ) 野菜類、花き類及びダイズのハスモンヨトウ	2. 9 3. 31 7. 23 12. 21 12. 22	ハウレンソウのハコベハナバエ ブロッコリー菌核病 ウメ輪紋ウイルス (plum pox virus) トルコギキョウ葉巻病 トマトすすかび病
23	7. 20 8. 3	斑点米カメムシ類(アカヒゲホミドリカスミカメ、アカスジカスミカメ、ホリハリカメムシ、クモハリカメムシ) フタオビコヤガ(イネアオムシ)	7. 26 10. 26 12. 19	クロメンガタスズメによるトマト・ナス等の被害 チャノキイロアザミウマによるナシへの寄生と被害 ムギ類黒節病
24	6. 5	ナシのカメムシ類 (チャバネカメムシ、クギカメムシ、ツヤアカメムシ)	12. 6 1. 30	ネギ葉枯病菌による黄色斑紋症状の発生について スモモ斑入果病について
25	5. 28 5. 31 7. 19 9. 2	チャノコカクモンハマキ ヒメトビウンカ (イネ縞葉枯病) 斑点米カメムシ類(アカヒゲホミドリカスミカメ、アカスジカスミカメ、ホリハリカメムシ、クモハリカメムシ他) ヒメトビウンカ (イネ縞葉枯病、イネ黒すじ萎縮病) ツバキ、サザンカ、サカキのチャトゲコナジラミ		
26	4. 1 5. 23 6. 10 6. 30 3. 30	イネ縞葉枯病 (ヒメトビウンカ) イネ縞葉枯病 ナシのカメムシ類 (チャバネカメムシ他) 斑点米カメムシ類 イネ縞葉枯病		
27	7. 9 3. 28	イネいもち病 イネ縞葉枯病	10. 8	ヒサカキワタフキコナジラミによるチャへの被害について
28	7. 27	イネいもち病	6. 28	秋冬ネギ及び春ニンジンに発生したクロバネキノコバエ科の一種 ( <i>Bradysia</i> sp. ) について
29	7. 3	斑点米カメムシ類 (特に、アカヒゲホソミドリカスミカメ、アカスジカスミカメ)	7. 25 7. 31	ナス黒点根腐病の発生について クビアカツヤカミキリの発生について
30	8. 8 8. 8	野菜類、花き類のオオタバコガ ネギのシロイチモジヨトウ	5. 30 5. 30 6. 7	トビイロシワアリについて オリーブアナアキゾウムシについて トマト黄化病について

年	月 日	注 意 報	月 日	特 殊 報
平成 31 令和 元	4. 23 5. 10 6. 3 7. 8	イネ縞葉枯病（ヒメトビウンカ） 茶、チャハマキ ナシ、果樹カメムシ類 茶、チャハマキ	10. 15	ネギハモグリバエの別系統の発生について
2	7. 28 9. 11	イネいもち病（葉いもち、穂いもち） ネギのシロイチモジヨトウ	7. 27 8. 24 10. 13	ミナミアオカメムシの発生について ツマジロクサヨトウの発生について <i>Singapore shinshana</i> (Matsumura) (和名なし) (ヨコバイ科の一種) の発生について
3	7. 7 8. 31	イネいもち病（葉いもち） ネギ、シロイチモジヨトウ	8. 3 10. 29 10. 29	サツマイモ基腐病の発生について サクセスクイムシの発生について ヨツモンカメノコハムシの発生について
4	7. 11 7. 27 7. 27 9. 8 9. 22	ネギ、さび病 野菜類、花き類、オオタバコガ ネギ、シロイチモジヨトウ 野菜類、花き類、大豆 オオタバコガ ネギ・ブロッコリー、シロイチモジヨトウ	10. 21	タバコノミハムシの発生について
5	7. 11 7. 31 8. 15 8. 15 9. 25	野菜類・花き類、オオタバコガ イネ、斑点米カメムシ類 野菜類・花き類・ダイズ、オオタバコガ ネギ・ブロッコリー、シロイチモジヨトウ ネギ・ブロッコリー・ダイズ、シロイチモジヨトウ		
6	4. 15 5. 10 5. 13 5. 20 7. 8 7. 12 8. 8 8. 28	核果類（うめ、すもも等）なし、ナシヒメシンクイ 果樹全般、果樹カメムシ類 野菜類・花き類、オオタバコガ ムギ類赤かび病 イネ斑点米カメムシ類（イネカメムシ、ホソハリカメムシ） 果樹全般、果樹カメムシ類 ネギ・ブロッコリー・ダイズ、シロイチモジヨトウ なし、ナシヒメシンクイ	10. 18 10. 31	トマトキバガの誘殺について チュウゴクアミガサハゴロモの発生について